

第13回銀華文学賞発表

銀華文学賞

再開二回目の銀華文学賞は、日本全国から一九六篇の御応募をいただきました。今年には多彩な作品が寄せられ、活気に満ちた予備選考となりました。心から御礼申し上げます。

予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八寛正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は次号以降に順次掲載させていただきます。

第十三回銀華文学賞授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、コロナウイルスの関係から見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきます。御了承ください。

なお銀華文学賞は明年も年齢を四十歳以上に繰り下げさせていただき、枚数、締切、審査料などすべて同じに募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

最優秀賞

「出所証明」

原浩一郎

(滋賀県大津市)



優秀賞

「トランクルーム」

室町 眞

(東京都杉並区)

「ラストオーダー」

塩崎憲治

(山形県米沢市)

「マスク」

眞住居明代

(大阪府東大阪市)

奨励賞

「稲作拾遺譚」

嶋津治夫 (千葉県香取市)

「雨があがる前」吉岡幸一 (福岡県福岡市)

「家族の肖像」折口 眞 (埼玉県所沢市)

「バデイスの記憶」木村雅樹 (埼玉県三郷市)

「棄民の浜」久保信之 (神奈川県横須賀市)

「熱帯林」篠崎フクシ (東京都小平市)



銀華文学賞優秀賞メダル

佳作

- 「碁盤」 加崎希和
- 「鈍色の鉄路」 梶川洋一郎
- 「星と七夕」 山田 明
- 「強制養子縁組」 西本美彦
- 「マリィ・アントワネットのお茶会」 菊野 啓
- 「水辺のメモリー」 土田ひろし
- 「曠日」 塩崎勝彦
- 「三社祭」 大森康宏
- 「託された日記」 松本昂幸
- 「夏衣更紗」 桃乃木權士
- 「Eと老人」 林 晋作
- 「牡丹雪」 前岡光明
- 「幽霊」 本田敬幸
- 「その灯の盾」 宮内 元
- 「蒼い残滓」 勢 隆二

「幾千世」

悠希マイコ

「蛇を飼う」

高倉麻耶

「みかん色の夢」

佐藤 勉

「よじわの茂蔵」

西山慶尚

「神棚毀し」

平安名尚

「行き合いの空」

秋 檀

「月夜」

神山修治

「トウーランドット 誰も寝てはならぬ」

内田聖子

歴史小説賞佳作

- 「室津の遊女友君」 宮本義則
- 「岸和田合戦顛末記」 中野雅丈
- 「見たい夢」 南 理維
- 「坂の上のインディアン」 吉田満春

選評

これしかない

八覚正大



今年は、とにかくコロナウイルスの世界的猛威に席巻され、外出の自粛要請も受け、夏の一段と厳しい猛暑酷暑の攻勢に晒され、晩秋また第三次のコロナ感染に襲われている。

でも人間の本质は動くこと、身体のもので規制されても脳が活性化すればよく、その思考の最高の道具は〈言葉〉であり、それに曲がりなりにも携わる我々は、ある意味それを駆使し深め得るチャンスかもしれない。何嘆くことなぐ多少拘束を余儀なくされた空間で、言葉の飛翔を楽しむ……。最近は〈事実を把握し、でも気分を身を委ねず、価値判断を擦り抜けて、行為を楽しむ〉ということをもっと一日々生活している。折角なのでもうひとつ、〈臆せず、

河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は二〇一五年より、銀華文学賞からまほろば賞の中に移され、同人雑誌掲載の小説作品を対象にし、まほろば賞選考会において同時に選考され、決定されることとなりました。

受賞者には賞状、賞品、賞金五万円がまほろば賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



躊躇わず、拘らず、留まらず、高齡青年と自称しつつ新しいものを見出し関わっている。

最優秀賞「出所証明」

まず、読んだ時、当選作はこれしかないと思われた。見事な描写と克明で分かりやすい文章。場面の転換の妙、ラストへ向かって組み立てられ流れていくストーリー、どれをとってもほとんど完璧である。善悪のどちらかへ転びそうな紙一重のところで、この出所した男のこの世への二度目の出生がなされ得たのだと思えた瞬間、感動の涙を禁じえなかった。それぞれに大なり小なり個性の強い選者四人が異口同音に当選作に推したのもでもあり、銀華文学賞の今までの受賞作品の中でも、これほど直截に感銘を与えたものは初めてだと告白しておきたい。

一応ストーリーを描けば、人を泣かせたり甚振^{いたぶ}ったりした過去のある男が、出所する。目の前で見せしめにされた殺人に怖くなり、今度はまともな人間として世の中に出直そうとしたのだ。しかし、肝心の出所証明がなくなっている！ それは一緒に出所した仲間のちよつとした悪戯・いやがらせで、ある団地の回覧板に張り付けられていたのだ。

これでは保険証も取れず就職もできないと、再度交付してもらったため元の刑務所に電話するが、冷たく断られる。困って頼った羽振りの良いかつての務所仲間には、善人ぶるな——と一括され、再び悪への誘いを受ける。万事休し

つらく当たった上司との葛藤とその死……と、また趣味の釣りでの憧れの大岩魚への思い、家族（折り合えなかった息子）のことが描かれる。

〈栄光の階段を踏み外した者、心を病み生きた屍となった者、喰い込むロープの軋みを耳元で聴いた者、自分にして、重篤な肺炎を隠し通した多忙な日。人間ハードルの障害物レースで、奇跡的にゴールにたどり着いたのは自分一人だった〉という描写に象徴される会社人間としての激務。それは〈トップの補佐役という名の奴隷となった進（主人公）は、全てのプライドを捨て、あらゆる屈辱に堪えながら、上司となった黒沼に仕えた〉と具体的にある。

息子に対しては〈荒れ出した息子の部屋……髪の毛が、痛々しく重なり合っている。……息子は大学を中退し、居場所を求めた放浪の果てに、今はマニラのスラム街で、それなりの所帯を持っている〉という家族への悔い。

そして裏で支えてくれた妻への思いから、梓川への旅に出、そのホテルのマスターの釣りへの言葉とその地の雰囲気にかわれ、これからの闘病への勇気をもらったように結末を迎える。

仕事の話、川の主の大岩魚との格闘、それぞれにかなり思いが込められ、インパクトは感じられる。しかし、話が詰め込まれ過ぎた感があり、それぞれの連携構成のバランスが取れていない気がした。会社時代の話、息子の話は、

て途方に暮れ、花火の音のする雨の中を歩いていく……そして他者への己の罪深さと己自身の成育歴の悲惨さを回想し、堪えられなくなってくる……その時、あまりのびしょ濡れの姿を見た若い子連れの夫婦が傘を差し出してくれる。その後、元刑務所の刑務官が主人公を見つけ、出所証明が見つかったことを告げる。絶望の縁にいた主人公は、雨の中嗚咽しながら、道を歩いて行く……。

生れつきの悪人も善人もいない、ただ様々な状況の中、偶然も含め些細な関り・できごとによって、どちらかへ追いやられていくのだ。人間はこの世に母親から産み出される。しかし身体はそうであっても、心は自らの経験や意思を積み重ねて生み出すものだ。この男の本当の出所証明とは形としての紙ではなかった。己の悲惨で悍ましい過去という産道を再び抜け直し、他者からの善意の偶然を甘受し得て嗚咽する、それこそ、この男の〈心の産声〉だったのだ。

男は本物の『出所証明』を得られたのだ。ディケンズの『クリスマス・キャロル』を思い出した。松本清張も……端的に言えば〈悔い改め〉のテーマといえよう。でも、評を書きながらまた感動の涙が出てくる！ 黒澤明がいたら、見事に映像化してくれるだろう……。

優秀賞「ラストオーダー」

転移性膀胱がんを宣告された主人公の過去の回想（世界に最高品質の医療機器を届けたいという思いの一方、己に

それだけで書き切られたものを一度読みたいとも。

優秀賞「マスク」

コロナウイルス防御のマスクづくりの話。頼まれたマスク制作のために、粉骨砕身働く主人公。かつては売れないハンドメイド作家の六十代後半。

〈私の欲しいのは金ではなく生き甲斐なのだ〉。その中で、この主人公の自覚が進んで行く。〈私は自分でも愚鈍な性格という自覚があつて、それでずつと劣等感を感じてきたのだが、そのマイナスの自覚が今度ばかりは役に立った。マスクを作るために毎日何時間もミシンを踏み続け、同じ工程を何百回も繰り返す。それは愚鈍だから出来ることであつた〉。ところがそれに必要なゴム紐が無くなってしまい、それを探さず中絶りつかれたようになる。そのラストの描写が良い。

〈不意に酸っぱいものが喉元にせり上がってきた。……手洗いで口をすすいで顔をあげる。その時鏡の中にひとりの女が映り込んでいるのに気付いた。知らない女だ。艶のないばさばさした髪……生気のないその顔の瞳の部分だけが異様な光を放っている……瞳の中の異様な光に鋭く心を射抜かれて、私は鏡の前に呆然と立ち尽くしていた〉と。

優秀賞「トランクルーム」

自分の家ではない自由な空間を求めて、「賃貸式トランクルーム」を借りることになった話。それを借りたばかり

の感覚は新鮮だ。(鍵を差し込んでドアを開け、室内に入つて電気のスイッチを入れた。心臓がドクンと脈を打つ。かつて大学生だったころ、交際相手の女の部屋を初めて訪ねた時と同じ興奮が瞬時に蘇った)と。コンセプトは(ここを自室とし、秘密の隠れ家代わりに使用して、だれにも邪魔をされない自由な時間を過ごす)というもの。その後、主人公のやりたかった行為を展開したり、他の部屋の事が描かれる。SM愛好家や仏壇を入れる男まで出てくる。最後は妻に見つかって押しかけられ……発想は面白かったが、展開にどこか無理があるように感じられた。

奨励賞「稲作拾遺譚」

稲作の研究に人生を賭けた主人公、ジャンボタニシをはじめとして、様々な稲の害虫が出てくる。イネドロオイムシとの格闘はなかなかよく伝わってくる。まだ随所に宮沢賢治も引用されている。小説というより、ある種、情を込めた記録作品という感じだが、時々逢う耕作者H氏という人物をさらに造型させて行ったら面白いかと思われた。

奨励賞「雨が上がる前」

セレクトシヨップ「サン」を一人で経営する女性の話。夫とやる予定だったのだが、先立たれてしまっている。道を挟んだ洋食屋さん、白いワンピースを着て見せた若い女性客、入院している母親がマグカップを欲しいというので買いに来た少年、洋食屋の火事とその始末……それらを通

くる。小田は事故だったのか、自死だったのか。そこへの主人公の洞察が欲しかった気はする。それらを経て、己の家庭へ目を向け直す主人公。

小田という名前の連呼が多すぎる反面、その人物のイメージは今一つ伝わってこなかった。

奨励賞「熱帯雨林」

会社勤務の過酷さを描いている。亀のフーコーや同僚のマタヨシは描けてはいるが、もう少し踏み込みつつ、熱帯雨林を俯瞰して見せて欲しい気もした。

奨励賞「棄民の浜」

コロナウイルスも取り上げ、疫病への思いをなかなか幻想的に描いてはいるが、そこ(恐怖)へ踏み込まなくても、差別を考える教育の仕方はある気がした。

以下は佳作について。

「見たい夢」前回は秀吉の目から描いた時代物を書いていた作者。文章力抜群で、それは完成されていると思う。

今回は、秀吉と柴田勝家との戦いの、柴田側の一兵卒の視点から描かれている。間に兵卒を装った二人の間者の生き方を交え、主人公は手柄を上げて帰り、結婚したい娘もいる設定。

大状況を俯瞰しつつ、なかなか見事に作品を作り上げている。最後は結局、命からがら帰ってくると、娘は弟と祝言を上げることになり、残ったのは「命」だけという、惨

して、ほのぼのとした人情の感覚が伝わってくる。まだ若いから実家に戻って、と言って来る母親もいるが、本人は店を続けていく覚悟をもつ。善人だけの作られた空間だが、ホームドラマを見ているようで心地よかった。

奨励賞「家族の肖像」

息子を持つ母親と、娘二人をもつ父親、その二人が再婚する苦労話。ある種の複合家族。それを妻の側からの視点で描いている。特に話の山が大きくあるわけではないが、懐いてくれない相手の二人の娘など良く描かれ、でも生理に立ち合ってあげることを通して、だんだん打ち解けていく。そして夫婦の間にも新しい子どもが誕生する。

だいぶ前に、フランス在住のルポライターがフランスの家族事情について、このような連れ子を持った親同士の結婚による「複合家族」というものを書いていたことを思い出した。その一ケースとして日本でも書かれても良いとは思った。

奨励賞「バティスの記憶」

主人公はとある居酒屋で小田という人物に逢う。小田はいつも悟りきった顔をし、人の言葉をはぐらかすようなところがあつた。趣味も特技もない男で、不祥事で会社を辞めていたが就職が決まる。主人公はそれを喜んであげようとした矢先、小田は事故で死ぬ。その後、男に捨てられ身ごもったまま自死しようとして、小田に救われた女性が出て

めな気づきで終わる。人間の欲と現実を的確にとらえた快作と評者は感じた。

「曠日」結婚を考えていた「あの人」と、公園で良く出会うその父親の「老人」と、縁の下に住み着いてしまった「むく犬」、それだけの登場人物という設定。あわい関係が淡々と描かれ、互いに何を侵すこともなく、日常はゆっくりすることもなげに動いていく。しかし、その淡い関係の中に命の真実が捉えられていると感じた。しかもそのトーンは最後まで落ちなかった。

連想だが、カフカの『掟の門』やブツツァーティの『タール人の沙漠』など思い出した。このような作品も文学として、私は大切なスタンスのジャンルだと思っている。読み応えを感じた力作と評価したい。

「よじわの茂蔵」酒がめっぽう好きだが、ほとんど何の役にも立たない、村のデクノボー茂蔵と、ある意味彼の面倒を見つけてやった定道の話。焼酎の盗み飲みくらいがドラマだ。そして茂蔵はあっけなく死ぬ。淡々と描かれているように見える。

しかし、茂蔵には特攻隊で死んだ義行という、茂蔵と同じ年の息子がいた。隣同士の二人はいつも一緒に遊んだ仲だった。茂蔵は死ぬ間際にその義行のことを見たと言う。

「馬鹿言うな、義行はもうとうの昔に戦死しちよる。死んだ者が会いにくるわけなからうが」「いや、あれは間違

いなく義行君じゃった。ちゃんと飛行服を着ちよったけん」茂蔵は核心に満ちた口調で言った。おそらく、息子と共に生きた過去を持つこの茂蔵の記憶こそ、唯一最高の定道への恩返しだったのだ。さり気なく、しかし深く静かに人間の縁をつづった秀作であると思う。

「水辺のメモリー」子どもを連れて妻が実家に帰った時の事、居酒屋に入り飲んでいると、故郷の少年時代の女友だちに再会する。故郷の少年時代には川辺でよく遊んでいたことを思い出す。ちょうど思春期、その砂地で気持ちの良い自慰行為をしていたことがあり、それを彼女に見られた過去があった。そんなことを思い出しつつ、ちよつと気持ちは不倫へ行きかけるが家庭に戻るといふ話。盛上がりはないが、水辺の描写は、実に瑞々しく読めた。

「三社祭」連れ合いを失くし思い屈していたが、同級会の幹事役を引き受けてからは、元気を回復した主人公。その会と、往きかえりの中で酔っているいろいろな回想したことが語られている。とくに浅草、三社祭の描写はなかなか。ちよつと分かりにくさはあったが、作者の筆力はかなりと今回も敬服する。

「Eと老人」Eとは何？と読み進みウナギの英語の頭文字と分かる。末期の癌を病む主人公、病室の窓から川を眺めつつ、いろいろな回想したことが語られる。初めの三、四ページのウナギが長い旅を経て戻ってくるという描写は

なかなかだった。

「月夜」家へ帰る時、若い見知らぬ女性が、己の家の辺りに消える。主人公の青年は、おかしいな？と思う。それは実は祖母で、祖母もまた己の亡き夫を主人公（孫）に見ていたという、ちよつと気の利いた小品、面白かった。

「幾千世」文盲の母親と伝染病に罹り瀕死の妹、それに付きそう少年の兄。貧しい悲しさがよく描けてはいるが、この少年「孝市」のこれからこそ読みたいと思われた。

「蒼い残滓」工場内の青春時代、仕事と共に野球チームに打ち込んでいた主人公が、憎い上司にボールをぶつけた話。面白さは感じられた。

「牡丹雪」貧乏画家の父と、デザイナーの娘の視点からの関り。良く描けてはいるが、芸術というものの持つ（何か）への、追求がもう少し欲しかった。

「夏衣更紗」ある母子の危急に手を貸した主人公。相手の母子の家に住み込むことになる。吸汗性の昆虫アザミウマは良く描かれている。主人公はその家族と結び合う決意をする。もう一步踏み込むと、なかなかの小説になったのではと惜しまれる。

「神棚毀し」神棚を壊し、村八分を経験した家族の話、史実としては興味を惹かれたが、小説として何を訴えたかったのか。

「幽霊」体の弱い中年男性が、高校二年生と関わり、対

話をしていく話。中々教養的な事柄も出てくるが、一つひとつの内容について作者なりの核心をつく言葉で読みたいと思った。

「蛇を飼つ」ルームメイトの話、『道成寺』が下敷きらしいが、女同士の関係の何を描こうとしたのか。

「トウランドット 誰も寝てはならぬ」有名だった詩

入選

「茜色のカノン」	宮 幸作
「誓い」	森園哲也
「夏の日」	K・暁夏
「奇老譚―月は見ていた」	しのぶ憂一
「軋む齒車」	飛葉哲朗
「黄身子と水仙」	安保美智子
「秋月の朝露」	笠置英昭
「ムカデ記念日」	木澤 千
「見えない壁」	春名紀子
「脱獄犯と蛙」	横山太一
「花梨の花」	梨田智光

人との関係が興味深く描かれてはいる。ただ、小説より評伝にした方が良くもいられない。



「芝居」	白峰 綾
「タカヤスの墓参り」	小林 健
「まぼろしの声」	星野秀水
「はつこい」	鈴木あぐり
「虫」	待木 啓
「『なんでもあり』やった」	土井莊平
「おとうと」	はるひ
「ニット帽と詩人」	神郷愛光
「父の髪」	河野つとむ
「冬の夢の終わり」	武藤蓑子

力作ぞろい

小浜清志



今年も力作ぞろいであった。かつて自分史や遺書まがいの作品もあったが、近年は文学的に質が高くなってきた。今回当選になった「出所証明」（原浩一郎）は非の打ち所のない作品である。刑務所を出た男が出

所証明を役所に提出することで健康保険証を受け取り、就職のときの身分証明とすればよかった。という書き出しに度肝を抜かれたが、扉の内側を歩いてきた人間模様には圧倒的な物語の強さを感じた。何年か前にも当選作を書いており、筆力も題材選びも秀逸である。これだけの作品を書ける人が無名でいることが不思議でならない。

優秀賞になった「マスク」（眞住居明代）はまさに今書かなくてはならない作品で時機を得ている。コロナ禍でマスクが不足になっていく世情をうまく取り入れる着眼点はユーモアもペーソスもあり読み手を惹きつける。

「ラストオーダー」（塩崎憲治）は、企業戦士として生き抜いてきた男が定年後に膀胱がんのステージ四と宣告され

るところから幕が上がり、来し方を懐かしく時には憤りを覚えながら振り返る。その視線に作者の人間味があふれていて作品の奥行を豊かにしている。趣味である溪流釣りでこの幻の大岩魚との格闘も仕事人らしい姿勢が現れていて読後感も良かった。

「トランクルーム」（室町眞）は、奇抜な発想に作者の慧眼を感じた。賃貸式トランクルームは賃料に比べれば意外と広い空間を自由に使用できることに思い当たった誠司は意を決して不動産屋に向かう。しかし、どこにも空きはなくキャンセルが出るのは一、二年もかかると言われ夢はしぼんだかに思われたが二週間後に空きが出たとの電話が入り誠司の僥倖が始まる。牢獄然となっていた自宅の他に身を隠せる空間がもてたのである。定年男の悲哀が滲み出ている。

奨励賞の「家族の肖像」（折口眞）は、子づれの再婚同士の家庭にまつわる話をうまく描いている。私は高得点で押したがあまり賛同が得られなかった。無理に築こうとする新しい家庭にきしみがあるのは当然である。敢えて小説にしようとする小細工はなく、ありのままの姿を冷静に捉えようとする姿勢がリアルであった。かなり難しい題材と格闘している痕跡が至るところに現れていて脱帽する思いで読み終えたことを告白する。

「棄民の浜」（久保信之）は、恭子と付き合いだしてまだ

三カ月。お盆休みを利用しての初めてのキャンプをするこ

とになり、房総の海岸を訪れる。郷土史を巧みに使い、訪れた場所の怪奇現象へと入っていく様には思わず鳥肌が立った。しかし男と女がキャンプといえども夜を共有するわけであるから同衾は避けられないことであるが、作者はあえてそれに触れようとはしない。であるなら、道に迷ったあぐく TENT を張ることになったとかもう一工夫が欲しかった。

「バデイスの記憶」（木村雅樹）。バデイスとは東京下町の小さな雑貨屋でいつも小田が買っていた薔薇の造花につけられた名前だった。小田の子にまつわる真相が次つぎと明るみになっていくスリリングもさることながら、うまい書き手である。登場人物の扱いもうまく、魅力ある人たちを見る目も温かい。ただ、小田の死の扱いに不満が残った。

「雨が上がる前」（吉岡幸一）。わずか九坪、この春貯金を切りくずしてオープンしたばかりのセレクトショップ「サン」の女主人として働く私は本来ならば夫と一緒に店を切り盛りするはずであった。だが、その夫は店のオープン四カ月前に心臓の病で世を去る。「私」は夫の意志を継ぐ格好で毎日店を開けている。店の向かいにある洋食屋との付き合い合い、店を訪れる客との交流など爽やかに描かれていて好感がもてた。ただ、男性が女心を表現するのはかなり難しいのであり、それが評価の低さになったのであろう。

それ以外に何作か気になった作品を取り上げたい。

「牡丹雪」（前岡光明） 売れない画家を父に持つサチコが二年ぶりに故郷を訪れる。父も母も今はなく思い出の写真館と向き合う。金を借りるため隣町の親戚を訪ねた帰り、山本写真館に父が入る。長い時間待たされたが金を手にして父が戻る。その翌日幸子は給食代二カ月分を払った苦い思い出がよみがえる。明日は七年前に亡くなった母の命日、明後日は六年前に亡くなった父の命日。サチコは暗い過去を乗り越えて自分をつかむ。

「よじわの茂蔵」（西山慶彦） 素朴な人たちが優しく描かれている。もう少し構成を練っていればもっと評価は上がっただろう。力のある書き手であるから再度挑戦してほしい。「行き合いの空」（秋檀） 書きなれた作者である。教師になるために大学院まで進むが、友人から頼まれて小料理屋のバイトをしたことで料理人の面白さにはまっていく。料理の奥の深さを見せようとしているがまだ伝わっては来ない。

毎年力作を前にして文学の裾野の広さに感動している。



多彩な題材と手応え

五十嵐勉



再開二回目の銀華文学賞は、老年の題材に偏ることなく多彩な題材に富み、豊かだった。経験の広がる世代の小説にふさわしく、多様な人生模様や社会の切り取り方が呈示されていて、読み応えがあった。前回の選評で、古いの実験や問題を取り上げるだけでなく、若い時に経験した世界にまで敷衍して、深い思索を重ねて構築してほしいと言った希望によく応えてくれた観があった。

なかでも、一つ突出していて、三人の選考委員が最高点を付けた作品があった。原浩一郎氏の「出所証明」で、題材の特異さと、描き方の的確さ、勁さは、群れを抜いていた。刑務所から出る時の証明書を手放してしまうことを軸に展開するストーリーは、普通の社会との違和感を浮かび上がらせるだけでなく、前科を負う者の過去の世界と、引き摺る鎖の重さを露わにする。出所証明を持って真面目な職に就こうとする主人公に、昔の仲間が言う。「お前、さんざ

上がる、現代人の心理構造が浮き彫りになるそのことが、これが本質を突いている。室町眞氏はそれを抽出して、現代の日常に潜む歪んだ心理のあり方を剔出した。それは銀華文学賞ですでに何度も優秀賞を受賞している氏らしい鮮やかさを示している。確かに人には知られたくなく、踏み込まれたくない個人の領域があり、それが密かな自己の原動力の核になる。それを喪失している現代人の裏面の相貌と危機が奇妙に浮かび上がってくる。個人空間を求めると主人公の行動が、実は社会全体の動きとなって見えてくる。この小説のおもしろさがあり、また真の社会の危機が予感される。これは電子社会の、プライバシーを喪失しつつある現代の危機の本質をも裏側から照射している。

同じく優秀賞、塩崎憲治氏の「ラストオーダー」は、オーソドックスな筆致で目新しさはないが、臍臓痛という現実を前にしてその人生を総体的に振り返りつつ、生きる意味に迫る勁さは、ひたむきなものを感じた。すべてを盛り込もうとして、あれもこれもと過多になっているのではないかと、それによって問いつめが見えなくなっているのではないかという批判もあったが、その切実な文章の迫り方に、切実さがあり、それは訴える力になっていいると思つた。サラリーマンの競争社会を「争うように蛭が這い上がってくるヘドロの中に、ずぶずぶと腕を沈め、二十ドル札を手探りするような毎日が続いた。」などの描写に真実味がある。

ん悪さしてきて、明日から真面目になりますやて、なめさらすな。ガキが」「お前のせいで首吊ったやつおるやろ。何人女をソープに沈めたんや。お前がはめた奴ぎようさんおるやろ。ええ?」「どの面下げて、真面目になりますや。お前のこと許すと思うか」これらの言葉には、強烈なりアリテイがあり、一般社会と刑務所の深い谷間が覗いている。出所証明の紛失が、同時に出所した仲間のいたずらから生じることや、証明書の再発行を署長が鼻で笑って取り合わないことなど、一つ一つに現実感があり、それらがみなこの小説の緊迫感を構築している。花火のシーンや音、群衆の動きに、社会の波が背景をなし、その中に過去の自分の酷い行為を思い出すなど、名場面を見るような鮮やかさがある。これらは原氏が長年刑務所に近い位置にいた蓄積の上に構築され得た世界であり、結晶にちがいない。それはまた広く人間が自分の罪を振り返るとき、同じように経験する贖罪の道を暗示しているものでもあるだろう。拍手をもって、受賞を祝いたい。

優秀賞はバラエティに富んでいた。現代的な素材が眼を引いたせいもある。室町眞氏の「トランクルーム」は、小さな貸空間に、自分の日常の退避スペースを得る話である。実際には居住や安息を許さない営業も多いが、可能性としてはあるし、現実には個人用の小さなレンタルオフィスが今都心で流行しつつある。むしろそれを通して浮かびとは自然だろう。それは書いていると思つた。

眞住居明代氏の「マスク」はあまりにタイムリーで、この時期このように早くコロナを題材にした作品が出てくるとは思わなかった。注目度は当然大きく、始めの採点集計では二位に躍り出てきたが、時機になつてくる点は大いに買うものの、文学としての掘り下げにどこまで応えているか、という点が議論の争点になつた。著者自身に連絡して、若干書き改めを加えてもらうということ、着地を得た。優秀賞としては幾分補う必要はあつたものの、この悪疫の流行をこも早く題材として生かす手腕には注目すべきものが確かにある。そしてこのテーマは、いくらでも広がる、様々な問題を突き付けてくる可能性がある。いろいろな角度、いろいろな視点からアプローチが可能であろう。今や全世界を脅かす、この大きな問題は、作家が取り組むべき一つの領域を広げている。問題の本質をよく見極めながら、さらにこの題材に踏み込み、格闘していったほしい。

人間を脅かす生命を扱っている点では、奨励賞の嶋津治夫氏の「稲作拾遺譚」も、共通点がある。この作品は稲の侵入害虫ジャンボタニシの増殖とその被害を追いながら、昔からの害虫の歴史を流れ込ませ、稲作への営為によって

生き永らえてきた人間の立場を、自然の中から振り返っている。このユニークな視点は、農業行政に現場から長く関わってきた筆者ならではの、大いなる営為と大地の壮大な歴史が感じられるところは、希有な価値がある。これは小説ではないという主張する論者もいるかもしれないが、新型コロナウイルスという新たな驚異が蔓延するこの現代においては、逆にこういう視点こそが重要で、ここから新たな小説領域が広がっていく可能性は大いにある。優秀賞でもよかったが、今回は奨励賞に甘んじてもらった。この立場から、コロナウイルスのような驚異をどう捉えるか、氏にも挑んでほしい気持ちもある。

「バデイスの記憶」は惜しい奨励賞作品で、読み手をぐいぐい引っ張っていく木村雅樹氏の筆力はかなりなものがある。文章の流れはよく、匂いもある。しかし最後の結び方が碎けている。再就職のうまくいかなかった中心人物が、再就職できた直後に死ぬという事件が、自殺なのか、たんなる交通事故なのか、揺れ動くところにこのストーリーの牽引力があるにもかかわらず、結局事故だったというのは、人生の意味を汲み取る作業としての文学にはなっていない。前に辞めた会社の使い込みの濡れ衣は人間としては晴らせても、命に意味を見い出そうとする文学の問いかけには答えていない。「あつけない死」で終わっているのは惜しまれる。

なによりもこの作品には人間を包み見る温かさがある。ぬくもりが残る点が、美点だった。

温かさという点では吉岡幸一氏の「雨があがる前」も共通したものが感じられたが、全体にやや甘さがあり、雰囲気や情緒に流れている点が気になった。真向かいの店が火事になって、もっと主人公の側にもいろいろ影響が出てくるはずだが、他人事として何も流れていくのが不自然に映る。他の選考員が推したのに飲まれたが、もっと推敲を重ねれば魅力が前面に出たはずで、惜しまれる。

佳作にも印象に残る作品がいくつもあった。

「託された日記」(松本昂幸)は、大学時代のテニスの同好会で得た親友の、一流商社に就職しながら、挫折して自殺する事件をストーリーの軸にしている。彼が同性愛者であり、エイズに罹ったことも露わになりつつ、不可解の扉が開けられて、流れとしては盛り上がりつつ、この筆力は力量を認めるが、肝心の託された彼の日記は最後まで開かれることがない。この小説はその日記の内容が主体になるはずで、それを加えるには五十枚では無理がある。倍の長さにしてはじめて形を得るものなので、あらためて書き直すべきだろう。

「碁盤」(加崎希和)は、小唄の師匠であった父親の碁好きを、価値ある碁盤を通して追懐している作品で、戦前の花柳界の風景もよく浮かび上がって、愛人を持つ華やかな

「棄民の浜」は、一種の呪縛空間を現出させている。ある海岸の昔の「姥捨山」だった地帯に、まだ異空間の怨念生命が生きていて、主人公たちはその空間に入り込み、取り込まれそうになりながらもかろうじて脱出する粗筋だが、現代でも確かに恨みや怨念が蓄積している空間は存在するだろうと想わせる作品になっている。なによりも恐怖をかき立ててくるものがここにはある。現代のバーチャル仮想空間の横溢で、見えにくくはなっている。久保信之氏は、この地球上には無数にありそうである。恐怖によって、恐怖によってそうした空間を現す力量を持っている。

篠崎フクシ氏の「熱帯林」は、サラリーマンの苦悶の狂気を熱帯林の熱さに喩えて、書き切っている。組織のなかでノルマを強いられて動く苛酷な営業活動が、熱く苦しい息を吐き出させ、灼熱感を掻き立てて、生きることの喘ぎを伝えてくる。体験に基づいているようにも感じさせるリアリティが、この作品にはある。短絡的な側面もなくはないが、ある喘ぎが伝わってくる点で評価した。

子連れの再婚見合いから新家族が生まれるが、馴染まない子供のギクシャクした形のまま別居家族が推移していく姿を見つめて、あらためて家族の意味を問いかけた作品も、意外に支持された。織戸正義氏の「家族の肖像」は、題材は地味でありふれているものの、別居家族のあり方の現代風な形については、少し変わった視点を備えていた。

生活も色彩豊かに描かれている。その時代、その世界が生き生きと動いていることは、筆者の筆の鍛錬があるからで、文学の一つの良質な役割が、ここに体现されている。父親の道楽の象徴として残された値打ちものの碁盤が、いつまでもそこに重みを持って存在するような、心に残る佳品である。

「幽霊」(本田敬幸)は雪の日に友人を待つ状況の下で、たまたま途中で車に乗せた高校生と待ち合わせの喫茶店で話をするストーリーだが、奇妙なりアリティがあって、ひどく生き生きとした文章が胸に残る。結局待っていた友人は現れず、幽霊のような人影を見る。応募の直前に亡くなっている著者の遺作で、それ自身がその存在である不思議な符合性を覚えた。

「蒼い残滓」(勢隆二)は関西の工場の現場を活写している、活気に溢れた労働の世界が押し寄せてくる。よく書かれていて、労働者の息づきが伝わってくるのだが、そこで生まれた軋轢の意趣返しを、部内対抗野球で実現する、という組み立てに難がある。デッドボールくらいで晴らせる恨みや矛盾なかと、カタルシスに欠けることが惜しまれる。

今回歴史小説も何作もあり、どれもかなりのレベルに達していたものの、佳作に留まった。「室津の遊女友君」(宮本義則)は木曾義仲の愛妾山吹が西国へ落ち延びて遊女と

して生きていく姿を描いていて、焦点の当て方はよく、読ませる力があつたが、主人公の生きる力まで蘇らせることができない点に、迫力不足があつた。

「蛇を飼う」(高倉麻耶)は同じ高校から絵を学ぶ二人の親友同士が、同居して、より親しくなり、一方が絵を描くために蛇を飼う。「安珍と清姫」をモデルにした絵だが、一方に恋人ができて同居を離れると、残された方が自殺を遂げる。あとに「安珍と清姫」の絵が完成されている、というストーリーだが、筋の奇抜さはインパクトがあり、独特な発想を感じさせる。ただ、蛇についての描写がもっと欲しかったのと、「安珍と清姫」という古典に安易に寄りかかるところが、安手を感じさせる。「安珍と清姫」を出さないほうが興行きは増しただろう。

「坂の上のインディアン」(吉田満春)は、幕末から明治初頭に英語通訳官として活躍した森山栄一郎の一代記で、埋もれた存在に光を当てた功績は買うものの、全体が地味すぎて、埋没してしまった。坂の上にいたというインディアンの話も、記憶の中でとぼれてしまつて、全体に生きてこない。もっと時代の曲がり角における劇的な通訳シーンを盛り上げて書けば、主人公も生きただろう。縁の下での活躍者は、表舞台を華やかに動かすことでより光輝くと思われる。

今回は総じて、バラエティに富み、発想も着想も豊かで、

い。次の就職先に行くには「出所証明」で保険証をもらう必要があるが、一緒に出所した男に、妬みから盗まれてしまう。話は色々あつてハッピーエンドで終わるのだが、少し甘いのではないかと思つたが、別の選考委員の指摘があり、もう一度読み返すと、主人公にも今までの罪の意識があり、未来はそんなにバラ色ではない事が分かる。前作も驚かされたが、中々優れている。

優秀作眞住居明代氏の「マスク」はコロナ騒ぎが起きてから作品化されたものと思われ、スピードが速い。こういうものは先に作品化した方が勝ちである。それだけでも賞の価値はある。最初は人助けのためにマスクを作り始めるが、商売となり、最後は狂気に近いところまで追いつめられる。面白い作品である。

優秀作室町眞氏の「トランクルーム」は、常連の彼らしい発想である。トランクルームを借りることで自分だけの世界を持つが、別のトランクルームにも別の人間が住み、生活があることが分かる。そして、逃げてきたはずの家族に最後は見つかつてしまう。書きたいことは伝わってくる。

優秀作塩崎憲治氏の「ラストオーダー」については僕に取っては評価が難しい。臍臓がんであることが分かった男が妻とホテルに泊まり、釣りをする。それに仕事のことやいじめられた上司の話があり、少し散漫な感じがある。ただ、川の王の話や、やや希望が残る結末は良いと思う。

体験の層の厚みも感じたが、もし銀華文学賞と今年から始まった新人賞を、それぞれ白組、赤組として競つた場合、霧囲氣的に白組が負けていたように感じる。「出所証明」が存在したことで、かろうじて白組が逆転勝利を得たものの、劣勢は否めない。今回は深い経験、広い見聞を備えた、若い世代に負けない発奮した作品を期待したい。

力作が集まった

大高雅博



久しぶりの銀華文学賞だった
が、かなりの力作が集まった。特
にオカルト系の作品が複数あり、
これは初めての事だろう。コロナ
の姿が見えない不気味さが反映さ
れているのかもしれない。

当選作原浩一郎氏の「出所証明」は、他の選考員は高く評価した。僕も高評価には違いないが、ちょっと引つかかる部分があつた。刑務所内で次の仕事先が見つけられるのかとの疑問があつたが、喜ばしいことだがそれが可能らし

奨励賞吉岡浩一氏の「雨あがる前に」は、文章が良い。セレクトショップの話で、少し甘いかもしれないが、良い話だと考える。

奨励賞久保信之氏の「棄民の浜」は銀華文学賞では、珍しい、オカルト、伝奇系の作品である。鳥居内の浜から、出られなくなるといふ内容で、そこからの逃げ方も、評価できる。伝奇物としては優れている。ただ、恋人の描き方がやや平凡か。

奨励賞篠崎フクシ氏「熱帯林」は、過労で追い詰められる人々を描き、迫力はある。ジャニス・ジョップリンの曲を効果的に使っている。

今回は力作がそろっている。上位に行けなかったが、詩人の谷川雁についての作品があり、興味深かった。谷川雁を知らない人が多く、その辺を書き込む必要があつた。また、浅草の昔に戻る話があつたが、戻った浅草をもっと詳細に描き込めば良かったと思う。(ジャック・フィニイの「振り返りに戻る」を参考にして欲しい。)

今回も選考委員会ではかなり激しい議論もあつた。銀華文学賞はしばらく間が開いたがそれだけレベルの高い作品が集まったということだろう。今後も期待したい。

第14回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

今年も、どうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。

●●募集要項

募集内容 ●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格 ●2021年4月30日時点において40歳以上の者

応募規定

2万字以内（400字詰原稿用紙50枚以内）（短いものでも可／原稿用紙使用の場合は必ずA4の大きさの原稿用紙を使用のこと）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募（コピーを応募するのが望ましい）。

別紙に①応募部門（第14回銀華文学賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム／それぞれふりがなをふること④年齢・生年月日・性別（これらのないものは失格とする）⑤〒（必ず記入）・住所⑥電話番号⑦職業・略歴

応募者には結果を通知する。

応募審査料 ●2800円分の郵便為替（郵便局で購入／無記入のこと）で同封。外国からは26USドル。

応募先 ●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞 ●銀華文学賞 ■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）

河林満賞 ■賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞 ■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

奨励賞 ■賞状・賞メダル 佳作・入選 ■賞状

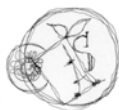
選考委員 ●作家集団「塊」メンバー

締切 ●2021年4月30日（当日消印有効）

発表 ●予選通過者は2021年9月25日発売の「文芸思潮」81号に発表する。受賞作・優秀作は2021年12月25日発売の「文芸思潮」82号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催 ●文芸思潮

※主催者から 真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。



選考会風景 2020.10.18 「サロン・ド・八覚」邸にて

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ 日大国文学科卒
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める
88 「風の河」で文学界新人賞を受賞

八覚正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
91「十二階」で新潮新人賞受賞 文芸学校・NHK学園講師 主著『「シェルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒
79「流瀆の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長
主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ』『破壊者たち』

作家集団「塊」新メンバー募集中

連絡 090-8171-9771

出所証明

原浩一郎

「おかしい。ここに入つるとるはずなんや」

平岡守男は思わず声を上げた。市役所の保険課窓口で、古びたポストンバッグに手を突っ込み、中をかき回している。

「ああ？　なんでや？」

鞆の中を覗き込み、動揺してしきりに独りごちている。

職員のと田は表情を動かすことなく、無言でその様子を眺めている。

「ここ入れたんや。今朝、領置[※]私物を刑務官の親父から返してもらたとき、一緒に出所証明をちゃんと受け取って、こん中、入れといたんや」

平岡は手を止め、息を吐いた。

「くっそ。なんでないんや！」

平岡の怒声が響き、あたりがしんと息を呑むように静まり返った。市民や職員たちは彼を刺激せぬよう、遠巻きに注視している。ひりひりした緊張感が周囲に張りつめた。

見かねて和田がようやく口を開いた。

「時間かかってもいいですから、しつかり探してみてください。中のもの全部出してくださいでもかまいません」

平岡は言われたとおり、バッグの中からひとつひとつを取り出して受付台の上に並べはじめた。着古した洗いざらしの下着、角の折れたノート、キャップの取れたボールペン、そして手紙や葉書。じやらりと小銭の音がする茶封筒。それだけである。

※領置／法律用語。押収の一種。任意提出した物、遺留した物の占有を取得する強制処分。令状を要しない。

「あらへん。なんでや！」

「今日、出所されたときに刑務所から出所証明書を受け取られたんですね」

「ほうよ。先に願髪出してたさかい、ちゃんともろて受取りの指印押したがな」

「でも、ないんですね」

「ないんや。なんでないんや！」

和田に向かって、平岡は叩きつけるように怒声を浴びせる。

「私におっしゃられても、お答えのしようがありません」

「なんやと、くら！　わし今日中に保険証もらわなあかんのんじゃ」

「ええ、先ほどお聞きしました。就職されるのに身分証として保険証が必要なんですわね」

「そうじゃ。すぐ保険証作ってくれ」

「いえ、ですからあなたが平岡守男様であるという証明がないと、保険証をお作りすることができません」

「それがないんや言うてるやろ！　わしは平岡守男や。本人が言うてるんや、間違いないやろ。それともお前、わしが嘘かまして言うんか！　うらー！」

「では、何か他に証明となるようなものお持ちじゃないでしょうか。電気ガス公共料金の請求書であるとか」

「なめんとんか、こら！　わし今朝まで刑務所におった言

うたやろ！　なんで刑務所で電気代払わなあかんのんや。なめさらすな！」

らちが明かない。こういう手合いには散々怒鳴り声浴びせられても、それで気が済むなら黙って受け流し、頭を下げてでもとにかく帰ってもらうほかない。それが定石だ。しかし和田は珍しく男のためにいくらか動いてもよい気持ちになつていた。平岡の怒声に、切実な悲嘆のような響きをわずかながら感じ取つたのかもしれない。

「はい。平岡様、やはり役所としては本人確認の資料が手続きにはどうしても必要です。これはいかんともしがたいのです。ですから、とるべき方法としては、なくなつた出所証明書を探し出すか、あるいは再度出所証明書を発行していただく、ということになるんじゃないでしょうか」

平岡は無然としつつも、内心なるほどと思っている。

「証明書を紛失されたお心当たりはございますか」

「あらへん。朝、刑務所で鞆に入れてちゃんとチャック閉めてから、ここ来るまで一度も開けてへん」

「おかしいですね」

「なんでないんや。ここ確かに入れたんや」

筋の通らない言い分であったが、横着な虚言や暗愚な失念と決めつけるのを和田はためらった。

「紛失の心当たりが何もないのであれば、止むをえませんから、刑務所に再発行してもらおう手続きをしたらいかがで

しようか」

「手続き言うたかて、わかれへん」

「電話してみました」

和田はくるりと椅子ごと回転して手を伸ばし、執務机の上の電話機をつかむと、持ち上げて窓口に置いた。てきぱきとことを進める和田の様子を、平岡は口を半開きにしたままじつと眺めている。

開いた大判のファイルを片手で押さえながら、和田は慣れた手つきで受話器を握ったその指先で電話番号をプッシュした。

「私が先に事情をかいつまんで先方に話しますから、そのあと代わって直接平岡さんから刑務所に再発行の手続きをお聞きになってください」

平岡は顎を突き出すようにして小さくうなずいた。

「あ、出ますよ」

和田は目だけ彼の方を向いてそう言った。

外線電話が鳴った。

「はい。石山刑務所です」

事務棟一階の総務課で警備服姿の交換係が受話器を取った。首に下げたタオルで顔の汗をぬぐっている。ひどい暑さだ。冷房が入っていない。

「ええ、わかりました。少々お待ちください」

受話器を手で押さえ、声を張る。

「湯浅係長、市役所の保険課から出所証明について問い合わせです。外線二番」

湯浅は撫然とした顔で、

「市役所がなんの用や」

と、こぼしながら不愉快そうに受話器に手を伸ばした。

「ああ、代わりました」

ぶつきら棒なだみ声だ。外部の者を警戒し、一様に威嚇の態度をとる古いタイプの刑務官である。相手の話をしばらく聞いていた。隣席では朴訥な顔をした肩幅の広い刑務官が、ボールペンを逆さに持って簿冊の図表をたどっている。部下の前川看守部長だ。

「わかりました。本人には代わってもらわなくて結構です。出所証明の再発行なんて手続きはあらへんですから、改めて証明書発行の申請を出してもらうことになります。申請には身分証のコピーが必要です。免許証か保険証か、本人を特定する証明の写しがないと発行はできません。そう言うたってください。ええ。いや、その身分証作るために出所証明が必要な人や言うたかてね、あんた」

湯浅は意地悪く鼻をふんと鳴らして苦笑をもらした。隣席の前川が手を止め、電話の会話に耳をそばだてている。

「そら本人の責任ですわ。身分証持っていないのも、なくしたんも。ちがいますか。決まりですから、身分証ないと証

明書は発行できません。今日出所して証明書なくしたとか、そいつの話もどこまでほんまのことかわかりやせん

すしね。そんなに困るんやったら、刑務所入るようなことせんかったらいいだけの話です。ええ、できません。そう言うたってください。はい。どうも」

湯浅が受話器を下ろすと、前川が口を開いた。

「平岡ですね」

「うん？」

「今朝満期で出た平岡守男が出所証明もろて出てますから」「ちがうやろ。出所してその日の内にわざわざ市役所まで行くか」

「あいつ協力雇用主の工場で働くのに保険証が必要や言うて、大分前から出所証明の願箋出してたんですわ。今日の内に役所で保険証作ってもらうんやて、今朝出て行きましたから」

「ほうか。それをもうなくしたんか。なめとるな。あほや」

毒づく湯浅の言葉を聞き流して、前川は続けた。

「中で発行するときみたいに、身分証なくても指印があれば指紋認証で本人確認できると違いますか」

「いらんいらん。自分でなくした奴にわざわざもう一度証明書書出したることない。仕事増えるだけや。身分証の写しあれば出したる。それだけや。しかし暑いな。どうにかならんか」

湯浅は警備服の首をはだけ、勢いよく団扇をあおぐ。

「冷房止めてろて所長の意向ですから、しゃあないです。下のものは従うしかありません」

前川はそう意って口をつぐむと、机上の帳簿をまた精査し始めた。

和田が受話器を置いた。

「すみません、本人に代わる必要なんてないと断られました」

平岡は鋭い目をして黙っている。

「刑務所は、もう一度発行するには身分証の写しが必要だ、の一点張りですね。身分証がなくて困っているから、そのために出所証明書が必要なんだと言ったんですが。取りつく島もない感じで」

無言でうつむいている平岡が、今にもまた怒り出すのではないかと和田は内心怖れた。しかし平岡は、小さくくそ！

とつぶやくだけだった。

「平岡さん、今日刑務所を出てからここに来るまで、もう一度なぞってたどってみたいかがですか。寄ったお店とか、誰かに会ったとか。思い出しながら、ずっとたどって見たら、見つかるかもしれませんし、なんか手掛かりつかめるかもしれませんよ」

平岡がきよとんとした顔で和田を見ている。

「そうしましょう、平岡さん。今日一日じっくり探してみましよう。刑務所出られたのは朝ですか」

「ほうや。八時半や」

「お一人で」

「いや、三工場の野々村と一緒に出た」

「そうですね。なら、刑務所に戻ってそこからずっとたどって見たらいいですよ。何か思い出すかもしれませんし、人に聞いたりしながら」

「戻るのほかなん」

「扉の中に戻るわけじゃないですから」

「ああ、せやな」

「就職先に保険証持って行く日は決まってるんですか」

「明日や。明日中に持って行かなあかん」

「そうですね。証明書見つかったらすぐまたここへ来てください。私、和田と言います。すぐ発行できるように準備しておきますから」

「わかった」

平岡は机に広げていた鞆の中身を、ゆっくりと鞆に戻した。

「兄さん、大声出してすまんかった。かんにん」

そう言って平岡は席を立った。和田はそれを聞いて、なぜか無性に切ない思いがした。思わず、何をおっしゃいます、と口を開きながら彼も立った。

「お待ちしています」

和田は頭を下げた。平岡もひよこりと頭を下げて返すと、保険課を出て行った。

その後ろ姿を見送っていると、和田の傍らに同僚の男性が立っていた。

「災難やったな」

「それでもない。ちょっと違うな」

和田の言葉を無視して同僚が口を開く。

「二度と来んな。クズが」

吐き捨てるように言う同僚には応じず、和田は腰を下ろした。そして長椅子で待っている次の来談者に声をかけた。

市役所を出ると、むっとした熱気が平岡を包んだ。猛暑である。しかし、彼の頭はなくなった証明書のことでいっぱいだ。浅黒く日焼けし、目のくぼんだ彫りの深い顔をうつつむき加減にして、彼は横断歩道に立ち信号を待った。頭髮は伸びかけた坊主頭で、衣服は出所時に刑務所から譲り受けた古着だ。着古されボロシャツはすっかり色落ちしている。薄汚れたズック靴は刑務所工場の労役で毎日履いていたものだ。信号が変わると、彼はそのまま正面の駅に向かった。

路面電車の小さな駅である。ペンキの剥げた木製のベンチに、彼はどかりと腰を下ろした。ともかく言われたとおずの刑務所で、見事に反社会的な人格態度を身につけてしまった。ことあれば強い側について怒声で威嚇し、我が身を守るためなら平然と虚言を弄し、弱い者を毘にはめる。そうした悪辣な振る舞いにも、彼はなんらためらいを感じなくなっていた。

粹がってことさら凄味を利かす無頼漢たちであっても、出所の際には頼るべき先輩や愛人をあらかじめ当てにし、抜かりはなかった。しかし彼は徒手空拳のまま丸腰で出所し、娑婆に放り出された。帰るところも待つ人もなくし、彼は一人であった。

彼はこの出所に賭けていた。刑務所は二度目であった。最初に服役したのは奈良の少年刑務所だ。少年刑務所とは名ばかりで収容者のほとんどは成人であるが、高齢者の多い他の刑務所と違い、若い懲役囚が多い分だけ跳ね上がり具合も半端ではなかった。彼はそれまで、曲がりなりにも定職に就きそれなりに家庭人でもあったのだ。しかし横領事件による三三歳から四年に及ぶ服役が、彼をまったく別人へと変貌させてしまった。

はじめは同囚からの執拗で残忍ないじめの標的となることを回避するため、古参囚たちにおもねり迎合していただけであった。しかし、もとよりその素地があったのだ。彼は逸脱者の群れの中で過剰に適応し、学習し、更生するは

出所して早々に、彼は食うにも寝るにも困窮する。それからはお決まりのコースだ。刑務所仲間を頼り裏の稼業に手を染めて行く。裏社会の水が彼には合うかに見えた。闇風俗で面白いほどに稼いだ彼は、覚醒剤の売買まで手を出してしまふ。しかしその世界で彼は「調子こいた、たかが素人」に過ぎなかった。後ろ盾のない彼は手ひどいしっぺ返しを食らう。ついに彼は地域を仕切る組織に拉致され、その目の前で人が殺害されるのを目撃する。見せしめであった。彼は心底恐怖で震え上がった。そしてようやく、彼は一刻も早く足抜けして、表社会の正業に就こうと真剣に考えたのだ。

しかし恥を忍んで出かけたハローワークで、彼は冷徹な現実を知る。彼には住居もなければ、免許もない。もちろ

ん預金口座もなければ、そもそも税金を一円も払っていない。履歴書に収容歴を書くわけには行かないし、本名を明かせばネットで過去の犯罪歴が暴かれる。窮した彼は相談員に悪態をつき、罵声を浴びせると椅子を蹴って相談所を立ち去った。目の前が真っ暗になる落胆を、そうやってごまかすしかなかったのだ。

表社会への門は固く閉ざされ、彼はその前で見事に追い返された。ありつけた仕事は、日当払いの肉体労働くらいであったが、不摂生を続けた若くない身体はすぐに音を上げた。頭を下げるのできない彼は、虚しく毒づいて無様に現場を去るしかなかった。

あげくのはてに彼は再犯事件を起こす。罪名は強盗致傷だ。

大きな商業施設で、家電量販店から出てゆく彼の腕を店員がつかんだ。現金化できるポイントカードを、彼が素早くポケットに入れるところを店員は見ていたのだ。彼が強引にその腕を振り払ったはずみで、中年の店員は転倒して頭を強打した。重傷であった。刑期は三年二か月。

収容された石山刑務所は累犯者や暴力団組員を収容するB級分類の刑務所であった。社会のまさに吹き溜まりである。娑婆で過ごすよりも刑務所など施設に収容されていた歲月の方がずっと長い者たちや、これまでたった一度も正業に就いたことのない者がほとんどであった。刑務所への

筈であった。

そして迎えた今日の満期出所である。待ちに待った再起への一歩であったのだ。

だからなのである。このいきなりの躓きは彼に重くこたえた。

ちょうどその頃、森を背にした古いマンションの敷地内に、一人の男が入って来た。安手の青いキャップを被り、紙袋を下げた貧相な身なりの男だ。あたりを見回しながら歩いている。住民とは見えない。

男は棟一階の掲示板の前に立って、なにごとかごそごそとしている。

しばらくすると、男はふらりと敷地から出て行った。森から蝉の声がけたたましく響いている。灼けつくような炎天下である。

石山駅に着いた。平岡は電車を降りると、足取り重くホームの階段を上った。改札を出ると、正面にバーガー屋の看板が見えた。朝、一緒に出所した野々村と連れ立って入った店だ。うまかった。その時、彼ははっとして、おあっ！と思わず声を上げた。吠えるような大声に、あたりの人が驚いて振り向いた。彼は目を大きく見開き、通路の真ん中に立ち尽くしている。と、彼は突然走り出し、勢い込んで

入所回数が十回を越える老齢囚たちはいずれも内臓を病み、それでも現役ヤクザの服役囚と張り合っては相手にされず、誰も聞いていない虚妄の自慢話を繰り返すばかりだった。

まるで、腐った人間の捨て場所だ。彼はぞっとした。奴らみたいにも、薄汚い人間のクズになったらおしまいだ。彼は心でそうつぶやいていた。こいつらと縁を切って、なにがなんでも表社会に戻る。その一念で、要領よくなにことも問題起こさぬよう、彼は大人しく服役生活を送った。そしてひそかに、表社会へ抜け出すための手立てをひとつひとつクリアしていた。

転出して宙に浮いたまま未登録となっていた住民票も刑務所の住所で登録をし直した。前刑中に失効した免許を再取得するための手続きも調べた。そして受刑者を積極的に雇い入れる協力雇用主への就職斡旋を希望し、刑務所の推薦で内諾を得ることができた。そうして一旦は、仮釈放も内定したのだ。しかし、釈放の直前にそれを妬んだ他の懲役囚から喧嘩を仕掛けられ、喧嘩両成敗の定めにより懲罰を受け、あつけなく仮釈放は吹き飛んだ。懲りた彼はそれから一層目立たぬよう努め、満期出所に照準を合わせた。

「出所証明書」を出所時に受け取り、その日の内に市役所で保険証を発行してもらい、翌日には隣県との境にある大手自動車メーカーの下請け工場に住込み入寮するという手

バーガー店に駆け込んだ。

いらっしやいませ。店員の声も無視して、彼はそのまま階段を二階に駆け上った。そして表通りに面した窓際の席の傍らに立った。息荒く、憤怒の顔だ。誰も座っていないテーブルを彼は見下ろしにらんでいる。

思い出したのだ。彼はここで一度だけ、スポーツバッグから目を離れた。鞆を置いて、トイレに行ったのだ。この場に、野々村を残して。

あのクソが！ 野々村や。あいつが出所証明を抜き取ったんや！

彼は確信した。平岡が前川刑務官と交わっていた会話を、野々村は聞いていたのだ。証明書がなくなれば、彼はいつとう困るにちがいない。だから、彼がトイレに立った隙に野々村は鞆を開けて出所証明書だけを抜き取ったのだ。恨みではない。野々村と彼にさほどの面識はない。暇つぶしだ。人の不運が愉快なのだ。他人が何かものごとくまく行くのが、無性に癪に障るのだ。だから足を引っ張っては笑いのものにする。他人の仮釈放を理由なくつぶしては喝采する、あの底意地の悪さだ。

怒りに目が血走った。一刻も早く野々村を見つけ出すのだ。彼は店を飛び出した。しかし、みるみる彼の顔が曇ってゆく。この店先で別れた野々村をどうやって探したらいい。皆目、見当もつかない。失望し、彼の心は一気に落胆

に沈んだ。

その頃、先のマンションに管理組合の理事長が散歩から帰ってきた。そして掲示したばかりの理事会告示が階段下に投げ捨てられているのを見つけた。

誰の仕業かとばやきながら拾い上げ、掲示板に貼り直そうとしたそのとき、代わりに妙な書類が乱暴に貼り付けられているのに彼は気がついた。ひどく傾き、皺が寄ったまま無理矢理に画鋏ピンで留められている。書かれたその内容を見て驚いた。表題に「出所証明書」と記され、見知らぬ氏名や生年月日が書かれてある。その書類の発行元は「石山刑務所」とあり、赤い大きな角印が押されている。理事長は慌てて管理事務所に駆け込んだ。

管理人と理事長は掲示板の書類を前に、すっかり困惑していた。おそらくは外部の者のいたずらと思えたが、書類は本物のようであった。何より二人は「石山刑務所」という文言に怖気づいた。それはいかにも不吉で恐ろしく不気味に見えた。記された「平岡守男」という名前すら、いかにも凶悪で危険な男が想像され、一切関わり合いを持ちたくなかった。触るのをさえためられる。到底手に負えなかった。二人は警察に措置を委ねようと結論づけた。

最寄りの交番に電話すると、パトロールの途中に間もなく立ち寄ると言う。二人はほっとして胸を撫で下ろした。

林一郎からの葉書だ。

(そうや、林なら野々村のこと知ってるかもしれへん)

彼は葉書を取り出し尻ポケットに押し込み、茶封筒から千円札を一枚引き抜いた。

店を出ると、彼はすぐに煙草をくわえた。思わず大きく吸い込みむせてしまったが、それすら心地よく愉快であった。そして彼は葉書を取り出して眺めた。

「出所おめでとう。TELください。はやし」

その下に携帯番号が殴り書きされてある。彼は、しめた、という顔をして、横断歩道に立った。信号待ちで隣に並んだ婦人が、彼の吐いた煙を大げさに手で払い、眉をしかめ咎めるように彼の顔を見た。

「なんや、おら」

口ぎたない彼の言葉に、婦人は咄嗟に顔をそむけた。

前川が受話器を取った。

「はい、石山刑務所総務課です」

電話は、石山駅前交番の警察官からであった。マンションで拾得した刑務所発行の出所証明書について心当たりがあるかと言う。

「ああ、平岡守男の証明書でっしゃろ」

前川は思わずうれしそうに尋ね返した。

「ええ、そうですわ。今朝、本人に交付しました。その証

早いところ、このやっかいな「平岡某」の「出所証明書」とすっぱり関わりを断ちたいと思ったのだ。

当の平岡は、消沈しつつも、やがて捨て鉢な情動がむくむくと湧き起こってきていた。

馬鹿馬鹿しい。面倒だ。何もかも投げ出したくなっていた。

彼は歩道脇に酒類の自販機を見つけた。汗をぬぐい、硬貨を入れるとカップ酒がごとりと懐かしい音を立て落ちてきた。

久しぶりである。開けた蓋を放り捨てると、その場でぐくりと一口喉に流し込んだ。沁みる。酒が食道から胃に流れ込んで行く。目を閉じ、その懐かしい刺激を存分に味わう。二口目にはもう全部を飲み干し、さらに自販機に手を伸ばした。

大きく息を吐いた。これだ。二本を空けて、やっと彼は人心地が付いた。生き返った気がした。

すっかり気分が大きくなり、もう懲罰を怖れることもないのだと、ようやく出所した実感が湧いてきた。最早誰はばかることもないのだ。思わず顔がほころんだ。

煙草を買おうと彼はコンビニに入りレジに並んだ。そして鞆の中から懲役労務の報酬である作業報奨金の入った茶封筒を取り出そうとしたとき、一枚の葉書が目に入った。

明書持って平岡守男は満期で出所しています。仕事就くのに必要なやと言うて大事に持って出ましたわ。よかったです。午前中に市役所から出所証明書なくしたて電話がありましたから、間違いなんです。掲示板に貼ったんは本人やないでしょ。そんなことすんのは懲役仲間ですわ。ええ。困らせたらと。一緒に出た奴に金盗まれたとか、ようあるんですわ。ええ、困ったもんで」

警察は平岡に連絡することは可能かと問うが、それは不可能である。満期であれば保護司もつかないし、帰住先は調べようもない。すると今日一日は証明書を交番で保管するので、もし平岡から連絡あれば伝えてほしいと言う。

「わかりました。多分もう電話してこんのやないかと思うんですが、もし電話あったら言うとききます。はい、失礼します」

前川が受話器を下ろすと、ちょうどそこへ湯浅係長が戻ってきた。前川は警察からの電話を報告した。

「警察も大変やな。紙一枚のことで」

「今日は交番で預かってくさかい、もし平岡から電話あったら教えたってくださいということでした」

「かかってこんやろ。出所証明のことなんか忘れて、酒でも飲んで煙草吹かしたるんちがうか」

湯浅は皮肉っぽく言った。

平岡は煙を吐き出すと、火のついたまま煙草を路上に放り捨てた。駅前公衆電話ボックスに入ると、林からの葉書を取り出した。

林は平岡と同じ舎房で寝起きを共にした間柄だ。しかし、実はそれよりも以前からの知り合いであった。平岡が闇風俗で荒稼ぎしていた時分に、情報を流してもらうなど林からずいぶん便宜を図ってもらっていたのだ。

通常、刑務所では出所者との手紙のやり取りは禁じられている。そのため出所者からの手紙は刑務所が一旦預かり、出所する際にまとめて本人に交付することになる。慣れた出所者たちはそれを見越して、あらかじめ先に出所祝いの手紙を送りつけておく。そうすれば自動的に出所の際に本人の手元に届くことになるからだ。また、必ず連絡先を記しているのは友情のためというわけでもない。しぎのため「営業」であることも多い。林は覚醒剤の卸元である。いつでも買いに来いということだ。

林は顔が広い。だから野々村について情報が得られるのではと平岡は期待したのだ。

すぐに林は電話に出た。はじめあからさまに警戒していたが、平岡からだとわかると口調は一変してゆるんだ。平岡は早速野々村について林に尋ねたが、そんなことより出所祝いに会おうと言う。平岡の心は弾んだ。

三十分後、彼の目の前に白いクラウンがピツとクラク

めている。

「お前、早すぎるやろ」

あつという間に三〇〇グラムを平らげてしまった平岡を冷やかすように林が言う。

残っていた瓶ビールを平岡のグラスに注ぎ足すと、林は平岡に尋ねた。

「誰か、探してほしいんやて？」

グラスをぐいと傾け、平岡は喉を鳴らした。

「ああ、三工場にいた野々村いう奴、探してるんや」

「野々村？」

「小柄なおっさんや。今日、一緒に満期で出たんや」

「金、パチられたんか」

「いや、金ちやう。大事なもん、盗まれてしもたんや」

「なんや、大事なもんで」

平岡は口ごもった。

「何、盗られたんや。言うてみい」

「出所証明」

平岡がためらいながら、ぼそりと答えると、林は目を丸くして絶句したかと思うと、大声あげて笑い出した。身体を折り曲げ、足を叩き、涙流さんばかりに爆笑する。困って平岡も一緒に笑った。

「すまんすまん」

ようやく笑い終えて、林が言い出した。

シオンを鳴らして停車した。平岡が乗り込むと、彼の証明書を保管している駅前交番の目の前を、車は滑るように走り去った。

琵琶湖岸のステークハウスで平岡と林は向かい合った。

「おめでとうさん」

だみ声で林は平岡の持ったビールグラスに自身のグラスをカチンと合わせた。

「祝いやさかい。今日はわしのおごりや」

満面の笑みでビールに喉を鳴らす平岡に、林はそう言っ

て烏龍茶に口をつけた。

店員が分厚いサーロインを平岡の前に置いた。じゅうじゅうと音を立てた鉄のプレートが油をはじいている。平岡は興奮気味にナイフとフォークを突き立て、ステーキを頬張った。熱さにほふほふと息を吐きつつ、次々に肉片を口に放り込む。しきりに旨いと練り返している。薄味のレトルトばかりだった刑務所メニューのため、すっかり舌が忘れていた濃厚な旨さなのだ。夢中になって食べている。

「旨いやろ」

林が煙草を吹かしながら言った。平岡は口にサラダを押し込みながら、にこりとしてうなづく。

林は足を組み、身体を斜めに向けて胸をそらし、片肘をシートの背にさせている。しばらく黙って平岡の様子を眺

「お前、何とんでもないことぬかしとんねん。出所証明なんて、お前何するんや」

「いや、ちょっと」

平岡は困った顔をして口をつぐんだ。

「なんや、それで金引つ張ってこれるんか」

いかにも気まずそうにして、平岡は黙っている。

「そんなことして役所から金引つ張らんかて、俺がいい話知ってるんや。心配すんな」

「アヤつけるためやない。俺、出所証明があるんや」

「なんや、何するんや」

「保険証作るんや」

「身体どつか悪いんか」

「違う。就職すんねん」

「ええ!?」

また林が大声で笑い出した。さつきとは違い、嘲笑うような笑い方だ。

「就職!? お前どないしたんや! 気は確かか」

「まともな仕事するんや」

黙って煙草に火をつけてから、林は平岡を鼻で笑った。

「お前、アホやな」

むっとした顔で平岡は林をにらんだ。

「そんなん無理に決まってるやろ」

見下すように言う林に平岡は言い返した。

「決めたんや。俺、裏の仕事から足洗うんや。もう童王の工場で雇ってもらえることになってるんや」

何もわかってない、と言いたげに、林は黙って大きく煙を吐いた。そして、身を乗り出して平岡に顔を寄せると、林はゆつくりと語り出した。

「お前、世間様が許してくれると思うのか。よう考えてみる」

「真面目にやれば大丈夫やて社長も言うてた」

「そらそうやろ、社長はお前からひどい目におうてへんもんな。お前そんな虫のええ話あるか、真面目もくそもあるか」

林は座席の背にもたれ、憎々し気に言い放った。

「お前、さんざん悪さしてきて、明日から真面目になりますやて、なめさらすな。ガキが」

林の発する怒気が昂じるにつれ、平岡の表情が奇妙に強張った。

「何今までやってきたこと、なしにしてるんや。お前のせいで首吊ったやつおるやろ。何人女をソープに沈めたんや。お前がはめた奴ぎょうさんおるやろ。ええ？ 全部お前がやったことや。何しれつと口ぬぐってるんや」

平岡の顔が少し青ざめ、曇ってきた。

「どの面下げて、真面目になりますや。お前のこと許すと思うか。思い出してみい。お前のせいで死んだ奴も、つか

まった奴もおるやろ。そいつらや親兄弟、死んでもお前のこと許さへんぞ。何ええ子ぶって、自分だけ助かろうなんて、筋もん以下やろ。おら、なんか言うてみい。お前、ちよつと刑務所に入っただけやないか。あいつらがお前にされたこと、百分の一も身に沁みてないやろ。何知らん顔して、自分だけのうのうと就職しますとか、どの口が言えるんや。外道が」

何も言い返せず、平岡は口を結んで視線を落としている。

「こつちまで気分悪くなるわ。俺らかて一緒や、俺もお前も憎まれ恨まれて当然のこと山ほどしてきたやろ。殺されても文句言えへんぞ。俺らの背中にはな、俺らのせいで成仏できひん連中が山ほど取り憑いてるんや。しらばつくれで自分だけ楽になろうとしたら、見てみい、邪魔されるだけや。当たり前や」

うなだれているが、平岡の目はいかにも鋭い。

「たまらんやろ。な。ゴミのくせに人様の中入ろうと思うんが間違いや。わしらは一生これでええねん。しゃあないやろ。わかつたか」

平岡は軋むように苦しげな表情で、顔を上げない。

林は口調を変え、なれなれしく語りかけた。

「妙なことを考えると、一緒にやろうな。わしそのつもりやったんや。ええ話あるで」

平岡は林の言葉に返答もしない。

きよる」

机の上を片づけ、帰り支度しながら湯浅は言う。

「今日は船幸祭や。早よ帰らな、花火で通行止めなるで」

「あ、そうか。今日、花火か」

そう言って前川は壁の時計を見た。

「花火始まんのは七時ごろですか」

「七時半や。九時頃まで唐橋が通行止めになるさかいな。

どうにか天気ももちそうや。今日は残業せんと早よ帰りや。そうや、花火でも見たらどうや。見てへんやろ」

「ずつと見てへんですな」

「たまには、どうや。後輩でも連れて」

「ほやな」

前川は穏やかな顔で、遠くを見る目をした。

まもなく七時をまわろうとしていた。

石山駅から唐橋公園方面へ、あでやかな浴衣姿の娘たちや恋人同士のカップル、賑やかな家族連れが列をなしている。街全体がはしゃいでいる。これから始まる花火の夜が楽しみでならない。皆がわくわくとその興奮を抑えがたい様子だ。

そうした晴れやかな人波の流れとは逆に、一人中年男が重い足取りですれ違い歩いてゆく。平岡だ。

うつむき加減で、青ざめた顔をしている。華やぐ道の往

来も彼の目には映っていない。花火の観覧に集まる人々から一人遠ざかり離れ行くように、彼は川沿いの道を歩いている。

しゅうくん、しゅうくん。

頭の中で響き続けているその声に、耐えがたそうに顔をしかめ、彼は湖岸道路を歩き続けた。

どん、どん。遠くから音が聞こえる。花火が始まったのだ。

彼は湖に臨む人気ない遊歩道の、街灯に照らされたベンチに腰を下ろした。

どん。どん。巨大な太鼓が轟くような花火の音だ。そのたび遠くから歓声も聞こえる。彼は両肘を膝に付き背を丸め、身じろぎもせずじっとしている。目の前は夜の湖上だ。遠く明かりをきらめかせながら、遊覧船がボーと汽笛を鳴らす。

そのとき母親に手を引かれ、泣きながら小さな男の子がやってきた。まるで錯乱するように激しく泣きじゃくっている。手を引かれ、足をもつれさせながら、若い母親に叱りつけられている。

しゅうくん、しゅうくん。

ずっとその声が響いている。

過去の残影が彼の胸に浮かび上がった。

女の手首をつかみ、県営住宅の階段下まで降りてきた。

駐車しているレクサスの前へ連れて行きドアを開けると、女は途端に身体を硬直させ、つかんだ彼の手を振りほどこうと抵抗し始めた。

「下で話をするだけやて」

哀願する訴えに耳を貸さず、彼はその細い腕をひねり上げ、後部座席に突き飛ばすように押し込んだ。芳香剤の匂いがする車内に、女のもらした短い悲鳴が響いた。彼が続いて乗り込みドアを閉めると、車は低い音を上げながら夜の闇を走り出した。

女は呆然と驚愕した顔で彼を見つめ、あわあわとふるえるように口を開けては閉めている。

「こいつか」

助手席のヤクザが振り向いて言った。

「へえ」

平岡は頭を下げた。と、その若い女は身体をがたがたと震わせはじめた。そして、「しゅうくん、しゅうくんが」とうわごとのようにわめき始めた。

「すぐ帰れるさかい。心配すんな」

乱れた髪の間から目をむいて、女は激しくかぶりを振った。もう帰れないとわかつているのだ。

「しゅうくん、しゅうくんが、降ろして、しゅうくんが」

声を震わせ、女は泣きはじめた。そして平岡の腕をつかみ、身体を押し立て暴れ出した。

「うるさい。おい！」

助手席の男が苛立たし気に平岡に言い放った。平岡は左手で女の細い首をつかむと、右手の拳で力をこめ腹を殴った。芯のあるマシマロのような感触であった。女は嘔吐するような声を上げてうずくまった。

「誰や、しゅうくんて」

「はい、こいつのガキです。さっき布団の中で口開けて寝てましたわ」

「ふん、まだ小さいんか」

「ほんの小さいガキですわ」

女は身体を斜めにしてシートに横たえたまま、またうめくように泣きはじめた。

「ひどい母親やな。ガキ目覚ましたら、独りぼっちゃ」

男の哄笑に、平岡は媚びて愛想笑いを返した。

「しゅうくん、しゅうくん」

ひつくひくとしゃくりあげながら、女はくぐもったうめき声で、その名を呼び続けた。

平岡はベンチの上で土嚢を背負うような重苦しさにうめいた。すると彼は強く目を閉じ、激しく顔をしかめた。唐突に、遙か昔の記憶がよみがえったのだ。

いきなり頬をぶたれ、転がるように彼は部屋の隅に倒れ込

んだ。まだ保育園のリュックを背負ったままだ。詰め寄って来た男に胸ぐらをぐいとつかみ上げられ、さらにばん！と頬を張られた。熱い。そして息苦しくなった。シャツの襟首を強く絞り上げられ首がしまっている。父親は血走った目で、一言も発することなく、さらに一発、二発、彼の頬を張った。ばん、べちつ、という音が自分にも聞こえた。痛い。目を下に落とすと、菓子袋やビールの空き缶、そして即席麺のカップや脱ぎ散らかした服が散乱している。親父は胸ぐらを持ち替え、右手にこぶしを握った。目を閉じ、咄嗟に彼が顔をそむけたので、骨張ったこぶしが小さな顎に当たった。とてつもない痛みが頭の後ろまで響いた。口の中にしょっぱい味が広がり、また口の中が切れて血が流れ出したのが分かった。もう一度手を振り上げたが、親父はその腕をゆっくり下ろすと、突き飛ばして彼を離れた。

その仕打ちの理由はわかっていた。保育園の帰り道、彼がその二文字をうっかり口にしたからだ。ママ。つい、ママというその二文字を彼が口にしたとたん、黙ったまま父親がみるみる激昂したことが彼にもわかった。しまった。怯えた心が冷たく震えた。家に帰ればまた折檻される。彼にはわかっていた。

ようやくリュックを肩から下ろし、彼は小型ゲーム器を手に取り、壁にもたれ朝の続きの画面を開いた。炬燵テーブルに座って、大きな透明ボトルからコップに焼酎を注ぐ

父親の背中が目の前にあった。ゲームのピロピロという音とコップを置く音だけが、薄暗い部屋に響いていた。

平岡の胸に名状しがたい情動が大きく膨らみ、そして胸苦しく込み上げた。

と、遠くから続けざまにどんどん、と花火の音が響き、ひととき高い歓声が聞こえてきた。木立の間から、大輪の花が重なって夜空に大きく広がるのが見えた。フィナーレである。その日いちばんの歓声と拍手の音が遠く届いた。

それきり花火の音は途絶え、彼が座るベンチの遊歩道も、花火帰りの人通りが目立つようになってきた。彼はベンチに腰掛けたままだ。じつと身じろぎもせず、黙って座っている。

そうしてしばらくすると、ぼつりと彼の腕に小さな冷たい感触があった。そしてもう一つ、さらにもう一つ。雨だ。

彼の前を、人々が騒ぎながら急ぎ足で駆けてゆく。はじめさらさらと降り注ぐだけであったが、間もなく雨は叩くように強く降り始めた。座っていた彼の腿に雨粒の沁みがいくつも滲み、短髪をつたって雨が顔を流れ落ちる。しかし彼は立ち上がる気配もない。

彼は濡れであった。時折、ベンチで一人濡れネズミになっている彼に目を留める者もあったが、関わり合いに

訝な顔で平岡がほんやりその青年を見ていると、その背後から、

「傘使ってください。風邪ひきますよ」

小さな女の子の手をひいた丸顔の若い婦人が、彼にそう語りかけた。

「どうぞ」

そう言って青年がもう一度、彼に傘を差し出した。平岡がその傘を受け取ると、二人はうれしそうに笑顔に浮かべた。そして青年は小さく会釈すると女の子を抱き上げ、ひとつ傘に女性と肩寄せ合って、立ち去った。もうほとんど雨は小降りになっている。

「大丈夫ですか」

青年の優しい声が彼の心に残った。

「風邪ひきますよ」

女性のいたわりが心の傷口をえぐるように裂いた。

前川刑務官は早めに敷地内の官舎に帰ると、後輩らと一緒に花火大会へとやって来ていた。久しぶりの花火を満喫したあと、彼は皆と別れ牛井屋で時間をかけて大盛を平らげた。そしてこれからパチンコ屋に向かおうと、軽自動車のハンドルを握っているところであった。

雨はすっかり上がって、湖岸道路にもう人影はほとんどない。信号が赤に変わり、彼は停車した。

はなるまいと誰もが気づかぬ風を装い、そのまま通り過ぎて行った。

うなだれたまま、まるでシャワーを浴びるように下着までぐっしょり雨に打たれている彼の脳裏に、脈絡なく過去の幻がモニタージュのようによみがえり、彼を責めた。

自殺した娘の恨みに駆られ、殺してやると震えながら彼の前に立ったよぼよぼの老爺。恐怖に怯え、洒落た格好のまま地面に這いつくばって土下座した長髪の学生。鼻で笑い、嘲り、その悲痛な訴えをはねつける痛快さに、思わず笑い出した彼。あの子もいなくなると、憎々し気な目で睨んできた少女の髪をつかみ上げ、怒鳴りつけて飛ばした唾。引っ込みがつかなくなり、見え透いた嘘をついてから、突然脱兎のごとく全力で駆け逃げ出したアパートの玄関先。

次々に記憶の断片が、牙を剥くように襲いかかる。ゴミのくせに。林の音が響き渡る。生きている価値もない、クズ。彼は息もできない苦しさにくめいた。

「大丈夫ですか」

そのとき突然声をかけられ、平岡は現実を引き戻された。顔を上げると、額の狭い小柄な青年が心配げに覗き込んでいる。

「風邪、ひきますよ」

そうして開いたビニール傘を平岡に差し出している。怪

と、前から浮浪者然とした男がとぼと歩いてくる。薄汚い男やな、と思った瞬間、はっとして気がついた。

「平岡！」

車のかたわらを通り過ぎる平岡に大声で呼びかけたが、ウィンドウを閉じたままでは聞こえない。あわててガラスを下げたが、もう彼は通り過ぎたあとだ。

前川は信号が変わるとアクセルを踏み、すぐに左折して、ぐるりと回り込み、もう一度湖岸道路に先回りして戻った。速度を落とし、歩道に注意しながら進むと、前方にもう一度平岡の姿が見えた。

停車して窓から顔を出すと、前川は大声を上げた。

「平岡あ！ 平岡あ！」

気がついた彼は、手招きする前川の方へ寄ってきた。

「お前、出所証明なくしたやろ。今、交番にあるんや」

車から身を乗り出してうれしそうにそう言う前川を、彼は不思議そうに眺め返している。

「今から、交番に連れて行つたろ。乗れ」

そう言ったそばから、彼のびしょ濡れに前川は気づいた。

「ひでえな。ちよつ、ちよつ、待て待て。ちよつと待て」

早口でそう言うのと、車から出てきて、トランクをごそごそとかき回す。ビニールの大型ゴミ袋を引つ張り出し、ごわごわに乾いて丸まったタオルをつかんだ。

助手席にビニール袋を敷くと、タオルを渡して、彼に乗

り込むように促した。

「お前、どないしたんや」

笑いながら前川はそう言うと、車を発進させた。平岡はタオルを握ったまま助手席でじっとしている。

「どないしたんや」

今度は少し優しい口調で、もう一度前川は尋ねた。死人のようにうつろな顔でただ黙っている平岡の様子に、前川は少し神妙な顔をしてからゆっくり口を開いた。

「市役所からの電話のあとでな、お前の出所証明を見つけた言うて、警察から電話があったんや。助かったな。命拾いや」

それを聞いて、平岡はまるで今気づいたといった風に、前川の顔を驚いたようにじっと見つめた。そしてひょこりと黙って頭を下げた。前川は、ちらと横目で平岡の様子を見ると、ふんと鼻を鳴らした。

「お前、ええ顔してるやないか。なんぞええことあったんか」

平岡がむせるように咳き込み、そしてたまりかねたように嗚咽をもらした。

前川が優しい顔をした。

「そうか」

その声を聞くと、平岡は鼻をすすり、やがて子供のよう泣きじゃくりはじめた。

黙ったまま、前川はハンドルを握っている。

顔をタオルで覆い、彼は獣のような声を上げて号泣した。

「お前、平岡、月出てるぞ」

前川はフロントガラスに顔を寄せ、夜空を見上げている。平岡の慟哭は、いつまでも続いた。

和田は保険課を出てゆく平岡の背中を見送ると、窓口に腰を下ろした。

同僚がまた傍らに立った。

「今日は暴れへんかったな」

和田はうなずいてから、

「何かあったんかな」とぼつりもらした。

平岡の顔つきが、昨日とは別人のように違って見えたからだ。

和田は、同僚に一枚の書類を差し出して見せた。

「おお。これか」

同僚は覗き込むようにして読みあげた。

「平岡守男。下記のとおり、当所を出所したことを証明する。石山刑務所。ふうん。これが出所証明書か」

「コピーな」

「そうか、これでようやくあいつも出所か。保険証はできたのか」

「ああ」

銀華文学賞 受賞の言葉 原浩一郎

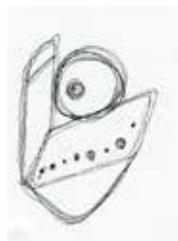
前回受賞した当時は文学界隈のことにまったく無知で、遠近感もわかっていなかった。それから五年、ずっと文学のことを考えてきた。

ときに文学においてさえ「心温まるいい話」を求められ、書くこちらもどこかで「ひとかどの人物」を気取るなら、よい作品など生まれようがない。

ならば現実が深部から訴えているものをどのように物語に結ぶか。そもそも力のある文学とはどういうものなのか。

私にとって「文芸思潮」は、正統なリアリズム文学を守り称揚する言わば運動体であって、内輪の懐古や愚痴で閉じるなどありえない。だから今回の受賞によって、とどまることがなくいっそう行けと、さらに急ぎ立てられているように私には感ぜられる。

選考委員の方々に、心から感謝申し上げます。



和田は出所証明を手に、しばらくじっと眺めている。そうして、他の書類と一緒にクリップで留めるとレターケースに収めた。

「はい、次にお待ちの方」

保険課に声が響いた。

原 浩一郎 はら こういちろう

1955年生まれ 大津市在

PFI 刑務所教材として小説を書き始める
各地の「文学フリマ」に出店し、直接読者と出会いながら、投稿文芸誌「文芸エム」を編集発行
2015「アクリル板」で第11回銀華文学賞受賞
滋賀県文芸出版賞ほか受賞
作品は映画化や舞台化公演も

トランクルーム

室町 眞

その「奇妙な空間」を、誠司^{せいじ}がやっと手に入れたのは春のさなかだった。

多大な興味をそられたそもそのきつかけは、買い物や通勤で利用していたバスの車内で見かけた不動産広告だ。そこには「賃貸式トランクルーム」の物件情報が掲載されていた。その日から楽しい夢想ばかりが日々拡大し、どうにも抑えきれなくなってしまった。

しかしながら、物件の賃貸契約を交わした場合、その事実を家族に対してどうやって隠蔽^{いんぺい}したらいいのかが気がかりとなって、なかなか決断ができなかった。幼いころから何か隠しごとをすると、必ず表情に出てしまう小心者だったのだ。

は吉祥寺の駅前にある不動産屋だ。

店内に飛び込むと、誠司は喜々とした表情でさっそく物件を切り出した。

「広告を見ました。あのトランクルームをお借りしたいのですが」

応接した中年の店長は濟まなそうに答えた。

「あいにくすべての物件は契約済みで、キャンセル待ちリストの二番目となります。早くても一年、場合によっては二年以上も空きが出ないことがあります。それでも構わんでしょうか？」

「二年……」

思わず言葉を呑み込んでしまった。間違はなく空きがあるだろうと、すっかり高を括っていたからに他ならない。事前にインターネットで調べておくべきだったかもしれない。これではいかにも浮かれ過ぎだし、くだくだと、さんざん迷っていた己の優柔不断さにも腹が立った。

「何か似たような物件はありますか？」

念のために尋ねた。

「残念ながら」と店長は手を広げた。「何しろトランクルームは希少でね」

店長の体から漂い出てくるニコチン臭がひどく気になった。おそらく、今どきには珍しく両切り煙草を愛用しているのだらう。誠司も喫煙者ではあるが、年齢を考慮してフィ

「ええい儘よ、とにかく当たってみるしかない」

その午後、誠司は遅蒔きながら、ようやくそう決断し、下ろし立ての白いスニーカーを履いて自宅を出た。周辺の樹々は若葉をたつぷりと蓄え、頬をよぎる風が温く感じられた。

道路に面した家々の庭には色取り取りの花が咲き揃っているし、出窓に座っている猫は赤い舌を伸ばして大あくびをしていた。庭に寝そべった犬も目を眩しそうに細め、鼻をひくひくさせている。やっと踏ん切りをつけた初老の男をあたかも祝福するかのよう。

真新しいスニーカーは、日差しを反射して歩みの光跡を残し、誠司の足取りはいつになく軽快だった。向かった先

ルターつきの、しかも軽めのタイプを吸っている。

「他の不動産屋さんはどうでしょうか？」

諦めきれずに聞き返す。

「たぶんどこも同じでしょう。けっこう人気がありますから」

店長のつれない返事に、誠司は長い溜め息をついた。もし俺に自由になる金さえあれば、こんな姑息な手段に頼らなくとも、いくらだつて方途があるのに……。定年退職したわれとわが身が恨めしく思えてならなかった。

誠司が目をつけていた件のトランクルームは、中央線の三鷹駅から歩いてわずかに十分ほどの好立地にあった。坪数に換算するとおよそ三畳分に相当する。

そういう空間が月々の賃料、たった二万三千円で自分の所有物となるのだ。民間のアパート代として計算してみれば、けっこう安価であることは間違いない。一畳当たり八千円弱。決して悪くはない値だ。

キャンセル待ちリストにやむなく氏名を記入し、誠司は大きな無力感に苛まれたまま店を出た。それでも「もしや」と未練たらしく考え、駅前に立ち並んでいる不動産屋を手当たりしだいに訪ねてみた。あるいは執念と言ひ換えてもいいかもしれない。

しかしながら「すべて契約済みです」と、どの不動産屋

の店員も申しわけなさそうに答えるだけだった。「何しろ、一万から二万円くらいで、けっこうなスペースを確保できるんですからね。トランクルームはお客様にとって、そりゃ、魅力ですよ」

たしかに店員が指摘するとおりだ。それにしてもなぜ、たかがトランクルームごときに、これほど人気が集まるのだろうか？ 誠司は頭をひねった。どう考えてみても、ゴミ屋敷みたいに不要になった物質が溢れ返り、始末に困っている住民が大勢いるとは考えにくい。それとも「断捨離」が苦手な欲深い連中が巷にはうじゃうじゃいるのか。

だいいち、どの家庭だって、核家族が進んで、空き部屋がいっぱいあるはずだ。だったら、そこに荷物を放り込めばそれで済む話じゃないか。あえて余所に、わざわざ「物置」を借りる必要などない——そう思えてならなかった。

でももしかしたら、俺が頭の中に思い描いているように、トランクルームが本来持っている機能とはまったく違う使い方をしている輩がいるのかもしれない。それなら話は別だ。

「断じて諦めないぞ」。

気落ちしていた気持ちをどうにか奮い立たせ、誠司は最後に訪れた店を出た。一度思い描いてしまった楽しい夢をこれ式のごとで簡単に閉じて堪るか。まさにそういう心境

妻も妻で、文句や不平を漫画の吹き出しみたいにはこぼこと吐き出しながら、日々家の中で怠惰に過ごしている。何かのパートでもして、家計をちよつとでも助けてもらいたいと常々考えている亭主の気持ちなど一切顧みず。しかもまだ五十八歳なのに。まあ、妻に本音をぶつけられない夫のほうにも問題はあがあるが。

おまけに、夫に先立たれて独り身となった母親の智代ともよも同居しているから、たまつたもんじゃやない。ご多分に漏れず、嫁と姑との仲は険悪そのものだ。智代は八十六歳。若い時分から独り善がり、一度言い出したならなかなか引き下がない厄介な女でもある。昔から一人っ子の誠司を猫可愛がりし、たえず拘束してやまなかった。

そういう母親を、誠司は物心がついたころから疎みとど続けてきた。その思いは成長するにつれてますます強固になり、どうにかして母親から離れたくて（解放されたくて）、大学を卒業後、わざわざ遠く四国を本拠地に行っている企業に就職したほどだった。

ところが、これでようやく自由の身になれたと安堵したのも束の間、当の母親は、こともあろうに自分の夫をほったらかして、息子の住む徳島のアパートに毎月のように通い詰めた。羽田から飛行機に乗って、五〇〇キロ以上の遠距離をまるで厭いとわずに。

これじゃあ、どこに逃げても必ずつきまといってくる背後

だったのだ。いかにもうかつ過ぎた自分をすっかり棚に上げ。

誠司は六十六歳。週に三日ほど、とある小さな出版社に通い、エッセーや自伝などを自費出版したいと相談にやってくる顧客の世話をしている。たとえば、素人が書いた原稿に朱を入れて文章を手直ししたり、レイアウトのアドバイスをしたり、あるいは校正を手伝ったりするのが職務だ。

長年にわたって携わってきた、編集者としての腕を買われて再就職したのだが、しょせんはパートの身分に過ぎない。当然ながら実入りは微々たるもので、年金と合算したところで、たいした収入にはならない。あるいは、ほとんどボランティアといってもいい仕事かもしれない。

生活が決して苦しいわけではないけれど、余裕があるともいいがたかった。実際に、妻と母親に強要されて、退職金も多分に老朽化した自宅（父親が建てた家だ）のリフォーム費用や、新車の購入代金に充ててしまったから、残額だっていささか心細い。

まして、三人いる子供のうち、二人の女の子はまだ大学生だし、唯一社会人になっている長男は、非正規雇用の不安定な分際ぶんざいに甘んじたままだ。現状を打破しようという意欲すら持っていない。要するに、すっかり親の脛すねかじりを決め込んでいるわけだ。

霊と同じだ。さすがの誠司も唾然としたけれど、母親は息子の当惑など一切気にかげず、世話を焼き続けた。それがたった一つの生き甲斐だと主張するがごとく。

こうした智代の過度な愛情は、会社が倒産して、誠司が東京の実家に戻ったあと、さらに加速した。こうなったら、結婚して独立するしかない。そう決意した誠司は嫁探しに奔走した。だが、相手に自分の下心を見透かされるのか、まるでうまくいかなかった。こうして婚期はますます遠のいた。

それでも四十代になったころ、会社の同僚に紹介された女との交際が始まった。今の妻・美佐子だ。美佐子はかなり派手目のバツイチだった。離婚の痛手がそうさせているのか、世の中を斜めに見ているところがあつたし、容姿も誠司にとって決して好みではなかった。とはいえ、案外素直な一面もあり、ふとした弾みで肌と肌を合わせてみたら、妙に心地もよかつたから、交際はしばらく継続した。

つき合いが深まったある日のこと、美佐子は普段使いをしている長く濃い「パパパタつけまつ毛」をすっかり拭い去った目元を、わざとらしく見せつけながらこう言った。

「ねえ、今日の私ってどう？ きつとこっちのほうがあなた好みよね。もしあなたと再婚できたら、あたし変われそ
うな気がするの。赤いマニキュアだってせんぶ捨てるつも

りよ」

いかにも恥ずかしげな口調の告白だった。何だか昔、森進一が歌った演歌の歌詞みたいだなと、誠司は訝った。

美佐子は疑りの目を向ける誠司を尻目に、すぐさま追い討ちをかけた。「あなたのご両親を、自分の親以上に大事にするって約束するわ。普通の主婦として家事にも励む。出汁は毎日鰹節と昆布で取る。顆粒のダシの素なんか一切使わない。こう見えて、子育てだってちゃんとできるつもり。それならどう？」

誠司は瞬時に頷いてしまった。あるいは情にほだされたのかもしれない。結局、これが殺し文句となって二人は半年後に挙式した。あとになってよくよく考えてみたら、大きな勘違いそのものの結婚だったと気づいたが。

結婚後、夫と妻の間柄は急速に冷え込んだ。たしかに薄化粧にこそなったが、妻がそれ以外の前言をすべてあっさり翻したからだ。親も大切にしなければ、家事にも励まない。食卓に並ぶのはいつも冷凍食品ばかりだし、子育てだってはなはだ不熱心だった——あれほど固く約束したにもかかわらず。

けれども誠司は大きな不満をぶつけることもなく、妻の自儘な言動を放置した。もともと深い愛情で結ばれて一緒になった相手ではない。だから口論をするのさえ面倒に思えてならなかったのだ。

あるいは、母親との緩衝材代わりの存在として、いない

よりは、まだいたほうが幾分かましだと考えたからでもあった。実際に、母親の怒りや憤りが妻に向かっている間だけ、誠司は煩わしい母親から解放された心地になった。

そうこうするうちに父親が急逝し、母親も脚の自由を失って、家族や他者のつき添いなしには動けない身となつてしまった。これではもう母親と世帯を分離することなど不可能だ。こうして、いつか時期を見て実家から独立しようと考えていた誠司の目論見は脆くも根底から崩れ去ってしまった。

なぜ俺はあのころ、結婚して家を出ようなどと馬鹿げたことを考えたのだろうか？ 誠司は今さらながらに、自らの愚行を悔いた。母親から単に逃げるだけなら、わざわざ結婚などしないので、一人で居を別に構えればそれで済む話だったのだ。

「いや、それでは駄目だ。四国に赴任していたころのように、俺を追いまわすのが関の山だ。だから結婚する以外に手立てはなかった」。誠司の愚痴は際限なく続いた。

二週間後、思いも寄らない電話がかかってきた。あの不動産屋の煙草臭い店長から「空きが出ましたよ」と連絡があったのだ。

誠司は高鳴る気持ちを抑え、吉祥寺の駅前に向かった。

あの日以降、インターネットであれこれ検索したのだが、

少なくとも半径十キロ圏内には、想像したとおり、希望するタイプのトランクルームの空きは一つもなかった。だから絶望感に苛まれながらも、「縷の希望を繋いでいたのだ」。

「いやあ、あなたは実にラッキーなお方だ」と店長はニコチンで汚れた前歯をむき出しにして笑った。「急な転勤が決まったお客さんが何と一挙に二組も出て解約なさったのです。こんな幸運ってめったにあるもんじゃない。お客さん、この分ならロト6も当たるかもね」

「宝くじはともかく、たしかにツキがあるようです、僕には珍しく」

「で、どうされますか？」

「もちろん契約します。ちなみにいつから使えますか？」
「今すぐにでも。隅から隅まで綺麗にお掃除してありますからね」

誠司はポケットから、あらかじめ用意してあった印鑑を取り出し、契約書に署名と捺印をすると、二か月分の前家賃、四万六千円を現金で支払った。

「一階の三号室です」と店長は鍵を二本差し出した。

その鍵を手にした瞬間、誠司は思わず涙が出そうになって、いささか慌てた。これほどまでの大きな喜びはここ二十数年間、一切記憶になかった。もしかしたら、わが半

生で最大級の歓喜だったのかもしれない。

「これでやっと不用品の整理ができますな」と店長は目尻にしわを寄せた。

「いや、使わなくなった荷物を運び込むわけじゃないんです」

店長は首を傾げた。「まさか個人事務所にでもするんですか？ 窓はないし、電話線やネットの端子なんか施設してませんよ。まあ、エアコンはちゃんと設置してあるけど」「ご心配なく。別に怪しい使い方をするわけじゃない。家族に内緒で大事なものをこっそり保管しようっていう寸法ですから。不用品じゃなく、ね」

誠司は人差し指をこめかみに当て、頭は使いようだと自慢げに笑みを漏らした。

「なるほど」店長は小刻みに頷いた。

「たしかに人に知られたくない秘密って、だれにだって一つくらいはあるからね。実にいろいろな使い道があるもんだ。みなさんのアイデアの豊富さには常々感心させられます。ま、せいぜいご用心を。秘密って案外バレるもんですから」

不動産屋を出ると、すぐに電車に乗り、たった今、手に入れたばかりの物件に向かった。スキップをして手を交互に振りながら歩道を歩きたいほど心が沸き立っていた。

誠司は三鷹駅の改札をくぐり抜け、ふわふわする心地のまま北の方角に歩いた。三鷹は駅前こそ再開発が成されてかなり賑やかだが、六、七分も進むと長閑な田園風景が広がっていた。目当てのトランクルームはそういう新興住宅街の一角にあった。鉄筋二階建てで一見するとワンルームマンションのような外観をしている。ただ、当然というのか窓がついていないから、どこか不愛想ではあった。

この物件と賃貸契約を交わしている人々は、自宅に入りきらなくなった何かの邪魔物——たとえば不必要にこそなったが、まだ捨てるほどには古くない旧型の家電製品や時代遅れの服や、かつて子供たちが喜んで遊んでいた玩具の類いなど——を、たぶん運び込んでいるのだろう。

たとえどんな事情があるのが、「物品を保管する」のがトランクルームの本来の使用目的だ。従って、その範囲内なら人がどのように使おうが基本的には自由だろう。ましてほとんどの契約者はいったん荷物を運び入れたあとはめったにやっつけないはずだ。

「そういうところも実に都合がいい」
誠司は呟いた。ここでは、できるだけ他者とは顔を合わせたくなかったからだ。

内部の様子を窺うと、通路を挟んだ両脇に八つの部屋が立ち並んでいて、スチール製のいかにも頑丈そうなドアが無機質で鈍い光を放っていた。鍵を繋いでいるプラスチック

をかさねるにつれてますます増大していた。いきおい自宅は牢獄然となった。三人の子供を含め、六人の大所帯だから、自分専用の個室だつて持つてずと我慢を続けてもいた。

「だれにも気兼ねなく過ごせる一人だけの空間が欲しい」
いつしかそれが誠司の強い希求となった。しかしながら退職後の乏しい収入では、煙草代や書籍費など、小遣い金をどうにか遣り繰りして細々と生きるしか方途はなかった。そのようなわけで、どう算段したところで、自由に使える金は一か月当たり、せいぜい二万円止まりといったところだった。それもかなり無理をすれば、の話である。

これではトランクルーム以外の場所（たとえばアパートやレンタルルーム）を借りることなど、とうてい不可能だ。まして自宅は敷地が狭いから建て増しして、自分の部屋を確保することなど夢のまた夢だった。むしろその資金だつてない。

だが、その見果てぬ夢が今日、ようやく叶ったのだ。久々にきつい拘束から解放された思いが込み上げてきて、誠司は全身を震わせた。

誠司が立てたプランは「ここを自室とし、秘密の隠れ家代わりに使用して、だれにも邪魔をされない自由な時間を過ごす」というものだった。われながらよくこんな妙案を思いついたものだ。こういうのをきつと窮余の一策という

ク製の柄には「103」と刻印されている。鍵を振り振り、奥に向かって真っすぐに伸びる一階の通路を進んだ。目当ての部屋は突き当たりの一つ手前であった。

鍵を差し込んでドアを開け、室内に入って電気のスイッチを入れた。心臓がドクンと脈を打つ。かつて大学生だったころ、交際相手の女の部屋を初めて訪ねたときと同じ興奮が瞬時に蘇った。

室内は間口がやや狭い縦長で、周囲の壁はコンクリートの打ちっ放し仕様だった。床も同様の造りだ。天井を見上げると、嵌め込み式の蛍光灯が明かりを点していた。この分なら電気スタンドがなくとも本が読めそうだ。周囲の壁の素っ気なさとはかく、床はいかにも寒々としているから、何らかの敷物を用意したほうがいいかもしれない。

もしここに欠点があるとすれば、室内では煙草を吸えないことぐらいか。まあ、それもやむを得ないだろう。このご時世、どこに行っても愛煙家は嫌われるのだから。

正面の壁の上方には、店長が保証していたとおり、エアコンが設置してあった。これなら、夏でも冬でも気温に左右されることなく長居ができる。これはバスの車内で広告を見たときから、絶対に外せないキーポイントとして気にかけてきた最重要事項だった。なぜなら誠司はここで「長居をする心積もり」でいたからに他ならない。

実は妻や母親に対する誠司のうんざりした思いは、年端

のだろう。

「ここが俺の場所だ」と誠司はだれもない空間に向かって大声で叫んだ。シルベスター・スタローンが演じたあのロッキーが、小高い丘でそうしたみたいに。

そうなのだ、誠司にとって、そこはまさしく「新天地」だったのだ。

誠司は満足げに一人領きを幾度も繰り返した。それにしても、妻や母親に気取られぬように、どうやって自宅からここへと荷物を運び込んだらいいのだろうか？ 不意に嵐の前の、黒雲のような大きな懸念が浮上した。

けれどもそうした心配は幸運にも杞憂で済んだ。トランクルームを手に入れた数日後、妻の実家から、父親が転倒して腰の骨を折ったと電話があったからだ。

「二、三日あつちに行く」と言い置いて、妻は慌ただしく出かけていった。お説え向きに母親も送迎つきの敬老会に出かけていて留守だった。妻を見送ったあとで、誠司は押し入れの奥に首を突っ込み、家族には長い間隠し通して保管してあった段ボール箱を引っ張り出した。

箱の中に大事に仕舞ってあった品々は、他者から見ればたぶんたいした代物ではないだろう。けれども誠司にとつてはかけがえもなく大切な品物ばかりだった。たとえば、ビートルズとかビーチボーイズとか加山雄三とかのレコー

ドアルバムやCD、『ウルトラQ』や『ウルトラマン』に登場した懐かしの怪獣たちの貴重なフィギュア。

あるいはアグネスラムや秋吉久美子の裸体がまばゆい写真集。それから青春時代につき合っていた女たちと一緒に撮った、かなり際どい記念写真やたくさんのラブレター等々……。とにかく自らの半生の思い出に満ち溢れた数々の品がぎっしりと詰まっていた。

ちなみにそれらは、会社の自分専用のロッカーに長期間にわたって保管し、「もし俺に何かあったら、中身を見ずに黙って処分してくれ」と同僚に頼んでいた、まあ、ある種いわくつきの品でもあった。しかし、定年後のパート先ではロッカーなどと与えられず、やむなく自宅に運び込み、こっそりと(日々ハラハラしながら)隠し持っていたのだ。

レコードは妻の前で聴く程度なら大きな支障はない。だが、それではまるで楽しくない。だいいち、往年のアイドルたちの写真集を、いかにもにやついた表情で眺める場面など決して見られたくない。もし仮に妻に目撃されたら、「嫌らしいジジイ」と、あからさまに馬鹿にされるのがオチに決まっている。

誠司はこうして思い出の品々を難なく103号室に運び入れた。小型の電気ポットやドリップコーヒーや、カップに魅了されたのは子供のみならず、広く大人にまでおよび、その絶大な人気はこんにちに至ってもなお衰えを知らない。つまりロングセラー商品でもあるのだ。

子供時代の誠司は、この「プラレール」を自室の床の上に見いっばい敷き詰めたくてならなかった。それでさんざん親にねだったが、貧乏な家庭で育ったせいで、吝嗇家だった父親にこともなげに拒まれてしまった。息子には何かとあまい母親も、当時はまだ夫に黙って従うしかない頼りない存在で、「ごめんね、誠ちゃん。お母さんには自由になるお金がないのよ」と嘆くしか手がなかった。

その子供のころの叶わなかった夢への願望が唐突に蘇ってきたのは数年前だった。どうにかして「隠れ家」を持ちたいと願うようになった、ちょうどそのころである。

誠司は吉祥寺のデパートで、両手に持ちきれないほど多量の「プラレール」を買ひ込み、103号室の床面に敷き詰めた。さらに、ことあるたびにデパートに足を運び、レールや車両の数をいそいそと増やしていった。むろん坪数に限りがあるから、ループ状の高架橋を巧みに配し、「上へ、上へ」と路線を広げるしかできなかったけれど。

中でも誠司の一番のお気に入り、開業当時の新幹線、「0系こだま号」だった。0系新幹線がカラカラと爽快な音を立てて走るのを見るにつけ、誠司はたちまち童心に帰った。その姿は無邪気そのもので、もはや子供心を失っ

や皿も持ち込んだ。二畳ほどのフロアーマットも、吉祥寺のホームセンターで買ってきて床に敷いた。

また、自宅の隅で埃を被っていた文机も運び入れ、その上にカセットデッキを置いて、懐メロソングを堪能した。興が乗るにつれ、自ら大声を張り上げて歌いもした。あるいは怪獣のフィギュアを両手に持って「ガオウ、ガオウ」と子供のころさながらに、奇声を発しながら思う存分戦わせた。

さらにそれにも倦むと、例のアイドルたちの、懐かしの写真集のページを夢中になって繰り、「乃木坂46なんか目じゃねえ」とうそぶきながら、隅々まで眺めつくした。そのどの場面も過去の記憶をまざまざと蘇らせて、誠司の胸を熱くした。

フィギュアや写真集など、長い間自宅に隠し持っていたものではなかったけれど、誠司にはどうしても実現させた夢が他にもまだあった。「プラレール遊び」である。

「プラレール」は、一九五九年にトミーから発売された鉄道玩具で、直線と曲線で構成された青いレールの上を、単二や単三の乾電池を用いて自走する三両編成の列車が基本となっている大ヒット商品だ。

さらにこの基本形に、踏み切りやループ状の高架橋や駅舎や信号機など、様々なオプションをつけ加えることで、実際の鉄道が持つ臨場感を家庭内で手軽に再現できた。こ

た妻にはどうも理解できない類いの喜びに満ちていた。「プラレール」に勤しむ夫の姿を垣間見たときの、妻の蔑みに満ちた視線を想像するだけで、「あいつには決して分からん男心だ」と誠司はいつも鳥肌を立てた。

しかしながら、何にもまして誠司を激しく揺り動かしたのは、かつて徳島で一人暮らしをしていたころに交際していた女たちの顔写真やラブレターの数々だった。生まれて初めて、強張った表情で入り口をくぐったラブホテルで撮影した、半裸のポートレート(セルフタイマー機能を使って撮った)や、浮ついた文言が並べ立てられている恋文等々。それらは誠司を遠く青春の日々に引き戻して、たとえようのない切なさで迫ってきた。

そこには今さらいくら努めてみても、もはや決して取り返せないであろう一途な心持ちが満ち満ちていた。むろんその大半は、若さゆえの過ちや勘違いに縁取られてこそいたが、それでもどこか真摯で瑞々しい観点に貫かれていた。「こんな俺にもそんな無垢な時代があったのだ」

そのようにトランクルームの一室は、誠司にとつてたちまち「唯一、心が休まる場所」となった。もはや窓がないとか、狭いとかといった欠点など気にもならなかった。

「一人だけでいられるって、何ていいのだろう」

誠司はトランクルームの扉を開けるたびにそう痛感し

た。この世の中、どこに行つたつて他者の目がある。自宅
でさえ、家族という他人の視線に見張られている。それら
の煩わしさから隔絶できる気分は何物にも代えがたい。

「これが快樂でなくて、いったい何なのか」

もちろん、103号室に通うに当たっては、妻に怪しま
れないように細心の注意を払った。たとえば滞在時間は可
能な限り短くしたし、休日はあえて家において、パートの仕
事のある日だけを選んで出かけた。むろんスマートフォン
の電源もあえて切らずにいた。

そうやって一か月間、誠司はトランクルームに通い続け
た。

いつものように妻の目を盗み、トランクルームについた
ときだった。珍しいことに、初老の男が二人で、軽トラッ
クから荷物を降ろしている場面に偶然出くわした。彼らは
いったい何を運び入れようとしているのか？ 妙に気が
なつたから道端の生け垣に腰をかけて煙草を吸う振りをし
ながら、それとなく様子を窺った。

男たちが車から降ろしている荷物は、白い布ですつぱり
と覆われていたけれど、角型であることから察するに、ど
うやら家具に類するものようだった。やっぱり家具か、
と心の中で誠司が呟いたとき、白布がさつと剥ぎ取られた。
中から現れたのは堂々たる構えの仏壇だった。おそらく

男は「新しけりゃ、それでいいってもんじゃない。そう
でしょうが」と吐き捨てるように言い残し、大股で車のほ
うに戻つていった。

誠司は男と別れ、部屋に入った。コーヒーを淹れて一息
つこうと、視線を文机の上に移したときだった。飲み残し
の水が入ったコップの水面が電灯の明かりに反射して、わ
ずかばかりではあるけれど緑色に光っているのに気がつい
た。

何だろう？ 身を起こすとコップの中を覗き込んだ。微光
を発していたのは水に浮かび、緑色に背光りしている黄金虫
だった。いつの間にかこんなところに紛れ込んだのか？ た
ぶんドアの開け閉めの際に入ってきたのだろう。

しばらく見つめたが、その小さな虫は身じろぎ一つしな
かった。水の上にひっそりと浮かんでいるだけだった。役
割を終えた小舟のように。誠司は人差し指の腹を使って、
黄金虫の背中を念のためにツンツンと触ってみた。黄金虫
は意外にも誠司の動作に呼応するかのようになんて動きで
手足をちよつとだけ動かしした。

「こいつ、まだ生きていやがる」

もう一度、黄金虫の背に指を当てて押し沈めてみた。し
かし六本の足が表面張力の役割を担うのか、あるいは体重
がごく軽いためなのか、決して沈まなかった。今度は指を
腹側にまわし入れ、掬い取ると文机の上に載せた。黄金虫

は黒檀を素材に使い、その表面に漆を幾重にも丁寧に塗り
かさねて製造された高級品だろう。そこいらに転がってい
る安物とは輝きや艶がまるで違う。

誠司の様子が気になったのか、二人連れの片割れが「い
やあ、拙いところを見られてしまった。さぞや不謹慎者と
思われたことでしょうね」と頭を掻いた。いかにも恥じ入
るように。どう答えていいか分からず、誠司は黙って煙草
を吹かした。

「ここは不要になったブツを運び込むところですよね」と
男は念を押すように仏壇を指差した。「要するにアレだつ
てそうなんです。今じゃわが家では無用の長物なんです」

誠司は心持ち身を乗り出した。男は話を続けた。

「妻や子供たちがひどく嫌がるんです、線香の匂いを。辛
気臭いと大げさに手で扇いで。狭い家なんだから、その分
のスペースだって無駄だ、大型のテレビを買って置きたい
とも。何ともひどい言い種くさじゃないか。でね、やむなくこ
うなつたわけです、情けなくも」

誠司はつられるように頷いた。男の相棒は「早く済ませ
うぜ」と手招きした。

「どうかお笑くださいいな。でもほんと堪らんのです、
ご先祖様を粗末にするのは。あたしや、古い人間かね」

「いや、きわめてまともですよ」と誠司はお世辞ではなく、
本心からそう思っ頬をふくらませた。

はうずくまるようにじつとしていた。

誠司は笑みを浮かべた。「どうやら俺にも同居人ができ
たようだな。口を一切聞かず、干渉すらしらない、ありがた
い相棒様が」

その日から、誠司はエアコンの温度の調整に配慮した
り、甲虫類が好む黒蜜や果物などの餌と水を絶やさぬよう
に用意したりした。すべては新参者の相棒のためだった。

ややあって、トランクルームを「荷物の保管」以外の目
的に借りているとおぼしき人間が、自分の他にも存在する
ことに気がついた。

そいつは、いかにもオカマっぽい風体の中年男だった。
男は週に二度ほど、なよなよとした歩き方でやってくる
と、風のように右隣の102号室に入室し、三時間ほど滞



カンボジア難民の悲劇を描く
1700円(税込/送料共)
御注文はアジア文化社まで

在すると、きたときと同様に変な動きで腰を振り振り帰っていった。

あいつは部屋の中で何をしているのだろうか？ 誠司はたちまち興味をそそられた。それで壁にコップを当てて隣室の様子を窺った。するとガムラン音楽風の妙にセクシーな旋律が聞こえてきた。さんざん妄想をしたあげく、誠司が辿りついた結論は「女装を楽しみにくる変態男」というものだった。いわゆる「女装子」だ。

男はおそらく部屋に鏡を置き、女物のドレスを多量に持ち込んでいるのだろう。そういえば、そいつの部屋からは香水の甘い匂いがときどき漂い出ている。きつとひとときの間だけ、男としての自分を忘れ去り、衣装やランジェリーを取っ替え引っ替え替えては自分の身を鏡に映したり、化粧をしたりして、思い切り女として振る舞っているのだろう。現実世界では、やりたくてもできない立場を越えるために。そしてその女装気分をより高めるのがきつとあの妙なガムラン音楽のはずだ。

また、週に一度くらい、平日の決まった時間に一組のカップルもやってきた。左隣の104号室に。彼らは往路こそ、そそくさとしているが、かっきり二時間半後に帰る際には、共に頬を紅潮させて、ひどく満足そうな表情を浮かべていた。いったい奴らは何をしにここに来てやるのだろうか？

植え込みに腰を下ろして煙草をつき合ってた。なぜか親近感を覚え、この初老の男とだけは会話を交わすのがいっこうに苦にならなかった。

男は肩を落とし、伏し目勝ちにぼつりぼつりとしばしば同じ話を繰り返して語った。「線香を上げにくるんです、仏壇に。わざわざここまで。家族はだれも関心がないんです。私の父や母の位牌ですが、子供や妻は一度も会ったことがない故人だから、まあ無理はないかもしれん。けどね、あんた。邪険にすることはないです。違いますか？」と。

誠司はそういう話を聞くたびに首を横に振った。男は大きく頷き、目を光らせた。「ほんととは蠟燭だつて使いたい。だけど万が一、火災でも起こしたら大ごとだから、わずかに線香を立てて手を合わせるだけで我慢しています。正直、やり切れない気分です。でもここでしか、先祖様の供養はできません。だからありがたくて、ありがたくて、このトランクルームには真底感謝しますよ。ところで、しょっちゅうお見かけするが、あんたは何をしてるんです？ ここで」

誠司は頭を掻いた。

「自由を謳歌するためかな。あくまで限定的ですが」

「自由。いい言葉ですな」男は何かを想像するように視線を上げたが、すぐに大きく手を振った。「大丈夫、大丈夫。詰まらん詮索はしません。せめてあなただけはぜひ謳歌し

誠司はまたぞろ、あれこれ妄想をふくらませた。あの様子から察するに、もしかしたら、彼らが借りている部屋の中にはベッドがあり、ラブホテル代わりに使っているのかもしれない。奴らの上気した頬の色がそれを確実に物語っている。あの顔色はセックスがもたらす高揚感のはずだ。きつと人目をはばかる不倫カップルなのだろう。

実際に、時折悶え声のような音が洩れ聞こえてきた。誠司は今度もまた壁にコップを当てて隣室の様子を窺った。すると女の絶叫が轟いたり、しなやかな鞭（おそらくそうだろう）が、人の体や床を叩きつけたりする物音が聞こえてきた。もちろん、「何のために俺はここを借りたのか？ 他者の存在から逃れるためじゃなかったのか？ 俺はどうかしている」と幾度も自己嫌悪に陥ったが、真相を知りたいとの願望のほうが常に勝ってしまった。

「奴らはSM愛好家に違いない。たぶん女の肢体に熱い蠟燭を垂らしたり、鞭を打ったり、あるいは緊縛したりして楽しんでるのだ」

熟考の末、誠司はそう確信した。たしかにコンクリートの打ちっ放し仕様の部屋はいかにもSM趣味だ。この大都会・東京には、どうやらそのような人目を避けて生きなければ自らの欲望を叶えられない、ある種孤独な人種が大勢存在しているようだ。かくいう俺もその一人だが。

あの「仏壇男」も頻繁にやってきた。誠司はそのたびに

てください、自由を。ここで、この場所で」

男は頭を深々と下げ、自室へと引き上げていった。

もし、これがわが家だったらどうだろう？ 誠司は男の背を見送り、妻と母親の顔を思い浮かべながら想像してみた。

「同じだな。いや、もつとひどい場面になるに違いない。くわばら、くわばら」

文机の一角を棲み処とするようになった黄金虫の動きはその後とも相変わらず緩慢だった。誠司は「おい、お前。もう死んだのか？」と心配になって声をかけた。けれども相棒はちゃんと生きていた。十全に元気とはいいがたかったけれど、死んではいなかった。誠司が与える果物の蜜を吸



明治文学の草創期に彗星の光芒を放って文芸批評の先駆をなした若き文豪斎藤緑雨。樋口一葉の才能を早くから鋭く見抜き、「私たちが願っているのはあなたの大成です」と率直にぶつけた早世の批評家の軌跡を、群像新人賞受賞文芸評論家ここに蘇らせた。早生の「斎藤緑雨」文芸評論集。

1512円（税込/送料共）
御注文はアジア文化社まで

い、極小の黒い糞を尻から出した。ただ、羽を広げないだけで。

こうやって相棒と過ごし、懐メロを聞いたり、読書に耽つたりする一時は、妻や母親から唯一自由になれる貴重な時間だった。だがご多分に漏れず、メールや電話の追跡からは逃れられなかった。『あの業、突くババアを何とかして!』と妻から姑を叱責するメールがくれば、「最低の嫁、とつとと離婚しなさい!」と母親からも、嫁を罵倒する電話がしばしばかかってきたからだ。

文明の利器は人から自由に自由な時間すら奪う。誠司はそう実感したが、それでもなおスマートフォンで電源を切る勇氣は持てなかった。「なぜ電源を切っているのよ」と二人から妙に勘ぐられるのがオチだと考えたからだ。このトランクルームの存在だけは何が何でも奴らに秘匿しなければならぬ——誠司はあらためて強く自らに誓った。

連日のように続いた猛暑日がようやく治まり、空に絹雲が現れて、秋の気配が目立ち始めたころのことである。誠司は何となく眺めていたテレビのニュースに一瞬にして釘づけになった。あの「仏壇男」の姿が画面に映し出されていたからだ。

アウンサーの話では、男は殺人などの容疑者として警察に逮捕されていた。口論の末に、かっとなって妻を扼殺された。男が借りていた部屋は立ち入り禁止の規制テープで封鎖されていたが、捜査や鑑識活動はすでに終えたようで、建物自体への出入りは制限されていなかった。警官の姿もない。

誠司は男の部屋の前でしばし佇み、無意識のうちに合掌した。妻を殺害した以上、男の行為を認めるわけにはいかなかったが、憐れみの気持ちのほうははるかに勝っていた。

その後も部屋に通い続けたけれど、気分は晴れなかった。自分の部屋がすっかり色褪せて、他人の部屋のように思えてならなかったからだ。

文机の上では、黄金虫が相変わらず、生きているのか、いないのか分からない様子そのまままっくまっくだった。誠司は相棒を掌の上に載せると生け垣にいき、ツツジの葉の上に置いた。相棒は葉っぱの上でも動きを見せなかった。飛び立つ気配すらない。

「おい、お前」と誠司は相棒に向かって、問いかけた。「いつまでも飛び立たないなら、いっそ靴の底で踏んづけてラクにしてやるうか。どうだ?」

相棒は誠司の言葉に抗議するかのようになり、緑色に光る外殻を開き、薄い二枚の羽も広げて大きく身震いした。やっとな飛びのか? いきなり胸が高鳴った。飛べ、と誠司は祈った。

したのだ。そしてその妻の死体をかねてより借りていたトランクルーム内に七日間遺棄し、自首したとのことでもあった。

「七日間」と誠司は思わず言葉を呑んだ。七日間といえば、そのうちの三日は自分もあそこにいた勘定となる。遺棄された死体がすぐ隣にあるとは露知らず。

「どうかしたの? やけに熱心ね。もしかして知ってる人?」と妻が訝しげな視線を投げかけてきた。誠司は慌てて首を振った。「妙な使い方をしたもんだって思っただけさ」とごまかす。妻はそれでも斜め目線で夫を見ながら、シュークリームを頬張った。

四日後、逸る気持ちを抑え、誠司はようやく三鷹に向かった。もつと早く出かけようと思えばできたのだが、警察による現場検証などがあるはずで、そんな場面にこのこと現れ、万が一にも何か疑られたりしたら拙いと考え、時間を空けたのだった。むしろ家族から自らの行動を妄に怪しまれたりするのも不都合だ。

ニュースでは、「口論の末」と報道されていた。もしかしたら男は、あの仏壇の取り扱い方で妻と激しくやり合ったのかもしれない。あるいは先祖への対処の仕方で大喧嘩となつたのかもしれない。いずれにせよ、妻とうまくいっていなかったのはたしかだろう。あれだけ頻繁に愚痴っていたのだから。

飛べ、空に向かって飛翔してくれ——。

けれどもなぜか相棒は羽を折り畳み、外殻を再び閉じてしまった。誠司は崩れるように生け垣に座って煙草を吸った。吸い終わると、黄金虫ではなく、煙草の吸い殻を忌々しげに靴底で踏み潰した。

見上げると、建物の上空を灰色の厚い雲が覆っていた。どこかで雷鳴の音もした。誠司は相棒を掌に載せて腰を上げた。擦れ違いざまに例のオカマがやってきて、腰を振り振り自室に入ってしまった。あの不倫カップルもおっつけやってくるはずだ。彼らははたしてこの建物内で起こった死体遺棄事件のことを知っているのだろうか。

部屋に戻ると、黄金虫をコップの水の上に載せた。相棒は沈むことも、身じろぎすることもなく、ただじっとしていた。遠くのほうで轟いていた雷鳴が一気に近づいてきた。夏はもう終わろうとしている。

「飛べ」と問いかけてみたが、虫はやはりきつく羽を閉じたままだった。急に鼻先がむずむずと疼いた。どこからともなく線香の匂いが漂ってきたからだ。もしかしてあの男は、殺害した妻の遺体を吊うために、長い間線香を焚いていたのかもしれない。あるいは案内心の中では妻を愛していたのかもしれない。いや、まさか、それだけは。

相棒が不憫に思え、水面から救い上げたときだった。スマートフォンがメールの着信を告げる音を立てた。間髪を

入れず、つぎにコール音も鳴り響いたが、鳴るに任せてそのまま放置した。どうせ出たところで、人の用件なんか、おおかたは自己都合そのものだ。こつちにとつては何の役にも立ちやしない。

ちょうどそのとき（誠司はまるで気づいていなかったが）、建物の玄関前に一台の介護タクシーが横づけされた。車からまず降りてきたのは美佐子だった。それから運転手が後方のドアを跳ね上げて車椅子を下ろした。そこに座っていたのは智代だった。

誠司は「生きろ」と黄金虫に向かって言葉投げかけ、スマートフォンを電源を切った。なぜか急に苦笑いが出た。不意に隣の104号室から女の絶叫が聞こえてきた。どうやらSMプレイが始まったようだった。ややあつて、102号室からいつものように怪しげなガムラン音楽が響いてきた。

微かに羽音も聞こえた。振り向くと黄金虫が飛翔し、「0系こだま号」の車体の上にとまるところだった。虫の体が電源スイッチに触れたのか、車両が突如カタカタと動き出し、ループ状の高架橋を勢いよく、くるくるまわりながら一気に滑り降りていった。「ようやく飛んだか」。そう呟いたとき、ドアをだれかがノックする大きな音が響いてきた。「あなた、中にいるのは分かっているのよ。探偵に調べさ

せたからぜんぶお見通し。思いきりとつちめてやる」美佐子だ！と誠司は思わず首をすくめた。「いったいどういう料簡でここを借りたの？何をしてるの、誠ちゃん。こんなところで」

母さんも一緒か……。あいつら、犬猿の仲じゃなかったのか？無意識のうちに後退りしたとき、黄金虫が「0系こだま号」に弾かれてグシャッと潰れ、緑色の体液が辺りに飛び散った。やり切れなくなつて、きつく目を閉じたが、今度は頭の中の暗闇に、おぞましいイメージが浮かび上がった。すっかり灯りの消えた暗いトランクルームの室内に、あの黒光りする仏壇と、男が殺害した妻の遺体が並列して置かれている像だった。厄介払いされた二つの像だった。

不意に部屋の壁が圧縮機のように音もなく迫ってくる気が配がした。妻や母親やSMカップルや変態男が寄つて集つて俺を押し潰そうとしている。アルバイト先は決していきたくて通っている楽しい場所ではない。あの家は決しているたくている快い場所ではない。だったらこの隠れ家はいったいどういう場所なんだ？

誠司の自問自答を打ち消すように、ノックの音がより激しくなった。



室町 眞

むろまち しん

群馬県高崎市生まれ
法政大学文学部・日本文学科卒業
旅行雑誌の編集者、海外旅行企画者、通信制
美術学校のコンサルタントなどを歴任
2010 長塚節文学賞優秀賞
12 銀華文学賞優秀賞
13 銀華文学賞河林満賞
14 長塚節文学賞優秀賞
19 藤本義一文学賞優秀賞 ほか

銀華文学賞優秀賞 受賞の言葉 室町 眞

五十嵐編集長から、選考結果の電話をいただいたとき、賞に絡むのはいいついでだったか？と思わず天井を見上げてしまった。「銀華文学賞」自体が休止していた期間があったとはいえ、ずいぶん久しぶりなのは間違いないかった。

数年前に加齢黄斑変性症を患い、右目の視力が失われて以降は、執筆のペースがかなり落ち込み、その影響もあつてか、気力もやや減退していた。

それでも、昨年は「藤本義一文学賞」で優秀賞を受賞し、自分なりに復調傾向にあるとは感じていた。まさにそんな時節に届いた朗報だっただけに、喜びもひとしおだった（今回もまた「万年二位」の座に甘んじたが……）。

受賞作について一言述べれば、実はもっとユーモアを効かせたブラックコメディにしようと思論んでいたのだが、そこまでの技量もセンスもなく、残念ながら実現できなかった。

「文芸思潮・新人賞」もスタートしたから、若い書き手に敗けないように、我が身に鞭打つ所存です。老兵は死なず、去りもしませんよ。エンジンは多分に旧式で、悪しき排ガスも出しますが、常にフルスロットルだぜ！（たぶん）

選考にあたって、私を推してくださいました審査員の方々や関係者の皆様、本当にありがとうございました。

ラストオーダー

塩崎憲治

一
室田進がステージ4の膵臓がんを宣告されたのは、外資系医療機器メーカー・M社を六十歳の定年で退職してから七年が経っていた。行く末が断たれると、人の想いは過去に向かうのだと知った。

毎年、真面目に受診していた人間ドックの間診で、背中
の鈍痛を訴えたところ、念のためにと受けた超音波検査で膵臓に異常が見つかった。すぐに血液検査と造影剤を用いたCT検査が行なわれた。

「検査結果の説明は、できればご家族とご一緒に——」
翌週、進は妻の良子と待合室の長椅子で待った。思えば

青ざめる妻と、逃げるように外に出る。駐車場わきの木立に木漏れ日が影を落とし、草木が生命の輝きを競い始めていた。だが進には、全ての光景が、今は淡い墨絵のように流れていく。

帰りの電車は空いていた。まばらな客のねっとりとした視線に、心の中が見透かされるようで怖かった。

車両の端に、妻と並んでかけた。車窓を流れて行くビル
の谷間を見ていると、進は急に腹の底から可笑しくなってきた。

客の何人かが、進の含み笑いに、何か恐ろしいものを見るように顔を向けた。だが、あれほど周りの目を気にしながら生きてきたことが嘘のように、進は、腹の底から湧き上がる笑いを止めようとせず、心のよどみを吐き出し続けた。

妻が、押し殺した声で何かを叫ぶと、進の体を包み込むように覆いかぶさってきた。進はくもる笑いの中で、自分だけが無傷で迎えた定年退職の日を思い出していた。

栄光の階段を踏み外した者、心を病み生きた屍となった者、喰い込むロープの軋みを耳元で聴いた者、自分にして
も、重篤な肺炎を隠し通した多忙の日々。人間ハードルの障害物レースで、奇跡的にゴールにたどり着いたのは自分一人だけだった。

現役時代は、無理難題に歯を食いしばる毎日だった。骨身に地雷が一つや二つ埋め込まれたとしても不思議はない。覚悟は決めていた。けれども一方では、これまでも切り抜けてきた幸運という奇跡を信じていた。わきにいる妻も、おそらく同じ心境に違いない。

「転移性膵臓がんです。他の臓器とリンパ節への転移が認められます。残念ながら手術は不可能です」

息を呑む妻の鼓動が伝わってきた。火を見るよりも明らか
な医者への引導は、進の脳裏に映るものの全てから、ゆっくりと色彩を奪っていった。医者が続けた。

「余命はあくまでも目安です。前向きに頑張ってみましょう」

堪えても、堪えても出てくる血の滲むような笑いは、進に憑依して嘲笑う彼らの怨念のようにも思えた。

温かい雪が進の髪を濡らし始めた。妻が、まるで幼い子
共の傷を癒すように泣いている。進の笑いもやがて、底の見えない悲しみへと変わっていった。

社会を震撼させる事件が起きたのはそんな時だった。秋
葉原で、多くの人が凶器の犠牲となった。事件の背景には、犯人と親との確執があり、一歩間違えれば、我が身にも無縁のものではなかった。この事件は進に、死を率直に受け容れる覚悟をもたらした。

今から二十二年前、息子が大学に入ったころのことだ。
荒れ出した息子の部屋に足を踏み入れ、進は言葉を失った。床が一面黒く染まっている。気が狂ったように抜いたのか、今にも動き出しそうな髪の毛が、痛々しく重なり合っている。その一本一本が、息子の心の叫びと気がついた時は遅かった。息子は大学を中退し、手の届かない世界に行ってしまった。妻に残された無数の痣は、紛れもない自分への爪痕だった。

その息子も、自分の居場所を求めた放浪の果てに、今は
マニラのスラム街で、それなりの所帯を持っている。異国の女性と心を分かち合い、ささやかな糧に喜びを見出す生き方に、今は心から幸せを祈っている。

妻は、最初は容態を心配していたが、一人残される不安にとらわれ、突然沈み込むことが多くなった。このままだとすぐに後を追うか、あるいは自分より先に逝ってしまうのではないかと、むしろそちらのほうが心配な日々が続いた。

進は以前、明日死ぬとわかったら何がしたいかをテーマにしたバラエティ番組を見たことがある。本当に人生の幕が閉じられようとした時は、やり残したこととか、何かしてみたいということは、何も浮んでこないことがわかった。

それは人間の行動はすべて、その後につながる希望が前提になっているからかもしれない。食べるものも、あれほど好きだったカツ丼や天井にさえ何も興味が湧かなくなった。これも、明日も元気に働こうという希望があつてこそ好物だったのだろう。

日に日に骨の形が露になるのとは裏腹に、記憶が薄れていく毎日を刻んでいる時、やっと自分を取り戻したように見える妻が、様々な雑誌を買ってきてくれた。

その中には、進が若いころ汗を流した剣道の雑誌や、趣味を越えて夢中になった溪流釣りの本もあった。

現役のところは、あれほど胸をわくわくさせながらページをめくった武道や釣りの世界も、体力の温存だけが日々の課題となった今は、遠い記憶の世界となった。

た。その後につづく希望など何もないはずなのに……。

二

思えば現役のころは、出張で国内、海外と飛び回っていたのだが、妻とは海外どころか、国内の旅行もままならない毎日だった。そんな進もたった一度、妻の誘いに乗って旅支度に心を躍らせたことがある。それは十七年ほど前、進が部長に昇進した時だった。

進はいつのころからか、部長昇格という悲願に取り憑かれていた。それは、権力や報酬という仕事の成果ではなく、「哀れな万年課長が偉そうなことを言うな！」と言って出て行った息子が、少しは見直してくれるのではないかと、うぐい夢だった。

だが達成の裏には、想像を超える難問が待ち受けていた。会議が倍に増え、部門を背負うという重圧が押し掛かかってきた。夢にまで現われる人間の葛藤、土石流のように押し寄せる業務の山。自分のあるべき姿に背いた、当然の報いだった。

そんな進の内心を察してか、妻が綺麗な旅行パンフレットを片手に話しかけてきた。

「部長昇進おめでとう！ これまでお疲れさま。ここらで一息つくのはどうかしら。前から一緒に行きたいと思っ

ふと、一冊の雑誌が目にとまった。紅葉の里山と田園風景が広がる「田舎暮らし」という表紙が、何の希望もないはずの進の胸に、仄かに血が騒ぐ感動をもたらした。

進は、これまで置き忘れてきたその風景を、もう一度この目で見たいと思った。歴史遺産でもなければ景勝地でもない、人間の繁栄や活動とは無縁な、心の故郷のような情景が今の自分を救ってくれるような気がした。進は、そのことを妻に話してみた。

「良子、もう一度どこか田舎の風景を見てみたいんだけどね……」

進の目がいつになく輝いていたのか、妻は驚きながら同意した。

「そう、それはいいわね。山の温泉場に泊まりながら、一週間ほど旅行してみましようか。明日、病院に行つた時に先生に聞いてみましょう」

お風呂は家族風呂で、ハンドルは握らないという条件で医者への許可が下りた。妻は早速、思い出の場所もアレンジしたという、信州の田舎巡りの旅行コースを予約してくれた。

進はベッドの中で、妻が手書きで作った日程表を見ながら、取り寄せた旅館のパンフレットを眺めた。最終日が、懐かしいあの上高地だった。少年のころ、胸を膨らませて眠りについた就学旅行の前夜を思い出した。不思議だった。

いたところがあるの。どう？ ここ、あなたの好きな溪流もあるわよ」

妻が開いたパンフレットを覗くと、きらきらと光る梓川に架かる河童橋の向こうに、上高地の雄大な山々を望む風景が目飛び込んできた。進の心が動いた。

実際に見る上高地の美しさは写真をはるかに超え、この世のものとは思えない、溪流と山岳が織り成す崇高な芸術だった。

二人は、新緑の山々を背に、梓川の岸边に建つログハウス調のホテルに投宿した。

「あら！ 綺麗なハーブ園ね」

妻は、ホテルの周辺に広がる柔らかな緑に感動していた。屋内は、素朴なインテリアと自然な風合いに包まれている。見るものすべてが、進が日々脂汗を滲ませるオフィスとはまるで違う。徐々に、全身に絡みついた緊張がほぐれていった。

食堂には、南に面した広い出窓に趣味のいい白焼きのテラコッタが並び、様々なハーブの緑が日差しに輝いていた。

妻は少女のころに帰ったようにはしゃぎ、その一つ一つに顔を近づけ香りに浸っていた。

夕食は、ほどよい大きさのフィレステーキがメインに運ばれ、地元のものと思われる新鮮な野菜が添えられている。デザートは、この地の名物であるらしいアップルパイ

が出され、香り立つコーヒーを妻と一緒に味わった。

「あなた、よかったわね、ここにきて」

「ああ、すっかりフレッシュできた。また帰ったら頑張らなくっちゃな」

「そうね、でもあまり無理しないでね。明日は白馬の景色を見ながら帰りましょう」

二人は、笑顔を交わし立ち上がった。

入り口に向かおうとした時だった。丁寧にお辞儀をするカウンターのマスターと目が合った。仕事以外では、親しく人と目を合わせる事がなくなった自分を恥じた。同じような世代に見えるが、その柔らかな表情と透明感の漂う目には、明らかに自分の知らない世界が映っていた。進はなぜか素朴な親しみを覚え、目礼をしてから、ドアに向かった。

帰りの車内、妻は満足そうに白馬のなだらかな風景を眺めている。自分も、随分遠くへ来たものだと、あの時の決断を思い出した。

三

進は四十歳の時、東京・立川市の地元企業で築き上げたキャリアを捨て、郊外の工業団地に進出してきた外資系企業の工場に転職した。同じ総務課長のポストだった。高卒

進のコミュニケーション力が功を奏し、十年後には総務部長に抜擢された。

世界の頂点を目指す多国籍企業は、その内部もまたトップを目指す人間がしのぎを削る。総務部門は、組織のあらゆる漂流物の終着地点だ。清濁併せ飲む度量が必要とされる。進は組織の最高ではなく、最強を目指した。

争うように蛭が這い上がってくるヘドロの中に、ずぶずぶと腕を沈め、二十ドル札を手探りするような毎日が続いた。

一方ではこの環境が、後戻りを許さないほどの魔力を持つていたことも確かだった。ある日、妻と買い物をしていたショッピングセンターでのことだ。凶らずも仮面が剥がされる事態に遭遇した。

「あら、室田さん、こんにちは！」

数人の女子社員が、手の平を小刻みに振りながら通り過ぎて行く。特に珍しいことではない。だが、妻の驚きは尋常ではなかった。

「あなた、会社の顔はまるで違うのね——信じられない」
進は言葉を失った。確かに自分は、武道に身を置き、硬派で通してきた。妻もそういう自分に好感を持ったのだろう。

進は仮面を得ることにより、報酬だけではなく、演劇舞台を自由自在に飛び回ることができるようになっていた。

の英語力がどこまで通じるかが不安だったが、息子を大学に行かせてやりたいという一心の、一か八かの賭けだった。

六ヶ月のアメリカ親会社での研修は夢のように過ぎた。家族を大切にし、義理人情を重んずる文化は、逆にこの国で脈打っていた。

だが日本のオフィスに戻り、途方も無い虚無感に襲われる。

トップが海の向こうの傀儡経営組織は、管理者集団の顔もまた見えない。大きな楕円型テーブルを囲むマネジメントチームは、まるで能面の品評会のような。成熟したアメリカの文化と、泥臭い日本の風土の狭間に落ちる、特殊な世界だった。

だが、古巣に帰ることもできず、進はこれまでの生き方を大きく変えようと決心した。

地場産業でも報酬としてのお金は重要な役割を持つが、それだけで人は動かなかった。けれどもこの組織は、お金が行動原理のすべてであり、それ以外のものは飾りに過ぎなかった。撒き餌のようにばらまく報酬やポストに、全国から外資系流れ者と囁かれる兵士たちが群がってきた。もちろん自分もその一人には違いない。

英語劇の舞台裏で、進にもいつの間にか仮面が貼りついた。だが意外にも、地場企業での泥臭い経験が役に立った。総務部門の仕事は他部門間の調整と社員の活性化にある。

そんな時、ヘッドハンターの紹介で、黒沼が購買部長として入社してきた。後にこの人間が、想像もできない壁となって立ち塞がる時は、その時は思いもしなかった。

進は、ねっとりとした舞台化粧を削ぎ落とし、素の自分に戻れる渓流釣りを愛した。渓谷の遡上は時として命がけとなるが、大自然には善意もなければ悪意もなかった。

進は、いつもの釣り場としている、大菩薩嶺を望む多摩川の源流小菅川を目指した。

渓流釣りは、毒蛇や熊の生息地帯に深く分け入り、源流に棲むヤマメや岩魚を追う。激流を渡り、岩を越え、ひたすら遡上しながら竿を振る。自らが渓谷に生きる獣と化せば、足元に這う蛇は逃げることもなく、目の前のカモシカは水浴びを始める。夏でも手が痺れるように冷たい源流は、魂を浄化すると同時に、死と背中合わせの世界でもある。青梅に出て、国道四百十一号線に入り小菅川を目指す。コバルトブルーに光る奥多摩湖を左に見ながら、山梨県境を越えると大菩薩嶺へと連なる深い山々が見えてくる。

進は、釣果の予感に胸を躍らせ、渓谷の鬱蒼と茂る木々の斜面に足を踏み入れた。木漏れ日が落ちる原生林を、草木を掻き分けながら降りていく。鎧を脱ぎ、獣たちの棲息する領域に踏み込む時、無機質な世界で削がれた野生が、沸々と蘇る。

深い樹林を抜けると急に視界が開け、勢いよく水が走る

音が聞こえてきた。溪谷の透명한日差しが、岩間で跳ねる真つ白い水しぶきに反射していた。

進は毛ばり釣りを得意とする。川面を虫が飛び交う季節は水中から岩魚がそれを狙っている。最初に一番大きなのが飛びついてくるのは、人間の世界と同じかもしれない。餌釣りは当たりに合わせるが、毛ばりは当たりに反応した時では遅い。岩魚が疑似餌を見分け吐き出す時間はコマ二秒、意識を超えるタイミング。正に毛ばり釣りは、無の境地への挑戦だ。

ある時から、進の心を支配し始めたのは、幻と言われる巨大な岩魚との遭遇だ。伝説とは言え、代々伝わる山奥の湯宿には、瀬頭で沢蟹獲りに夢中の子熊が、背後から近づいた巨大な岩魚に滝壺に引きずり込まれていくのを見たという話が残っている。

大きな魚を釣り上げたいのではない。いかなる釣り師も手に掛けることができない溪谷の主を、この目で見たかった。

豹が獲物を狙う時のように、岩の陰をつたい、流れに近づいた。切り立った崖を左に曲がると、砕け散る水の音とともに高さ二十メートルほどの滝が見えてきた。見上げる滝口は眼下に迫る水量を湛え、その流れは一直線に滝壺へと落下している。滝壺は相当深いらしく、白い泡立ちの周りは暗く淀み、深淵の凄みを見せていた。

その日は、進が追い求める本当の川の主は、姿を現さなかった。

職場のパワーバランスは、劇的に変わった。惨めな鼓動を押し殺し、取締役工場長室の鉛のようなドアを開ける。革張りの椅子、黒沼がメガネの奥から、動きのない冷酷な目で進を見据えている。進はまるで、蛇に睨まれた蛙のように、針のむしろを進む。

「シニアキャリアプランなど、糞食らえだ！」

飛び散る唾が、頬を伝う。

「予算会議は通っております。どうか、サインだけでも——」

進は、自らを下僕に貶めた従順な眼差しで、腰を直角に曲げる。

「こんなものにサインできるかよ！ もう一度書き直せ！」
 労苦の重みが、紙飛行機のようにひらひらと舞っている。進は亀のように床を這い、それを追う。いつものパターンだ。

黒沼の、両の眼を親指でじわじわと押し潰すようなじめは、進の精神に確実にダメージを与えていった。

進は、黒沼がなぜこれほど酷い仕打ちをし続けるのか、確かなことはわからなかった。

購買部長として入社してきた黒沼は、偶然にも同じ歳

すばやく竿を取り出し、毛ばりが結ばれたテーパーラインを穂先に取りつける。

滝壺の底から湧き上がる水流が、対岸の岩の連なりで作る、深い渦を凝視した。その渦を中心に、川面の白い泡もゆっくりと回転している。

進はその泡を狙い、アンダーハンドで毛ばりを打った。毛ばりは水面と垂れ下がる木の葉のわずかな空間を走り、まるで生きた羽虫のように舞いながら、泡の中心に着水した。

と、数秒の間があったか、それまでは気配さえ見えなかった水面下で、ゆらりと反転した大きな魚体が、残像を残し毛ばりに向かった。反射的に竿を合わせる。ガツンという重い衝撃が走り、竿が弓なりになった。一瞬全貌を見せた魚影は本能的に滝壺へと向かう。弓なりの竿が左右にきしむ。手首に野生の咆哮が伝わってくる。格闘の末に手にしたのは尺を超える岩魚だった。

釣果には必ず、しめるといふ行為が伴う。進は左手で暴れる魚体を押さえつけ、傍らの石で頭部を狙った。血に染まった岩魚はぶるぶると痙攣し、やがて動かなくなった。

釣りは残酷な一面を持つが、進はその全てを食べることによって、殺生の罪を贖ってきた。一方では、自らが手を汚し、生命の鼓動を直に聴くことができる釣りは、進にとつて、人間を人間たらしめる最後の手段だったのかもしれない。

だった。

「室田さん、僕はこの会社で工場長を目指しますので——」

入社その日に行われた歓迎会の席で、かたわらに寄ってきた黒沼が、独酌で杯を傾けながら口を開いた。

部長がトップを目指すのは当たり前だ。だが、入社早々あからさまに宣言する人はいない。もし現実に工場長戦というレースがあるとしたら、このとき既に勝敗がついていたのだと、後になってから思った。というよりも、工場全域に目を配ろうと奔走する進には、組織を垂直に駆け上げらるうとする思考は、頭の片隅にもなかった。

その後、二人の進路は大きく開いていく。進は、工場規模の拡大に合わせ、現場の安全管理と社員の福利厚生システムの整備に全力を尽くした。一方黒沼は、購買部長の椅子が温まる間もなく、いくつかの核となる部門を乗り換え、その後、自ら希望を出し、アメリカカ本社に移籍した。医療機器に関する親会社のライセンスと、自社開発製品の間に生まれる軋轢の解消に一役買い、帰国した。黒沼には元々日本のトップを目指す戦略があったのだ。

工場内では圧倒的な調整力を持つ進に比べ、黒沼は権力を確立したが、人望を得ることはなかったようだ。徐々に黒沼の進に対する態度は、獣が獲物を追う目が変わっていった。

初代工場長の退任が迫り、次期工場長の人選が始まっ

た。東京本社の古い役員の中には、候補として進を押す流れもあったが、アメリカ本社勤務経験を持つ黒沼が予想どおり工場長に就任した。

進は、全く悔しさを感じなかったといえれば嘘になるが、最初から自分が目指したものではないと自らを納得させた。

だが、それだけではすまなかった。社員の人事権は総務が持つが、総務部長の進退は工場長が握る。トップの補佐役という名の奴隷となった進は、全てのプライドを切り捨て、あらゆる屈辱に堪えながら、上司となった黒沼に仕えた。

そんな黒沼が意外な一面を見せたことがある。

建設がらみの話は、クラブで行われることもある。ウエイターが床に片膝をつき、うやうやしくおしほりを差し出してくる。さりげなく、それを黒沼の方に促す。

艶やかな夜の世界も、隙を見せられない仕事の延長だ。

「室田さんは溪流釣りが好きなそうで——」

地元ゼネコンの社長が、進に水を向けた。

「実は僕も好きなんだよ——」

黒沼が、進の返答を遮るように割り込んできた。それにして初めて聞く話だ。人間関係好転の千載一遇のチャンスと思つた。

「黒沼さん、今度、絶好のポイントにお連れしますよ——」

「ああ、私もぜひ」

今度は、ゼネコン社長が割り込んだ。

造作に盃を逆さまにした。進は、残りの一滴を振り落とす黒沼の手を視界の端にとらえながら、静かに、引き下がった。

「あなた、どうしたの！」

妻が、深夜に進の異様な呻き声で目を覚ましたらしく、心配そうに覗き込んでいる。

「ああ、だいじょうぶだ……」

進は、未だ春先の寒い季節だというのに、全身汗まみれになった身体を起こし、妻にだけは話せない悪夢を思い出していた。

不眠が続いている。このままでは危ない。このところしょっちゅう見る悪夢、原因はわかっていた。

「眠れそうにもない。リビングのソファで少し休んでみるよ」

進は重くなった下着を着替え、よろよろと階段を降りていった。リビングに通じるホールの時計は三時を指していた。

ソファでまどろんでいると、またあのおぞましい光景が現れた。邪悪な生き物が足元から這い上がり、次から次へと襲いかかってくる。必死に闘おうとするが、手足が思うように動かない。内臓がずるずると引き千切られていく。ハッとして目を開ける。恐る恐る、びっしょりと濡れたシャツをめくり上げる。腹一面が蜂の巣になっている。と

「いいよ、僕は行こうとは思っていない」

なぜか黒沼の表情に、不快感が走った。

「工場長、たまにはいいでしょう。温泉宿はこちらで手配します」

工場増設を控え、ゼネコン社長の思惑が見え隠れする。「だから行かないって言ってるだろ！ 僕は蛇が嫌いなんだよ」

黒沼が、珍しく取り乱し、声を荒げた。

進は、まずかったと気づき、すぐに話題を変えた。後にも先にも、黒沼が人間らしい一面を曝した瞬間だった。

その後も、黒沼のいじめはエスカレートしていった。

ある年の新年会でのこと。進は畳に膝を擦りつけながら、黒沼が余裕のある笑みを浮かべている上座に近づいていった。

「黒沼さん、今年もよろしくお願いします」

進は、うやうやしく黒沼に徳利を傾けた。顔には飼いだの服従を張りつけながら。

「この前のスコアはさんざんだったよ」

黒沼は取り巻きとの談笑を継続したまま、杯だけを突き出してきた。進は、恭順の笑顔を絶やすことなく盃を満たす。

その時、数人の女子社員が華やかな服装でお酌に現れた。

進を見向きもしなかった黒沼が、彼女らに視線を移し、無

ころどころの穴からはソファの生地が覗いている。これは夢ではない！ だが、不思議なことに、血は一滴も流れていない。夢と現実が極限の中で交差する。身体の熱とは裏腹に、噴出す汗は冷たい。凍るような戦慄が襲ってくる。呼吸が苦しい。鼓動が緩慢になってきた。徐々に、自分が崩壊していく姿を俯瞰し始めた時だった。温かな感触に包まれた。気がつくくと、妻の手が肩にあった。獣の断末魔のような声が聞こえたという。

「大丈夫？ 会社、辞めたっていいのよ——」

「ああ、大丈夫だ。ちよつと疲れただけだ……」

ありがたい言葉だった。妻はすべてを知っているのかもしれない。



タイのすべてがここに
特価 2000 円 (税込/送料共)
注文はアジア文化社まで

すでに家族のための闘いは終わっている。ではなぜ闘い続けるのか。人生は後戻りができない、というのもある意味真実だろう。だが極限を超えると、闘いは自分の中に萌芽し、敵は己となる。闘って、闘って、死んでいけるならば本望だと思った。十分に功成し遂げたボクサーが、死闘に終止符を打たないこともある。それは、そこに追い込まれた者だけが嵌まり込む、悪魔の迷路かもしれない。

進は、心だけでも原点に帰ることができる渓流釣りにのめり込んだ。幻の大岩魚は、進の中で、益々大きな存在となっていた。

渓谷は、至る所に蛇が生息している。進はそれほど気にならなかったが、黒沼が取り乱したのも分かるような気がする。それでも、毒蛇の脅威は、最後までつきまとった。

大菩薩峠の山々が、人の侵入を拒むようにそびえている。稜線から湧き出した霧が、まるで滝のように、山肌をゆつくりと落ちていく。足元を覗き見ると、渓谷の底には龍の背のような川の筋が、岩間を縫うように蛇行している。秘湯へと向う小径のわきから、渓谷の底へと下りていった。山人が踏みつけた細い道が、鬱蒼とした樹林の斜面に延びている。昼なお暗い原生林を、木漏れ日を頼りに、足を進める。

葦の茂みを抜けると、岩間を走る水のきらめきが飛び込んできた。

かったように、岩魚をわきの大きなアイスボックスに放り込んだ。老人はこちらを振り向きもせず、瓶からイクラを手の平に取り出すと、器用な手つきで川面にばら撒き、その一粒を針に通した。

再び老人はウキを見つめる。待っていたかのようにウキが沈む。老人が竿を合わせる。岩魚は面白いように釣れてきた。鼓動はなおも速くなる。イクラの釣果は誰しもが認めるが、入れ食いのように釣れることが不思議だった。

進はしゃがみ込み、老人と同じ目線で川面に目をやった。水面下に見えてきたのは、驚くべき光景だった。たくさん赤い粒が水中を舞い、針を呑んだ一粒のイクラを見極めることはできない。その中で、数え切れないほどの魚影が狂ったように、紅い誘惑をむさぼり合っている。進は唾然となった。どこかで見た光景だ。

その時、一瞬息を呑む。まるで川の底が動くような大きな影が現れた。仲間が落ちていく蟻地獄を一瞥するようになり、上流へと消えていった。あれは、もしかして――。

家に帰り、妻に浮き釣りの老人の話をした。

「あなたも還暦を過ぎたら、その釣り方にしてね。約束よ」職場の山岳クラブに所属していた妻は、渓谷の危険性を、身をもって知っているのだろう。

落ち込みの下流から巻き返しにラインを流していた時だった。目の前の信じられないような光景に凍りついた。うねる尻尾、揺らめく波紋、その中心から不気味な模様の蛇が鎌首をもたげている。冷たく光る目が進を射抜く。人間に向う蛇はマムシに違いなかった。目線を外さず、川底の石を一步一步後退した。川岸にたどり着いた時は、全ての精気が吸い取られていた。

だが進は、ひるまなかつた。この川のどこかに、あの毒蛇をもひと呑みにする大岩魚が、必ず棲んでいる。

魚止めの大滝があるという岩場の急流はあきらめ、毛ばりを打ちながら、下流へと向った。開放的な平瀬に魚影は薄く、当たりは嘘のようになかった。間もなく、砂防ダムので堰堤にせき止められた満々とした川面の広がりが見えてきた。

岸辺に老人が一人、ゆつたりと折りたたみ椅子に座っている。緊張感のない竿から釣り糸が垂れ、ただウキを眺めている。時おり老人は手を振りかぶり、川面に何かをばら撒く仕草を見せた。釣堀の鯉釣りと間違っているのだろうか。苦笑しながら近づいていった時だった。進の足が止まった。座ったままの老人が握る竿が弓なりになっている。老人は慌てるでもなく、水中を右往左往する黒い影を足元に引き寄せた。タモ網に掬い取られた魚は、二十センチを超える岩魚だった。なぜか鼓動が速くなる。老人は何事もなかった。

定年まで残すところ一年となったある月曜日のことだった。突然、品川本社から社長がやってきて、緊急会議が開かれた。なぜか黒沼の姿だけが見えない。

「皆様に必要なお話があります。黒沼さんが緊急手術のため入院しました。当面は各部門長による集団管理体制で運営してください」

詳細は家族の希望で伏せられ、会議はわずか五分で終了した。

その後、新たな体制の中で、黒沼は忘れられた存在となった。車椅子姿を見たという噂もあったが、進が定年退職するまで、確かな消息は伝わってこなかった。

自説を曲げない黒沼は、役員会では一人浮いた存在だったらしい。そのストレスが病を誘発したとも考えられる。蛇が怖いと、弱点を曝け出した黒沼。たった一人黒沼だけが仮面をつけていなかったとしたら、彼だけが進の本性を見抜いていたのかもしれない。意外なことに、黒沼の失脚は、進に一ミリの安堵ももたらさなかった。仮面で切り抜けてきた自分とは違い、実は黒沼が最もピュアな人間だったのかもしれない、ふと思った。

定年後に訪れるという第二の人生は、幻想に過ぎなかった。

ポランティアの日々はささやかな安らぎをもたらしたが、隙間風が吹き込む心の空洞を埋めることはできなかった。

進はふと、忘れていた釣りを思い出した。

白髪も増え、同輩の釣り人が激流に呑み込まれる事故が相次いでいた。あの安全な釣り方であればと、妻も賛成してくれ、懐かしい大菩薩嶺に出かけることにした。

納戸の隅で埃をかぶった釣り竿を磨き上げ、釣具屋で釣堀用のウキとイクラの瓶詰めを求めた。

記憶にある渓谷を、わきの木立につかまりながら一歩一歩下っていく。想像以上に脚力が衰え、あの時と同じ斜面とは思えないほどの苛酷な闘いとなった。

背中汗が冷え始めたころ、見覚えのある砂防ダムにたどり着いた。記憶の場所は相変わらず深く淀み、誰も見たことのない異界への入り口を彷彿とさせた。

堰堤にせき止められた広々とした湖面に差し込む陽光も、鬱蒼と茂る木々のざわめきもあの日と同じだった。変わったのは釣り人が落す影だけなのだと思った。

進は岸辺で、妻が買ってくれたアルミ製の折りたたみ椅子に座る。確かに、闘いが終わった兵士には、この釣り方が相応しいようだ。

初めて試すウキ釣りの仕掛けを取り出す。瓶のイクラの半分ほどを、目の前の淀みに放った。川面に一瞬、朱の大輪が広がり、光が届かない世界にゆっくりと落ちていく。

進はその中心に、針を呑んだイクラをきこちなく放った。ウキが作る波紋が、傾きかけた太陽の光に輝いている。進はやっと、闘いは終わったのだという解放感に浸った。

突然、穂先から魚信が伝わり、現実を引き戻された。ウキが水中を走り始めた。岩魚がかかったのだ。その時だった。

水底から、ざわりとする気配が漂ってきた。川底を透かして見る。狂喜乱舞する夥しい数の魚影が目飛び込んできた。わずかな報酬の多寡に我を忘れた日々が蘇る。封印したはずの忌まわしい記憶が、泥水をかぶるがごとく襲いかかってきた。

進は立ち上がった。釣れた岩魚を放流し、イクラも、すべてを川面にぶちまけた。

進は竿と毛ばりのラインだけをリュックに詰め、何かに急かされるように、魚止めの滝を目指した。渓谷が深くなるにつれ流れは速く、切り立った岩盤が行く手を阻む。装備が甘いのは承知の上だ。

斜面に突き出た大きな岩に片足をかけた時だった。岩がゆっくりと沈み始めた。その下は激流だ。若いころにはあり得ないミスだった。進は渾身の力で岩を蹴った。岩は崩れ落ちたが、寸前のところで斜面の蔓を握った。

向こう脛から生温かいものが滲んできた。裂けた手の平から血が滴る。だがあの時の、挟られても血の出ない傷よ

流れが体温を奪っていく。

ふと、川面を二匹のホタルが近づいてくる。あの揺らめきは、血の臭いを嗅ぎつけたいつかのママシか。進の目をとらえ、語りかけてくる。「お前が求める川の主ななどはどこにもいない。この世はみな撒き餌に群がり、運がいい者だけが太っていく。お前もそれを食った一人だ。大人しく餌を撒く側に回れば、こんな死の淵をさまようことはなかった。周りを見る。行き場のない怨霊たちが、お前が魚腹に葬られるのを待っている」進は瞳を凝らした。波間に見え隠れする見覚えのある顔が、空洞のような目で見つめている。ふと目を落とす。川面に揺れる能面のような顔。

これが己の本性なのか。「違う！俺は魂までは売っていない」進は叫ぶ。「お前の汚れ切った魂など、今さら誰が喰らうか」揺らめきがあざけりの牙をむく。「それは承知だ。報いを受ける覚悟はできている」「権力の道化師が偉そうなことを言うじゃないか」揺らめきが距離を縮める。

「俺はもうあの時の俺ではない。川は俺の世界。立場は五分と五分。お前こそ、丸腰で闘う勇氣はあるのか」——いつの間にか、揺らめきは消えていた。

進は、胸まで押し寄せる流れに向った。いよいよ意識が朦朧としてきた時だった。肩に、華奢な手の感触を覚えた。振り向くと、背後の渦に、つるりとした頭部が笑っている。夢中で手を差し伸べる。流水が、何かを語りながら遠ざかっ

りは遥かにまじだった。いや、戦場に送り出す妻のほうが、辛かったのかもしれない。進はとり憑かれたように遡上する。

渓谷の落日は早い。岩を登る力は尽きた。背丈を超える藪をかき分け、毒蛇が潜む岩陰を迂回する。蜘蛛の巣が顔にかかり、何かが首筋を下りていく。脳裏に浮かんだ妻の顔が、もう止めてと叫んでいる。

幻の大岩魚を追いかけてながら仕事は終わった。だが進は、燃え尽きない何かを抱えてきた。進の中で、本当の闘いはまだ終わっていない。仕事は虚構のままでも、せめてそれを支えた幻の大岩魚の存在を証明しない限り、自分の人生は虚構を嘘で塗り固めたようなものだ。

あの幻の正体は何だったのか、今はおぼろげながらわかる。仮面に隠れた自分が、本当はどれだけのものだったのか、どうしても知る必要があった。それは最強の岩魚と言われる主を、この目で確かめるしかない。

必ずいる、溪流の主は必ずいるはずだ。撒き餌に目が眩む愚かな岩魚ではなく、あらゆる修羅場を潜り抜けた本物の主が。その主を見届けた時に初めて、自分の闘いが終わるのだと思った。

辺りはすっかり暗くなった。頼りは川面に浮ぶ月明かり。ずぶ濡れの足は鉛のように重い。時おり岩魚が羽虫を捕らえる水音が響く。川の瀬は徐々に深くなり、腰まで浸かる

ていく。「さあ、証明してみろよ。あんたが何者だったのかをさ」思わず叫んだ息子の名前が、流れにかき消されていった。

精魂も尽きて、睡魔が襲い始めた時だった。闇を突き破るような滝の音が聞こえてきた。滝口は天に届き、岩に囲まれた滝壺に月光が落ちていく。主も、闇を支配する月の光りを疑うことはない。必ず姿を見せる。進は千載一遇の瀬頭に立った。喰らいついた瞬間、狩りの立場は逆転する。それでもいい、あの虚構の日々に別れを告げることができるのであれば……。

進は渾身の力を振り絞り、流石を狙い、毛ばりを打った。ラインが月光を反射し、風のように伸びていく。微かに、着水する毛ばりが見えた。その時だった。

闇に沈む漆黒の淵が盛り上がった。不気味な陰影が弧を描くように走り、一直線に毛ばりに向った。進は、残された最後の力で、川底の足場を固めた。一瞬の勝負。穂先が見る見る水中に引き込まれていく。想像を絶する力だ。川水をしたたか飲み、あわや滝壺に吸い込まれようとする寸前、主は、消えた。

ずぶ濡れで帰ってきた進を見た妻が懇願した。

「もう釣りは止めて。あなたは十分頑張った。そのおかげで、今でも世界の子供たちの命が救われている」

ていたのだろうか。今、死期を前にして、初めて思い至るとすれば、あまりにも悲しい。

妻に旅のすべてを任せて旅に出た。

稲刈りが終わったのどかな田園風景は、確かに進の心を和ませるに十分な温もりを持って迎えてくれた。

だが、昔は心を躍らせて眺めた川の流れや、それぞれの生活が粛々と営まれていくに違いない茅葺屋根の連なりも、見れば見るほど自分にはその後につながる希望がないということ鮮明にさせるだけだった。それは覚悟の上だったとはいえず、見納めという言葉がどれほど残酷なものかを感じ知らされた。ただ、葉のせいか、痛みが和らいでいることだけが、救いとなった。

妻もそんな進の心を察してか、いつもは率直に驚きや感動の言葉を発するのだが、穏やかな顔の中にも言葉は少なかった。

紫色に霞む稜線がわずかに朱に染まり、梓川の川面がきらりと輝くころ、二人は最後のホテルに着いた。

ログハウス調のホテルは、全体の彩りは時の移ろいを曝していたが、かえって温もりを増したように見える。

「あら、ハーブが以前より増えているみたい、良かった！」
妻がハーブ園の変わらぬ姿に感動し、やっと元気な声を上げた。

ロビーに入ると、コーナーにハーブの鉢植えが置かれて

熱いものが込み上げてきた。世界に最高品質の医療機器を届けるという使命。それが内部の熾烈な競争を生み出すという宿命。忘れてきた大切なことを、妻が初めて気づかせてくれた。

川面を境とした虚構と真実の世界。本当の主の姿はついに見ることができなかった。それで十分だと、自分を納得させた。

川の主のことは、夢の中の記憶となった。

五

「あなた、その最終日のホテル、覚えてる？ もう一度一緒に行きたくて予約したのよ」

進は妻の声に急速に現実に戻された。再びパンフレットに焦点を合わせる。見覚えのあるホテルだった。

「覚えてるよ。確か部長になった時、おまえがお祝いだと言って、一緒に行ったところだね……」

そこまで言って進は、初めて当時の妻の心境に触れたような気がした。長いサラリーマン生活の中で、たった一つの妻との思い出。

男の戦場という舞台の裏で、妻は何を考え生きていたのだろうか。闘いの痛みを隠れ、自分から妻に優しい言葉かけた記憶はない。妻は何を想い、日々何に喜びを見出し

おり、優しい香りを紡ぎ出していた。

正直なところ、進がハーブの香りに浸ったのはこれが初めてだった。急ぎすぎた人生だったのだろうか……。改めて見過ごしてきたものの重さに驚いた。

夕食となり食堂に入ると、南に面した広い出窓があった。十七年前の記憶が蘇ってきた。様々なハーブが植えられたテラコッタが並び、まばらな客たちを歓迎していた。

「ここもあの時のままね、あなた覚えてます？」

「ああ、白焼きの鉢だけはね」

進は小さな笑みを作り、正直に言った。

妻はあの時と同じように、他の客に交じりハーブの香りを楽しんでいた。

進はふと、隅に置かれた葉っぱが茶色に変色した鉢植えに目がいった。レモンバームと表示されている。すでに人を惹きつける香りがなからか、誰も近づく者はない。

進はなぜか、今にも涸れ落ちそうなその姿から目を逸らすことができなかつた。そつと、生命が昇華したように見える葉っぱに触れてみる。葉っぱは音もなく散り落ちた。

その時、水差しを持った年配の女性が笑みを浮かべながら進のわきに立った。

「ああ、これ、可哀想ですけど、春にはまた芽を出し生い茂ってきます」
女性は慈しむように、水を土にしみこませた。

ブルのわきに立った。

「あなた、何にします。私、コーヒーをいただくわ」

「ああ、俺は十分いただいた。何もいらぬ」
すでにコーヒーは受けつけなくなっていた。楽しい食事ではあったが、何かでラストを飾るといふ気持ちにまでは至らなかった。

「コーヒーをお一つですね。少々お待ちください」

ほどなくしてウェイターが、トレイにコーヒーカップとそれより一回り小さなカップを載せて現われた。

「これはマスターからの気持ちです。レモンバームのハーブティーです。飲まれなくてもけっこうです。香りだけでも奥様とお楽しみください」

小さな水色のカップが、テーブルの中ほどに置かれた。初めて出逢ったような香りが、柔らかに漂った。

進はハツとしてカウンターを振り返った。最初に気づかなかったことを恥じた。抗がん剤で変わり果てた相貌、十七年の歳月を経てもなお、マスターは覚えていてくれた。マスターが一つうなずくと、爽やかな笑顔を送ってきた。美しくも力強く刻まれた皺が、彼の人生を物語っていた。黒々としたリーゼントは白髪に変わり、顎には品のいい髭が蓄えられていた。目の奥にあった鋭さは消え、すべてを包み込むような穏やかな光が湛えられている。

ふいに、言葉が口をついた。

の怪魚を追い続けました」

「そうでしたか、それはお気の毒です……。それで、奥様は助けてくれた魚を釣り上げよう」と――

妻が、愁いの目のまま首をかしげた。

「ご主人なら分かっていただけたと思いますが、主の本当の姿を見るには、残念ながら針にかけるという残酷な手段しかないのです」

「私も分かるような気がします。大切なものだからこそ自分の手にかけたい、という気持ちは、私も息子のことで何か経験しました」

妻が目を細め、静かにうなずいている。

「妻は足を引きずりながら、額に汗を浮かべ、溪谷を遡上しました。主に逢いたい、逢ってお礼がしたいという気持ちがそうさせたことは間違いありませんが、同時に、私と一緒に最後まで、一本の道を歩いて行きたいという希望があったのだらうと思います。けれども妻は、かけがえのないものに遭遇できないまま、旅立って行きました。でも妻は、あのロッドの中で生きております。何かを慈しむ心を忘れない限り、命は永遠なのです」

マスターが、愛おしむように竿に目をやると、進に柔らかな笑みを向けた。

ふいに進の脳裏に、月光の滝で遭遇した巨大な影が蘇ってきた。あれは夢ではない――。自分にはまだ、やり残し

「そうですね、枯れてもまた生き返るのですね……」
「いいえ、これは枯れているのではないのです。ハーブは奥の深い植物です。長年育てていると、枯れるとか終わりという観念がなくなります。輪廻転生とでもいうのでしょうか、誰かが望む限りハーブは永遠に生き続けていくのです」

話が聞こえたのか、妻が近づいてきた。

「あら、珍しいわね。花や植物などに興味を示さなかったあなたが、ハーブのお話に耳を傾けて――」

女性は小さな笑みを残し、去っていった。

妻が進の目の前の、枯れ落ちようとするレモンバームを見つめている。無言で瞬きをする妻の目が、光っているように見えた。

進は妻に何かを言おうとしたが、言葉が浮んでこなかった。

その場を去ろうとした時、妻が驚いたように口を開いた。

「あの釣り竿、誰が使うのかしら？」

妻の視線の先を見て、進も目を見開いた。使い込んだルアー竿が二本、壁に掛けてある。それは、封印をした記憶。進の鼓動が、わずかに速くなった。

「お客様、ラストオーダーの時間となりました。何かご希望のものがあれば」
夕食が終わり、ウェイターが穏やかな笑みを浮かべ、テ

「あのルアー竿、あれはもしかして――」

「はい、私たちのものです。今はこの辺りは全面釣り禁止ですが、昔は私も、取り憑かれたように梓川の魔物を追いかけておりました」

「魔物……」

「まあ、仲間内の愛称ですけど、誰も姿は見たことがない。このホテルによく来ていた女性が川で水遊びをしていた時、熊に襲われました。脚に障害が残りましたが、奇跡的に命は助かりました。仲間の話では、何か熊を淵に引きずり込んで行くのを、確かに見たと」

「何か、ですか……」

「川の主とでもいうのか――。もしかして、お客様も釣りを？」

「ああ、――はい」

「主人は、趣味を通り越して、まるで仕事に行くように――。一度は命を落としそうになって……」

妻が、懐かしくも、寂しそうな表情を見せた。

「釣り師はみな同じですよ。釣りはロマンというより、見えないものとの闘いでしょうか。でも心のどこかで、川の主は誰の針にもかからないことを祈っている。もしかしたら、川の底で息を潜めているのは、何かを追い求める者が作り出した幻想なのかもしれません。実は、その女性は私の妻でした。余命を宣告された体で、最後まで一緒に、幻

たことがある。もう一度、あの滝に行ってみよう……妻と一緒に。主に遭遇することはもう無理かもしれない。それでもいい。せめて最後に、太陽の光の中で、自分が追いかけてきたものが棲む世界と一緒にいることができれば。そして、息子にも伝えてもらいたい。自分も、偽りのない世界で、命を懸けようとしていたことを……。これでやっと、安らかに人生を終わらせることができると、進は思った。また明日から希望の日々が続くようなときめきが、進の胸を突き上げてきた。レモンバームの香りが、心地よく全身に染み込んでくる。進は心の中で、これまでの妻への感謝を噛み締めていた。

「あなた、よかったわね、ここにきて」

良子がそっと、進の手の甲に手の平を添えた。

「ああ、すっかりリフレッシュできた。また明日から頑張らなくっちゃな」

「え、……そうね、明日は白馬の景色を見ながら帰りましょう」

二人はあの日に戻ったように、笑顔を交わし、立ち上がった。



塩崎憲治

しおざき けんじ

1948 北海道生まれ
山形大学工業短大部卒業
2008年外資系企業定年退職
エコアクション21 環境審査員
同人誌「泉」で小説に取り組む
「小説家になろう講座」受講
山形新聞文学賞受賞多数
第11回銀華文学賞入選
現在、環境カウンセラー
山形県米沢市在住

銀華文学賞優秀賞 受賞の言葉 室町眞

小説の書き始めは羅針盤のない漂流船のようなもの。今にも進路を見失おうとした時、銀華文学賞という灯台が見えました。温かな光を頼りに三次通過を重ね、入選をいただいた時は感激に震えました。それが今回、念願を超える難関の賞を頂き、これ以上嬉しいことはありません。銀華文学賞は妥協を許さない文学の礎として貴重な存在かと思えます。この榮譽を忘れずに精進していきます。選考委員の皆様本当にありがとうございます。

短編小説集 雪女郎

原石寛

原石寛氏の作品を読むとその後に立ち上がってくるのは、華やかさの流れの底に沈んでいった美しいものの宿命である。美しさの陰に潜む残酷さである。無数に散り、踏みしだかれて埋められていったものの姿が、三味線の音曲に乗って乱舞する。氏の文学は、生身の女性の美しさとそれを追い、滅んでいく者への鎮魂であり、憎しみと呪詛をも含んだ人間の美の影への鎮めであろう。

アジア文化社

——五十嵐勉

原石寛畢生の短編小説集
1600円（税込／送料共）
御注文はアジア文化社まで

マスク

眞住居明代

夜の静まり返った部屋にミシンを踏む音だけが響いている。時計の針は十一時を少し回ったところだ。明日の朝マスク三〇枚を田中さんに手渡さなければならぬ。マスクなど今まで縫ったことがないから、なかなかはかどらない。がんばればもう少しスピードアップ出来るのだろうが、六十歳も半ばを過ぎた今、集中力も体力も若い頃のようにはいかない。肩は凝るし目もかすむ。それでぼちぼちやっていたら、三〇枚を縫い上げるのに一週間もかかってしまった。

今日は昼過ぎから体調が悪くてソファに寝転びテレビばかりを観ていた。五時を過ぎて熱いコーヒーを飲んだらようやくと並んでいる。一体何事だろうと列の脇をすり抜けてスーパーの入り口のところまで行ってみた。店員が列の先頭の人に「おひとり入れます」と、買い物かごを渡している。入場制限がかかっているのだ。私は最後尾に並ぼうとして、引き返す途中並んでいる人たちの顔を見た。おばあさん、おじいさん、おじさん、おばさん、若い人、若くない人、みんなの顔が暗く緊張している。苛立ちと不穏の黒い渦が人々の間から立ち上つてきそうだ。最後尾までたどり着いた時、私はすっかり人々の後ろに並ぶ氣力を無くしていた。

二〇二〇年三月二日月曜日。先月末、医療生活協同組合の職員が「トイレットペーパーなどの製造元である中国が生産をしていないので品薄になる前に購入したほうがいい」などとツイッターに投稿した。それに連動して「トイレットペーパーとマスクは原材料が同じ」「トイレットペーパーが店頭から消える」などのフェイクニュースが飛び交い、その影響で人々がトイレットペーパーを買おうとスーパーにつめかけているのだ。それに加えて明日から小中高が一斉休校に入る。親たちはその子たちの食べ物調達しにも来ているのだ。

スーパーからの帰り道、私は自宅のトイレットペーパーのストックのことばかりを考えていた。一人暮らしだし

うやく人心地ついた。それで七時のニュースを観ながらミシンを踏み始めたのだ。

体調に浮き沈みがあるのはいつものことだが、今日はたぶん精神的なショックを受けたせいもあると思う。ショックンクな光景を見てしまったのだ。

朝十時を少し回った時のことだ。昼食の食材を買おうとスーパーまで出かけて行った。天気も良かったし歩くにはちょうど良い距離だった。けれどスーパーの駐輪場入り口で足が止まった。いつもは整然と並んでいる自転車道にまで溢れ出している。溢れ出しているのは自転車だけではなく。人も溢れていた。人、人、人、列をなしてず

オッシュレットだからそんなに必要なのではない。それにまだ五個ほど残っている。二週間は持つだろう。トイレットペーパーのために並ぶことに抵抗もあった。プライドのようなものがあるのだ。気分を変えるために行きつけの喫茶店でコーヒーでも飲もうと思った。

カウンターだけのごじんまりした喫茶店には今日も常連さんたちが集まっている。ママに、「スーパーに行列できてるねんよ」と言うと、すでに情報が入っているらしく、「トイレはうちに來てする言うてる客がおるねん。迷惑やわ」と顔をしかめた。角に座っていた地域の防犯委員長のおばあさんが、

「うちらは昔ぼつとんトイレやったし、トイレットペーパーなんかあれへんかった。新聞紙を揉んで使ってたわ」とカラオケで鍛えた野太い声で言う。私の隣の電気屋のおじいさんが、

「わしの田舎は繩をぶら下げて使ってたで」

と言うと、

「どんな山奥やねん」

とママがツッコミを入れ、みんなが爆笑する。

「なあ、いざとなったら新聞紙も縄もあるがな」

「そうや、そうや、わしらは戦後を生き抜いてきたんや。トイレットペーパーひとつで騒ぐことないわ」

と、喫茶店で時間をつぶすしかない年金老人たちが氣勢

をあげた。
私は重かった気持ちがすうっと軽くなって帰路に就いたのだった。

翌日、出来上がったマスクを紙袋に詰め、駅前のお茶店に入っていた。田中さんはもう来ていて隅の席から手を上げた。カウンターで買ったコーヒを持って田中さんの前に座る。

「待った？」

「いや、さっき来たところ」

田中さんは恥ずかしながら私の恋人だ。付き合ってもう三十年以上になる。知り合った頃は二人とも若かったから好いたの惚れたのと大騒ぎをしたが、年月とともに恋情は風化して恋人というより親友のような存在になっている。若い頃、八尾の朝吉と異名をとるほどのやんちゃだったのが、それが嘘のように今ではくたびれたじいさんになってしまった。私より十歳年上の七十六歳だから仕方ないと言えは仕方のないことなのだろう。

「はい、持ってきたよ」

とマスクの入った紙袋を手渡すと両手で嬉しそうに受け取り、膝の上で抱え込んだ。その姿が滑稽で私が笑うと、

「盗られたらあかんし」

と真面目な顔で言った。

とまるで子どものように喜んでる。

今まで田中さんにはいろんなものをプレゼントしてきたが、こんなに喜んでもらったのははじめてだ。

「ひろちゃん、お礼になんか美味しいもん、食べにいこ」と言うことで、お寿司屋さんでウニやイクラなどをご馳走してもらい、気持ちよく家に帰ってきた。

家に帰り着きドアを開けると、飼い犬と飼い猫がもつれ合うようにして玄関まで出迎えに来た。二匹の頭を不公平にならないよう撫で、キッチンに入っていく。二匹にご飯を与えてからテーブルの前に座った。テーブルの上はミシンとマスクを作った材料が散らかっている。それを片付けレジンの道具を出した。今からブローチを作るのだ。

私は手作りが好きだ。粘土をこねて焼いたり、布製品のバッグを作ったり、動物のぬいぐるみを作ったり、いろんなものを作っては近所のレンタルボックスを借りて販売させてもらっている。レンタルボックス屋さんというのは、三〇センチ四方ほどのボックスを並べて、私のようにハンドメイドをする人の作品を展示販売しているお店のことだ。

ボックスの賃借料が月千五百円、作品が売れた時は売り上げの二〇%を店に支払う。しかしながら今まで千五百円の賃料分さえ売れた試しがない。素人の作ったブローチやぬいぐるみを買う人などそうそういないのだ。作るためには材料がいる。材料を買うにはお金がいる。でも売れないか

それほどマスク不足は深刻なのだった。連日朝早くからドラッグストアに長蛇の列が出来る。それでも全員には行き渡らない。

田中さんがいつも高そうなマスクをしているから潤沢に持っているのだと思っていたら、やはりドラッグストアの前に並んでいると聞いてびっくりした。

「並んでも買われへんかってん」

と先日やっと私に打ち明けた。こんなじいさんが寒空の下、マスク欲しさにドラッグストアに並んでいる。心臓の基礎疾患を持っているからよほど感染が怖いのだ。私がついていながらそんな思いをさせていた。胸がずきんと傷んだ。

「心配せんでいいよ。私が作ってあげる」

そう宣言すると、ネットでマスクの作り方を検索した。マスクには不織布とやらがいらしい。さっそくネットで不織布五〇枚入りを取り寄せ、百均で五センチ幅のゴムを五つ買った。ノーズワイヤーはどこにも売っていなかったので園芸用のワイヤーで代用した。

見よう見まねでまず一枚作ってみる。顔につけるとフィットしてなかなかいい。それからはマスク作りに専念して今日やっと田中さんに渡すことが出来たのだ。

「帰りにドラッグストアの前通ったら、鼻先でふんて言うたる」

ら作れば作るほど赤字になる。それでも定年退職をしてから特にするのもないので、毎日飽きもせず売れない作品を作り続けている。

レジンの液を型に流しながらふと思いついて手を止めた。ブローチの代わりにマスクを置いたらどうだろう。マスク不足は深刻だ。二月に政府が数億枚のマスクを流通させると発表していたのに、その話もいつの間にか立ち消えてしまった。医療機関でさえ不足しているという。それに田中さんはあんなに喜んでいたではないか。

そう思い立つとレジンの道具を片付け、再びミシンとマスクの材料をテーブルに並べた。ミシンの前に不織布、ワイヤー、ゴム紐を用意する。まず二五センチ四方の不織布を半分に切り、それを二つ折りにする。端を縫って筒状にし裏返す。ノーズワイヤーをいれ上からミシンをかけて固定し、ひだを寄せてゴムを縫い付ける。

慣れてきたせいか一分で一枚できた。一時間ほどすると四枚のマスクが出来上がった。販売するとしたら一枚百円が妥当な価格だろう。

翌日それを一つ一つ透明な袋に詰めて店に持って行った。店主は私のマスクを見るなり目の色を変えた。店にいた客も寄ってきた。

「これ、私が買うわ」

店主が言う。客はすでに横から三枚を手にとって離さな

※レジン (Resin) / 英語で樹脂を指す。日本語では、レジン は天然樹脂と合成樹脂の総称として使われている。透明感のあるアクセサリ素材が多い。

い。店主と客が話し合い二枚ずつ分けることになって、私のマスクは数秒で完売した。

「ね、明日も持ってきてよ」

と店主が言う。目鼻の小さい平凡な顔立ちにおかっぱ頭の七十前のおばさんだ。

「はい、わかりました」と答へ、早速マスク作りを始めた。

翌日一〇枚のマスクを納品しホッとしていると、夕方には「売り切れたので明日はなるべくたくさん持ってきて欲しい」と連絡が入った。

売れないハンドメイド作家の私にとってそれは衝撃的な出来事だった。今までは一ヶ月に一個か二個、あるいは全く売れない月もあったのに、自分の作ったものが飛ぶように売れたのだ。こんな嬉しいことはなかった。私は必要とされている。そう思った。私にとって生まれて初めての経験だった。

「今日は何枚もってこれる?」

せつづくように毎日店主から電話が入る。最初は私の都合も聞いてくれていたのに、

「明日は二〇枚持ってきて」

と次第に命令口調になってきた。

テレビでは連日、感染者増加のニュースが流れ、日本だけでなく世界中が目に見えぬものの恐怖に怯えていた。

ね」

と電話で矢継ぎ早にまくしたてる。私はメモをとる時間もなかった。なんとなく不穏なものを感じたのでメールで注文を文字にして店主に送信した。店主からは「それでよろしく」と返信が来た。

翌日店主の注文した品物を持っていくと、それを手に取りながら、

「これが五百円ねえ」

とため息をついた。私にはそれが決して高いとは思えない。

「他でももっと高いと思うんですけど」

ネットで布マスクは二千円三千円の値がついているの

だ。

「じゃあ、他に持って行けばいいじゃないの」

店主の口調が突然変わった。

「うちは古着とか古道具とかの安物売る店なのよ。高く

で売りたいなら他の店に行つてよ」

私は驚いて店主の顔を見た。そして、

「注文されたから持ってきたんですけど」と顔色を伺いながらも弱々しく抗議した。

「あなた、見てごらんさいよ。店の前の道。誰も通っていないやないの」

店主が金切り声を上げる。いったいなんなのだ。私は店

そんな中、今年もこの街に相撲部屋がやって来た。毎年春になると、あちこちに力士の姿が見られ、鬢付け油の甘い匂いが街に溢れる。のほろが春風にそよぎ、喫茶店や居酒屋には鼠^{ねずみ}の力士の手形が貼られ、小さな谷町たちが朝稽古を見学したり差し入れをしたり部屋主催のパーティーに参加したりして、こぞって力士たちを応援する。

けれども今年は外出制限がかかっているため店々に力士の姿はなく、私の通う喫茶店でも春場所はどうなるかという話題で持ちきりだった。そして無観客で開催、もし一人でも感染者が出たら取りやめるというニュースを複雑な思いで受け止めていた。選抜高校野球も中止になり、続いても様々なスポーツイベントも中止になった。そんな世相の中でも、東京オリンピックは開催するという強硬な政府の姿勢に私はうんざりしていた。こんな状況で一体どうやって開催するのだ。海外から人がやってくるとでも思っているのか。

そんな怒りにも似た思いを抱えながらも、私は店主の注文にそって毎日忠実にミシンを踏み続けていた。

ある日、店主が、

「私の孫のマスク作つてよ。布マスクにしてね。彼のラックキーカラーはブルーだからブルーで五枚。それにグレイも五枚。顔が大きいから左右に一センチずつ出して。至急に

主の指さした方を見た。数人の人が歩いているのが見える。政府からは自粛要請が出ていたから確かに人通りは少ないのかも知れないが、それが普段より少ないのかどうかに私にはわからない。

「私は感染するのが怖いよ」

唐突に店主が言った。

「この店でもし感染者出して新聞にでも載つてごらんさいよ。私、この街に住んでいられないわよ」

確かに最近この街の二つの病院から感染者が出ていた。一つは地域の基幹病院の患者、もう一つは個人病院の看護師。その人には子供がいるとも報道されていた。

「この店に感染した人が来て、もしうつつたりしたらどうするのよ。私は高齢者だから死ぬかも知れないじゃないの」

店主が叫ぶ。その目には恐怖の色があった。

「あの、でもこのマスクは注文されたと思うんですけど」

「私は店閉めるのよ。こんな状況でやってられると思う?」もうこれ以上話しても無駄だと思った。それで私は引き取つてもらえなかったマスクを抱えて店を出た。悔し涙が目にはじんだ。

歩きながら、あの人は狂っているのではないかと思つた。あの目は正常な人の瞳ではなかった。

翌日、店主から、

「店を閉めるから、ボックスの品物を取りに来てください」

と電話があった。

それからの私の落ち込みようはひどかった。マスクを作りそれが売れて世の中のためになっている、という高揚感があったからこそコロナ禍の渦に飲みこまれず元気で生きてこられたのだ。心の張りを失うことが怖かった。ネット販売しようと準備したが、マスク販売禁止法が発令され、過敏反応したネット事業者が手作りマスクの販売を取りやめていた。私はすっかり気落ちし寝込んでしまった。

そんな私を見かねて田中さんが食事に誘い出してくれた。

駅前の居酒屋に入り、温かい芋焼酎を注文した。それをちびちび飲んでみると、次第に固まっていた体の緊張が解けて涙がほろりと頬に落ちた。

「なあ、ひろちゃん」

田中さんが切り出した。

「ひろちゃんがマスク作りで張り切ってたからぼく言い出しにくかってんけど」

「うん、何？」

「あんな、ぼく、会の親しい連中にマスク配りたいねん。

二百枚、作ってくれへん？」

「へ？」

田中さんは今ではしよぼくれたじいさんだけれど、若い時は大きな事務所を構えていて、その業界の大阪支部会長

をしていたこともあったのだ。だから第一線を退いた今でも知り合いは多い。

「作ってくれる？」

「つ、つ、つくる。つくる、ぜったいつくる」

私は狂喜した。なくしてしまった生きがいがまた戻ってきたのだ。

「一枚百円でどう？」

「いらん。いらん。無償でいいよ」

「まあ、材料費だけでもとつといて」と田中さんは私の手に一万円を握らせた。

でも、私の欲しいのはお金ではなく生きがいなのだ。金なら年金でなんとか食っていける。マスクでお金を稼ぐより、自分のすることが世の中のためになっていると言う自己満足の方がずっと大切なのだ。

その夜から私はふたたびミシンを踏み始めた。レンタルボックスで売るつもりだったから材料はたくさんあった。

一連の作業を繰り返しているうちに一枚が一〇分で仕上がるようになった。毎日ミシンを踏み続け一週間で二〇〇枚を田中さんに手渡すことができた。

「ふつうのマスクよりずっと使いやすいし肌触りもいいって言ってるで」

「あげた人、めっちゃ喜んでたで」

「お礼に言うて飯ご馳走してくれた」

嬉しい知らせが田中さんから次々と入る。その度に心はぼっと明るい火が灯った。

今日もまたドラッグストアの前に朝早くからマスクを買い求める人の長蛇の列ができています。自分の作るマスクが人の役に立つことが実感としてわかった今、なにか出来ることはないだろうか。そうだ、ドラッグストアの前でマスクを配ったらどうだろう。田中さんに相談すると、

「やめとき。殺されるで」

と返事が来た。心配性らしい田中さんの答えだ。まあ殺されることはないにしても、なんらかのトラブルに巻き込まれる可能性はある。ツイッターなどで、「マスクが買えなくてもドラッグストアの店員を罵倒しないでください」

「入って来た商品売るだけなのです。私たちにはどうしようもないのです」と言ったツイートを何度か見かけた。

今の群集心理が怖かった。

駅の向こう側にもレンタルボックスをやっている店があるのを思い出し、行ってみようと自転車で出かけて行っただ。幸運にも空きボックスがあり、翌日からマスクを置かせてもらうことになった。店主はやはり高齢の女性だったが情緒が安定していそうだったので安心した。この人ならコロナが怖いと叫ぶこともなさそうだ。

テレビでは連日マスク不足が報道される一方、マスクの

効果は期待できないと言う専門家の意見もあった。私のやっているマスク作りは無為だけでなく危険なことではないのかと心が揺れ始めていた。マスクの効果がないのであれば、それを過信するとかえって危険ではないだろうか。

「なあ、私のやってることこれいいんやろうか」

私は駅前の喫茶店に田中さん呼び出して相談してみた。

「僕は役に立ってると思うで」

「うん、でも一日何時間もずうっとミシンを踏み続けているとな、なんかすっごう不安になってくるねん。私のやってることは間違ってるんちゃうかって」

コーヒーマップをこごとんとソーサーに置くと田中さんは私の顔を真っ直ぐ見た。

「僕はな、マスクは効果あると思うからみんなに配ってるねん。しないよりした方がずっと安心やし、マスクなしで外歩いてみ。不安で不安でしゃあないで。自己防衛やし安心感あるし、私はコロナ他人にうつしません、害を及ぼしませんっていう意思表示になるねん。社会の一員として生きるための許可証のようなもんやで」

田中さんの言葉には力がこもっている。

「じゃあ、私のやってること、間違っていないよね」

田中さんはこくと大きく首を縦に振った。

家に帰り、私自身もネットで色々調べてみた。その中の

一つに、

『ウイルスの大きさは0.1マイクロメートル、不織布マスクの穴は5マイクロメートル、もちろんウイルスの侵入を完全に防ぐことはできないが、浮遊するウイルスをキヤッチするフィルター効果はある』

との記事を見つけやっとな得できた。私の作っている二枚重ねの不織布マスクは完璧ではないにしてもフィルターの効果は果たしているのだ。それに引き換え、『布マスクは穴が大きくてフィルター効果はない』とも付記されていた。

私はさらにフィルター効果を高めるべく、ネットで不織布ガーゼを取り寄せ、マスクの中に挟めるようにした。

暖冬で例年より一週間ほど開花を早めた桜は、東京では三月の三連休でほぼ満開となった。それに先立って三月十一日WHOがパンデミック宣言を出し、ヨーロッパ諸国でも感染は爆発的なものとなっていた。一方日本では自粛疲れという言葉で、東京の花の名所や遊園地には人が溢れた。何かしらコロナ禍が一段落したような緩んだ雰囲気は日本中にあった。けれど、三月二十四日、オリンピックの翌年延期が発表され、同月二十九日、新型コロナウイルス感染症で志村けんが死去した。日々増加し続けるグラフ上での感染者数やテレビ画面で見るイタリアの医療崩壊現場

されず、「いいね」を二つもらっただけで済んだ。

新しいレンタルボックスの店主との相性はとても良かった。彼女自身は洋裁のプロだったし、いつ行っても店のカウンターの途中で家族や親戚のためにマスクを手縫いしていた。それは艶のある上等そうな生地の上に刺繍を入れたとてもチャーミングなマスクだった。

最初は売れなかった私のマスクも徐々に口コミで広がっていき、納品すればすぐに完売するようになった。店主からは前の店主と同じように日々注文が来た。

「お客さんがまとめて三〇枚欲しいって言ってるのよ。明日持ってこれますか？」

「あと二〇枚お願いします」

「売り切れました。明日また納品してください」とメールが相次いだ。

私がツイッターでマスクを作っているのを知ったフォロワーさんからも、売ってくださいとDMが来た。田中さんから百枚の追加注文がきた。

私は嬉々として朝から晩までミシンを踏み続けた。けれども歳のせいも、一時間もミシンを踏み続けていると疲れが体にジーンと染み込んでくる。それでソファで横になり、少し楽になるとまたミシンを踏んだ。夜になると力を入れた人差し指がじんじん熱を持ち、ミシンのペダルを踏む

より、身近なお笑いタレントが発病よりたった二週間足らずで亡くなってしまったと言うことが、日本人のコロナに対する危機感を実感させたのではないかと私は思った。

そんな折、安倍総理の肝いりで国が各家庭に布マスクを二枚配布するというニュースを観たのだった。え、布マスク？ ウイルス通すじゃないの。私は驚いた。驚きは腹にずしんと落ちて、重い怒りとなって体を熱くした。そんな危険なマスクを四六六億円も投じて国民に郵送する？ それも二枚、たったの二枚？

そして総理自身がそのマスクをしているのを見て思わず叫んでしまった。

「ちっこい！」

あまりにも小さすぎる。顎が出ている。喋るたびに唇がはみ出しそう。ほおの部分の露出も大きすぎる。

堪えきれず私はツイッターに書き込んでしまった。

「アベノマスクって、ガーゼは目が荒くてフィルターの役目を果たさないですよ（汗）。マスク本体も小さすぎるから上下と左右に1センチずつ出さなきゃだめだし、鼻の両横も隙間だらけだから、そこからウイルス入ります。その隙間をなくすためにワイヤーを入れなきゃいけないと、マスクオタクは思います。（涙）」

文面は出来るだけ怒りを抑えたので、ネトウヨから攻撃

足の親指が激しく痛んだ。

私は自分でも愚鈍な性格という自覚があつて、それですつと劣等感を感じてきたのだが、そのマイナスの性格が今度ばかりは役に立った。マスクを作るために毎日何時間もミシンを踏み続け、同じ工程を何百回も繰り返す。それは愚鈍だから出来ることであつた。もし私が馬鹿ではなく、頭が良くて行動的な人間なら、決してこんな単調な仕事は出来ないだろうと思つた。

生まれて初めて自分の欠点が世の中の役に立ったのだ。それは今までの人生観が逆転するほどの自信を私にもたらした。

出来る上がるマスクの量に反比例して在庫の材料はどんどんと減っていく。それでネットで注文しようと検索した。まずは不織布。ネットで販売しているのは一パック七百円ほどで、それで百枚のマスクを作れる。三パックほど注文しておいた方がいいだろう。注文画面で数量を3にするがすぐに1に戻ってしまう。何度も繰り返してその理由が分かった。数量制限がかかっているのだ。不織布でマスクを作っているのは何も私だけではないのだろう。その人たちからの注文が殺到しているに違いない。私は焦つた。不織布がなければマスクは作れない。

シヨップを渡り歩き、ようやく制限はまだかかっていな

いけれど割高の品物を見つけ、三パックオーダーしてホッとした。高くてもないよりはるかにマシだ。

次に耳にかけるゴム紐を検索する。今までは百均の平ゴムを棚にあるだけ買って間に合わせていた。それを使い果たすと街なかの大きな手芸品店に行つて大量に仕入れて来た。けれどそれも残り少なくなっている。

しかしゴム紐はすっかり売り切れていた。どのサイトに行つてもどこも売り切れなのだ。ドラッグストアでは手に入らないので、皆がマスクを手作りするようになったのだらう。でもまあいいか、と私は思った。明日いつもの手芸品店に出かけて行つて買えばいいのだ。以前そこで買った時には大量のゴム紐があったのだから。

政府から不要不急の外出はしないようにと要請がかかっていたので、私はゴム紐を買えばすぐに帰ろうと足早に店に向かった。電車を二回乗り継いでたどり着いたが、電車には普段の半分にも満たない人しか乗っていなかった。店に入ると私は脇目も振らず真つ直ぐにゴム紐売り場に向かった。そこで私は空になった箱を見つけた。ゴム紐は全て売り切れていた。

中を満たすものがない灰色の箱は、言いようのない焦りを私に運んできた。普段あるべきものがそこにない。その空虚さは目から脳内に染み込み、激しい飢餓感となつて全

今必要なのは、マスクだ。ゴム紐だ。ゴムがなければ生きていけない。

それから私は百均や手芸品店をいくつもいくつも渡り歩いた。ゴム紐は全て売り切れていた。

重い足をひきずり肩を落としてながら地下街をふらふらと歩く。行き交う人々は皆マスクを求め幽鬼のように彷徨っている。マスクがなければ感染してしまふ。マスクが欲しい。マスクがなければ生き残れない。

待つていて。私は叫ぶ。私が必ず作るから。私があなたちをウイルスから守るから。でも、ゴムがない。どうしても手に入らない。だからマスクが作れない。なんとかしないといけないのに、どうしようもない。ああ、マスクを作らなきゃいけないのに。

不意に酸っぱいものが喉元にせり上がってきた。私はトイレに駆け込むと便器にしがみついた。けれど吐くものなどなかった。朝から何も食べていないのだ。喉に指を突っ込み無理やり胃液を絞り出す。涙を流しながら何度も何度も絞り出した。出るものがなくなると、手の甲で口を拭つてドアを出た。手洗いで口をすすいで顔をあげる。その時鏡の中にひとりの女が映り込んでいるのに気付いた。知らない女だ。艶のないばさばした髪、化粧つきのない黄色くしなびた肌のところどころにシミが浮き出ている。生気のないその顔の瞳の部分だけが異様な光を放っている。そ

身に広がっていった。

ゴムがない。ゴムがなければマスクは作れない。そのことは暗い現実世界の中で辛うじて私を支えていた生きがいを見失うことだ。マスクを作らなければ世間を覆っているコロナ禍の渦の中に巻き込まれてしまふ。

私は半ば走るようにして地下鉄に乗り込むと、他の手芸品店に向かった。人目につきにくい小さな店ならあるかも知れない。ようやく店にたどり着きゴム紐売り場に向かった。そこにもゴム紐はなかった。全てが売り切れていた。空っぽの棚の周囲には、色とりどりの美しい布や毛糸が山のように積まれている。いつも私の目を楽しませ、これでも何を作ろうかと胸弾ませてくれた布や毛糸。今、こんなものがなんの役に立つというのだ。美しい服やお洒落なセーターなど、感染に怯える日々の中、誰が楽しむのだろう。その時、イタリアの一人の市長の言葉が頭に蘇った。『いくらきれいになつても棺桶に入つたら一体誰が見る?』美しく着飾つて街なかを楽しく歩き回る時代は終わったのだ。友人とお茶を飲み、冗談を言つては笑い転げ、好きな映画を観、ライブにいき、図書館で本を選び、美術館で名画に触れ、ジムで汗を流し、仲間と飲み会をし、子供の誕生日を祝い、見知らぬ土地を旅し、人と人が近づき親しみ話し笑い触れ合い愛し合う。

そんな時代は過ぎ去ってしまった。

れはどこかで見たことがある瞳だ。そう、あの時だ。一ヶ月前、トイレットペーパーを買うために並んでいた人たち。あの人たちの中に見た瞳だ。「感染が怖いのだよ」と叫んだ店主の瞳だ。不安で、怖くて、不信いっぱい、そして何かに取り憑かれたような瞳。瞳の中の異様な光に鋭く心を射抜かれて 私は鏡の前に呆然と立ち尽くしていた。

その日の夕刻、二〇二〇年四月七日、大阪を含む七つの都府県に緊急事態宣言が発出された。

私はソファに寝転びながら、力なくそのニュースを聞いて

☆「文芸思潮」は下記の書店で店頭販売されております。

【東京】
 ジュンク堂池袋本店
 紀伊國屋書店新宿本店
 【山梨】
 山梨朗月堂書店
 【大阪】
 MARUZEN & ジュンク堂梅田店
 【鹿児島】
 丸善ジュンク堂鹿児島天文館店
 【インターネット】
 アマゾン

ていた。落ち込みはひどい。

夜はベッドに入っても眠れなかった。体は眠りを欲しているのに神経がピンと緊張していて安らかな眠りは訪れてくれない。

仕方なしに台所に行きウイスキーの瓶に口をつけて一気に喉に流し込む。焼けるような塊が喉元から胃に落ちていき一瞬緊張が解ける。それでうとうととするがまた目が覚める。そんな事を繰り返し、朝を迎えた。

起き上がるが、寝不足とウイスキーのせいで体が重く熱っぽい。トーストを焼き、バターの上にジャムをたっぷり塗る。ドリップ式のフィルターにホットミルクを注ぎカフェオレにして砂糖を二杯入れる。口の中でトーストがもそもそと味けない。コーヒーを飲んでも香りがなく甘くもない。

マスクを作らなければならないと言う気持ちに押されてミシンの前に座った。けれど残ったゴム紐で作れるマスクはわずか。これでは自分の分でさえ足りない。

田中さんに相談してみようと電話を入れた。十回ほど呼び出し音が鳴ってやっと田中さんが出た。

「あ、はい」

寝ぼけたような声だ。

「どうしたん？ 寝てたん？」

「うん、なんか体がだるくて。熱もあるみたいやし」

田中さんが咳をする。ちょっと嫌な感じがした。

店に近づくと大きな笑い声が聞こえてきた。

「いらっしやい」

ママの明るい声が迎えてくれる。

「どうしたん？ うつとおしい顔して」

ママが聞く。

「うん、ゴム紐がどこも売り切れで、マスクを作られへんねん」

そう言うと、防犯委員長のおばあさんが、

「何言うてんのん。マスクなんかなくてもコロナは気合やしっっかり食べて寝て、こうやってみんな楽しんで喋りつつたらコロナなんて向こうから逃げて行くわ」

隣のおじいさんも、

「あんたみたいにしょぼくれとつたらコロナのつけ入る隙が出来るねん。しっっかり気を持たなあかんで」

と肩を叩いてくれた。

「そうや、そうや。わいらはすいとんや草の根を食って戦後生き抜いてきてんで。見てみ。ここでは誰もマスクなんかしてないやろ。マスクなんかただの気休めや」

それを聞いてママが、

「何言うてんのん。みんなマスクせえへんから席の数減らして間空けてるやろ。うちの店かてそれなりの感染対策してるねんで。ひろちゃんもマスク、マスク言いな。そんなんをマスク病って言うんや」

「医者に行ったら？」

「うん、電話したけどなかなか繋がれへんかってん。やつと繋がったんで、熱があつて咳が出る、って言ったら、その状態が四日間続いたらもう一回電話してみてください、やて」

「二ユースで言ってたとおりのやね」

「うん、まあ、寝とつたら治ると思うから寝とくわ。医者に行くの怖いしな」

「うん、コロナの患者がいるかもしれないしね」

田中さんも私と同様、一人暮らした。普段は気楽でいいが、こんな時は心配でたまらない。

「今から行くわ」

「来なくていいよ。ぼくがコロナやった場合、ひろちゃんに感染したらあかんしな」

励まされなければならないのに、不安だけが心に募り言葉が出てこない。

「また電話するわ。熱下がってなかったら食べ物持って行くし」

「うん、頼むわ」

なんかあつたら電話してね、と電話を切った。しばらくぼうつとしていたが、喫茶店にでも行こうと気を取り直した。あそこには威勢の良い常連客たちが集まっている。元気をもらえるだろう。

励まされているのかいじめられているのかよく分からなままコーヒーを飲み、家に帰ってきた。気持ちは元気になったが体は熱っぽいまま。昼食をとった後、横になったらそのまま寝てしまった。

目が覚めるとすでに薄い夕闇が部屋に広がっている。五時間も寝てしまったのだ。一体どうなっているのか。夕食の買い出しに行かなくてはと起き上がったが、体がだるくすぐソファに倒れ込んでしまった。その拍子にこん、と咳が出た。それをきっかけにこんこんと立て続けに咳き込んだ。熱を計ると三十八度を越している。まさか。

田中さんに電話を入れた。呼び出し音が鳴るだけで田中さんは出ない。しばらくしてもう一度かけ直す。

耳に虚しく呼び出し音が響くだけで、田中さんは出ない。電話を切って薄暗い部屋の中をぼんやりと見回してみる。作りかけのマスクがその白い姿を薄闇の中に浮かび上がらせている。近づいて手にとってみた。大丈夫と咳く。このマスクが田中さんや私をコロナから守ってくれる。田中さんもそう言ったじゃないか。私だって信じている。信じているからこそ作り続けてきたのだ。

体が熱い。マスクを持った私の指先が小刻みに震え始めた。

あなたも 文藝家協会に入りませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立 90 年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

公益社団法人 日本文藝家協会

〒102-8559

東京都千代田区紀尾井町 文藝春秋ビル新館 5F

☎ 03-3265-9657 bungei@bungeika.or.jp

<http://www.bungeika.or.jp/>



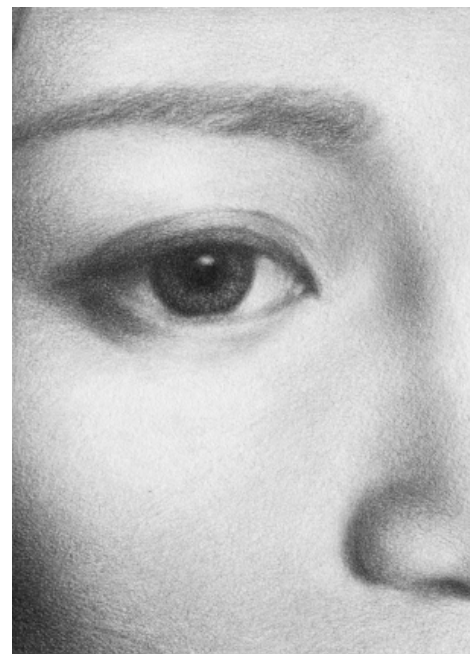
眞住居明代

ますい あきよ

1953 大分県佐伯市生まれ
大阪府東大阪市在住
英文科卒業後、全日空 CA
奉仕団体事務局、専門学校講師
などを経て現在無職
「老人文学」^{プロ}、官能小説コレクション「夜咲う花たち」主宰

銀華文学賞優秀賞 受賞の言葉 眞住居明代

もともとは違う小説を応募するつもりだった。いざ応募する段になって「今しか書けないものを書くべき」と思いたち、締め切り直前の数日でこの小説を書き上げた。しかし現実の重さに足を引っ張られ、小説世界に浮き上がるこゝとができず、ほぼ現実と地続きのような小説になってしまった。それを小説世界にまで浮き上がらせてくださった選考委員の皆様は心からのお礼を申し上げます。いつかの小説を孫の世代が読んで、「そんな時代もあったのね」と言い合う明るい未来があることを祈りながら。——コロナ禍の只中で。



小説の書き方を体験を踏まえて丁寧に解説する小説指導書

小説の書き方

作家を志す人のために

小説作法 改訂増刷版

五十嵐 勉

送料共 1000 円 (税込)

御注文はアジア文化社まで

イラスト／兒玉直和